

第 1 2 7 季 版

稗田文芸賞 メッ 文斬り!

受賞作はそれですか？編

幻想郷文芸振興会

稗田阿求 編
浅木原忍 著
すけひろゆう 画

稗田文芸賞
メツタ斬り！
第127季版

稗田阿求 編



稗田文芸賞歴代受賞者



第1回 パチュリー・ノーレッジ
『魔法図書館は動かない』



第2回 西行寺幽々子
『桜の下に沈む夢』



第3回 上白沢慧音
『満月を喰らう獣』

第4回 虹川月音
『レインボウ・シンフォニー』



第4回 白岩怜
『雪桜の街』

第5回 八坂神奈子
『天照戦記 蛙は口ゆえ蛇に吞まるる』



第7回 風見幽香
『輪廻の花』

第8回 河城にとり
『雲上の虹をめざして』



第8回 黒谷ヤマメ
『土の家』

第9回 古明地さとり
『六花』



稗田文芸賞とは、幻想郷文芸振興会が主催する、優れた小説作品を対象とした文学賞。後援は稗田出版社と文々。新聞。

■概要

幻想郷における文芸の振興を目的として、第一一八季より創設。毎年睦月から師走までの間に発行された小説作品から候補作が選定される。受賞者には正賞として盾、副賞として賞金五十貫文が贈られる。なお、一度受賞した作家の重複受賞は不可。

毎年師走中旬に候補作が発表され、下旬に行われる選考会において選考委員の合議により受賞が決定する。受賞作の発表は文々。新聞紙上にて行われる。

現在（第十回時点）の選考委員は稗田阿求、射命丸文、パチュリー・ノーレッジ、西行寺幽幽子、上白沢慧音、八雲藍の六名。

第一回から第七回までに關しては、稗田阿求編『稗田文芸賞メッタ斬り!』に、第八回と第九回に關しては同『稗田文芸賞メッタ斬り!リターンズ』（ともに幻想郷文芸振興会刊）に、それぞれ詳しい。

序

前作『稗田文芸賞メッタ斬り！リターンズ』から一年余り。

周辺文学賞の乱立、文芸イベントの増加など、ますますもって拡大の一途を辿る、幻想郷の文芸ブームの要請により、早くもここにシリーズ第三弾をお送りすることになった。

何やら、このシリーズを幻想郷の文芸年鑑として、年一冊のシリーズ化を目論んでいるというような噂も聞こえるが、編者としては、ただ本書が前作、前々作に引き続き、読者諸兄の豊かな読書ライフの手引きとなることのみを願ってやまない。

さて、本書の内容についてに移ろう。

本書は《第127季版》をタイトルに冠する通り、第一二七季の一年間における幻想郷の文学賞の動向を総括的にまとめたものである。具体的には、夏の第二回八坂神奈子賞、秋の第二回幻想郷恋愛文学賞、そして冬の第十回稗田文芸賞の話題が、本書の中心となる。

前作に引き続き、稗田児童文芸賞については本書ではあまり詳しくは触れないので、そちらは上白沢慧音編『第二回稗田児童文芸賞総覧』（稗田出版刊）をご参照いただきたい。

巻頭には第八回稗田文芸賞受賞者のふたりを、後半には第十回稗田文芸賞受賞者と候補者を招いての《メツタ斬り！トークショー》の模様を、それぞれ収録させていた。また、巻末には稗田文芸賞の十周年を記念し、博麗霊夢氏、伊吹萃香氏のメツタ斬りコンビによる、歴代の稗田文芸賞全受賞作・候補作、およびその他文学賞の受賞作・候補作の全採点というたいへんな労作をご寄稿いただいた。この一年間の幻想郷文芸の総覧として、また稗田文芸賞十年の歴史として、今回も充実の内容になったことを保証する。お楽しみいただければ幸いである。

今回も本書の発行に向けて各方面から多大なご助力をいただいた。博麗霊夢、伊吹萃香、射命丸文、姫海棠はたての四氏には、今回も感謝の念が絶えない。

本は読まれなければ無用の長物である。幻想郷最大の書店《霧雨書店》を運営することで、文芸文化をこの地に根付かせた功労者である霧雨理一・森近霖之助の両氏、及び店員の朱鷺子氏。また予選委員として影から稗田文芸賞を支え続け、安価な貸本により幅広い読者層の開拓に貢献した貸本屋《鈴奈庵》店主・本居小鈴氏に、あわせて厚く御礼申し上げます。

第一二八季 皐月
幻想郷文芸振興会副代表 稗田阿求

序—稗田阿求	…006
巻頭トークショー 「受賞作家大いに怒る」	…009
第二回八坂神奈子賞 選考会実録	…039
第二回幻想郷恋愛文学賞 選考委員座談会	…083
第十回稗田文芸賞 メツタ斬り！&選評	…099
巻末トークショー 「受賞作家大いに唸る」	…137
あとがきがわりに ——決定！第一回メツタ斬り大賞	…156
作品別索引	…160
巻末特別付録 《文学賞の値うち》	…162

《司会》

博麗霊夢 (博麗神社代表)

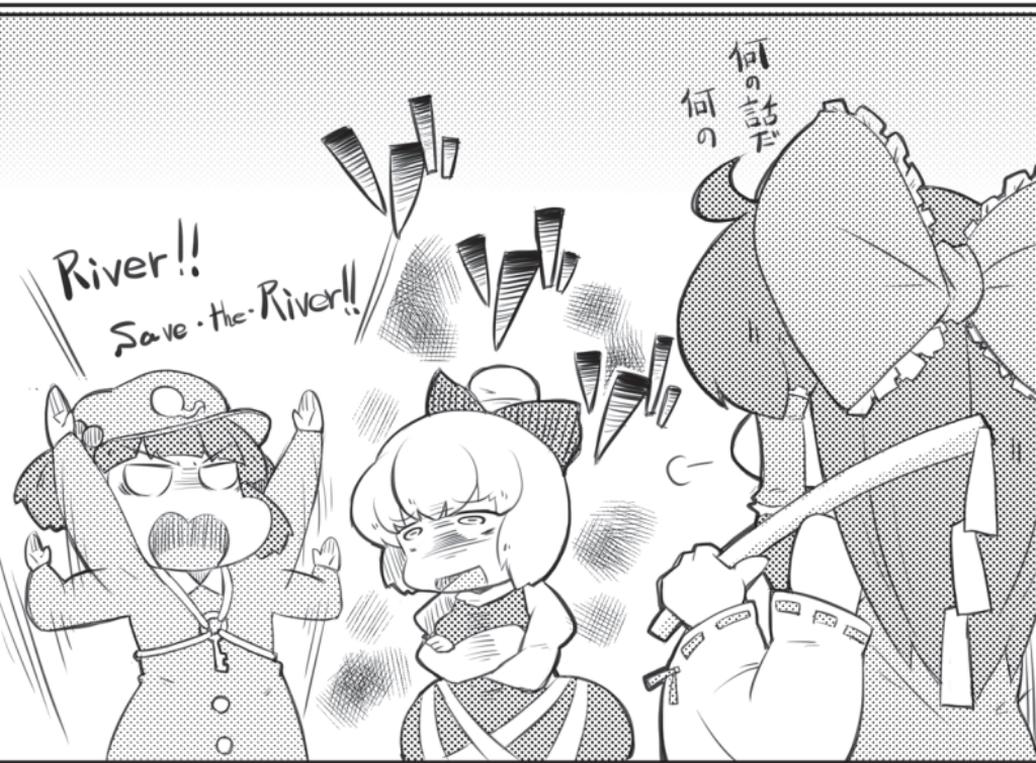
伊吹萃香 (書評家)

「受賞作家 大いに怒る」 巻頭トークショー

《ゲスト》

河城にとり (作家)

黒谷ヤマメ (作家)



◆ 第一 部 ◆

伊吹萃香（以下萃香） いやはや、前回の大雨に続いて、今度は大風だよ。

博麗霊夢（以下霊夢） 時季外れの台風でも来てるのかしら？ それともどっかの現人神が浮かれて神風でも吹かせまくってるのかしら。はた迷惑だから退治しに行つてやろうかしら。

萃香 まあまあ（笑）。しかし、唐傘お化けが吹き飛ばされるようなこの大風の中だつてのに、また今回もよくお客さんが集まったもんだね。みなさん大丈夫ー？

霊夢 ま、弾幕ごっこの見物に比べたら、大風ぐらいどつてことないでしょ。

萃香 そういふ問題なのかなあ（苦笑）。あ、ところで今回も訊いてみようかな。えーと、お客さん方の中で、今日は私たちメツタ斬りコンビがお目当てでいらした方、拳手お願いしまーす。（いくつか手が挙がる）やー、どうもどうも、これからもごひいきに。

霊夢 相変わらず物好きだこと。

萃香 そう言いなさんなつての（苦笑）。さて、というわけで今回は、約一年ぶりの『稗田文芸賞メツタ斬り！』スペシャルトークショー。第四回受賞者の白岩怜さん、虹川月音さんを招いた前回に続いて、今回も受賞者を約二名ゲストとして招いて、稗田文芸賞について色々語つていただこうと思うわけですが。

霊夢 今回はわりと最近の奴呼んできたのね。というか、この二人一緒に呼んで大丈夫なの？
授賞式でも派手に揉めてなかった？（※註1）

萃香 いやー、そこはほら、揉めるぐらいがトークショー的には美味しいってことで。あ、今回のゲストにはお互いもうひとりのゲストについては教えてないから、対面の瞬間までそこはバラさない方針で（笑）。

霊夢 大丈夫なのかしらねえ。あんたら、危なくなったらさっさと逃げなさいよ。（場内笑）
萃香 はい、というわけでまずは今日のゲスト一人目、第八回稗田文芸賞受賞作家、河城にとりさんにご登場願います。どうぞー。（河城登場）

河城にとり（以下河城） あ、どもども……ひゅいひゅい!? いやちょっと人間多すぎ!

霊夢 そりゃ、ここ人間の里なんだから当たり前じゃない。

河城 こんなに多いなんて聞いてないよ!

萃香 はいはい、落ち着いて落ち着いて。

河城 ひゅい、い、伊吹様！（※註2）

萃香 いやそんな畏まらないでおくれよ、やりにくいからさ（苦笑）。今回は私らは司会進行、主役はあんただから、もうちょっと堂々としていいんだよ。

河城 あ、そ、そう？ じゃあ伊吹、ちょっとキュウリ買ってこいよ!

萃香 パシれとまでは言ってるええよ！（場内爆笑）

空想を伝える手段としての小説

萃香 さて、ここに萃まってるような人なら先刻ご承知と思うけど、作家・河城にとりのプロファイルをまずは振り返ってみようかな。(ホワイトボード登場) 小説デビュー作は、第一二二季に刊行された『キカイノコトバ』。《学習する機械》というアイデアを軸に、使用者とコミュニケーションができる《心》のあるデバイスを作ろうとする、工学系ハードSF小説だね。その後もにとりは、幻想郷では貴重なSF作家として活躍してるわけだけれど、そもそも、小説を書くこうと思ったのはどうして？

河城 あー、うん。えーと……どこから話せばいいのかな。天狗様の新聞は河童の里でもよく読まれてるし、河童の里でも鴉天狗出版部から技術書を出してる河童はけっこういるから、活字の読み物には元からそんなに抵抗なく馴染んでたんだよね。

霊夢 それならあんたも、小説じゃなく技術書出すのが常道だったんじゃないの？

河城 そりゃそうだよ。技術は伝えていかないと意味が無いんだから。だけどさあ、私みたいな若造は、まだまだ先達の技術書読んで勉強してる段階なわけ。自分なりの技術書を書けるよ。うな独自の技術開発力を持つのは、それこそ里の重鎮レベルになるんだよ。私なんかは技術書出したいなんて言ったってさー、鼻で笑われて河に流されるってなもんさよ。

萃香 相変わらず妙なところで階級社会だね、河童は（苦笑）。

河城 ま、実際技術書を出すほど独自の理論があったわけでもないしさ。どっちかっていうと、形にするには技術が足りない系のアイデアばかり頭の中に色々あったんだよね。こういうものが作れたら面白いのになー、っていう。そのためにはたぶんこういう機構を組めれば、こういう機能の部品があれば、でもそんなもの河童の技術力でもどうやって作っていいのかわからないなあ、って感じの、どうにも役に立ちそうもないアイデアで頭がパンパンで。そんなときにさ、穰子——秋姉妹の豊穰神の方（※註3）ね。穰子が里で小説買ってきたって言って、一冊貸してくれたんだよ。えーと、パチュリーの、なんだっけ、『すごい動く魔法の図書館』？

萃香 『魔法図書館は動かない』（※註4）ね（苦笑）。

河城 あー、それだそれ。それ読んでカルチャーショック受けたの。うわすげえ！ っ。だって図書館がひとつの都市になって、しかもそれが動くんだよ、がしよんがしよんって。それがどんな動力で動いてて、たくさんの人間がそこで生活できるシステムが作られることがちゃんともしっかり説明されてるんだもん。よく考えると幻想郷の技術力から考えれば全部データラメのハッターもいいところなんだけどさあ。

霊夢 ……あの小説にそんな小難しい技術語りパートあったっけ？

萃香 一応《移動型図書館都市》が動いてる仕組みと理由、図書館都市社会の仕組みとかはちゃんと説明してあるよ。ま、にとりの小説みたいにならぬ細かには描写してないけど。

河城 で、それ読んで蒙を啓かれたわけ。そうか、デタラメのハツタリでも、技術書じゃなくお話にしてもええば許されるんだって。それで、頭の中に溢れかえってたアイデアが、お話にしてくれーって頭の中で訴え始めてさ。その中から《機械に学習能力があったら》っていうアイデアを取り出して、自分ならそれで何を作るか、っていうのを書いてみたのが『キカイノコトバ』なんだけど。

霊夢 あー、そんなんだからアレ、小説ってより技術書っぽかったのね。

萃香 第五回稗田文芸賞の候補にもなったけれど、選考会ではほぼスルー。ま、相手が八坂神奈子の『天照戦記』（※註5）だったから運が悪いとは言えるけど、選評では「物語性が薄すぎる」（※註6）とか「ノンフィクションで十分」（※註7）とか散々な言われようで。

河城 そう、ひどいと思わない!? 技術書じゃできないことだから小説で書いたのに、みんな口を揃えて「技術書でやれ」って言うんだよ！ こっちとしちゃ何それふざけんなって感じですよ。あーもう思い出したら腹立ってきた。激おこぶんぶん丸だよ。

霊夢 そうは言ってもねえ、あんたがいくら「どう、これ凄いでしょー！」って言われたって、詳しくないこっちには何がどう凄いのかピンと来ないのよ。

河城 不勉強を反省する！ ていうか、同じ技術屋の河童仲間以外に読まれる可能性はあんま考えてなかったからさー。稗田文芸賞候補って言われても私だってピンと来なかったのが正直なところだよ。詳しくないくせにボロクソ言ってくれたのは怒ってるけど。

萃香 まあ、幻想郷にSF作家自体ほぼ居ないに等しかったから、SFリテラシーのある選考委員も居なかったという、仕方ない話ではあるんだらうけどき（苦笑）。パチュリーは当然狭義のSFも読んでるだらうけど、SF愛のあるタイプじゃないし。せめて（八雲）藍がもっと早くから選考委員やってれば（※註8）少しは違ったんだらうけどね。

問題作『川の流れの果てる先』の世界観は……

霊夢 で、翌年に出た第二作が『川の流れの果てる先』だった。

萃香 第一二三季に出た、『世界の果て』を巡る箱庭世界SFだね。前作に続いて第六回稗田文芸賞にノミネート。パチュリーが絶賛して断固たる決意で推薦したんだけど、別の作品を推して『川の流れ』をほぼ全否定した慧音と真っ向から対立して、結局収拾が付かなくなり、結局受賞作無しに落ち着いてしまったという、ある意味いわくつきの問題作。

河城 そんな、作品と直接関係ないところでいわくつけられてもなあ。

萃香 いや、作品の中身も十分問題作だと思うよ（苦笑）。てか、今まではっきり明言したと無かったと思うけど、この作中世界のモデルって幻想郷でしょ？

河城 いやそれ、別にそんなつもり無かったんだけど。

萃香 へっ？

河城 「へっ？」 って言いたかったのは当時の私の方だよ。第六回の選評でさ、パチュリーに褒めてもらえたのは嬉しかったんだけど、そんな自信满满に「幻想郷小説である」なんて言われても……。あちこちで全然ピントの外れた褒め方されてどうしようかと思ったよ。

萃香 えー、えー、えええー。今明かされる衝撃の事実。幻想郷小説じゃなかったんだアレ。うわー、これは驚天動地ってか、あの小説を評した作家書評家全員騙されてんじゃん！（笑）

霊夢 良かったわね、『二十億光年の誤読』（※註9）が看板に偽り無しになって。

萃香 うるさいよ！（場内笑） ていうか、じゃああの箱庭世界のモデルって何？

河城 モデルってーか、あれは箱庭世界が書きたかったんじゃないかって、世界を閉ざす《不可視の壁》のシステムが書きたかったんだけど。その詳細はもっと書き込みたかったんだけどさあ、『キカイノコトバ』で散々「技術書でやれ」って言われたから、じゃあもつとちやんと「お話」にしてやるよ、これで文句ないだろ！ ってそこぐつと我慢して書いたら読みどころ思いっきり間違われてなんだかなーっていう。馬鹿なんじゃないの？

萃香 ほう……。 （剣呑な目でもとりに見やる）

霊夢 （萃香の頭を押さえつけて） 言いたい放題、結構じゃない。《メツタ斬り》なんだし、私が許すからもつと好き放題言っればいいわよ。

河城 あ、ホント？ いいの？ じゃあ言うけど知らないよ？ パチュリーはまだしも慧音は馬鹿だね。何が「作者の世界の狭さを物語の世界の狭さに仮託しているだけである」（※註10）

だよ。うっせー馬鹿。あの世界に何かモデルがあるとしたら河童の里に決まってんじゃない。狭いのは河童の里の古臭い風習だっつーの。狭量なのはそんなものも読み取れないお前の読解力だっつーの。全く、河童の里のお偉いさんも大概だけど人間側も大概だよ。

霊夢 いやあ、あんたいいキャラしてるわねえ。気に入ったわ。キュウリ食べる？

河城 おおキュウリ！ キュウリ大好き！ あ、でも褒めても賽銭は出ないよ？

霊夢 やっぱり退治してやろうかしら。

河城 ひゅい!?

やっぱり人間って盟友だわ

萃香 いやはや、問題発言、爆弾発言の乱発で大丈夫なのかね、このトークショー（苦笑）。ま、気を取り直してその次……見事第八回稗田文芸賞を射止めた『雲の上の虹をめざして』の話をしようか。孤独な科学者の少女が宇宙から落ちこちてきた破片からロケットを作って宇宙を目指すプロジェクト小説。選考会では結末の処理を巡って絶賛から全否定まで分かれて侃々諤々の大議論の末、肯定派が押しきって受賞にこぎ着けたわけだけど。

河城 ああうん、これは怒らないよ（笑）。受賞出来たからってんでもないけど、ちゃんと正しく読んでもらえたもん。

霊夢 誰のが正解なわけ？

河城 阿求。私の書きたかったこと完璧に選評で言ってくれたから嬉しかったな。選評読んで思ったけどやっぱり人間って盟友だわ。どっかの半人半獣とは違うんですよ。

萃香 お客さんの手元には『稗田文芸賞メッタ斬り！リターンズ』が無いだろうから、代わりにちよっと引用しようか。「結末の処理についてはまさに六者六様の解釈が提示されたが、私はこれは使命と願望の狭間で苦悩の表象と読んだ。宇宙へ行くという果たさねばならぬ目標と、その目標の中でできた仲間たちとの絆。最終的にどちらを取るかと問われ、宇宙を指さざるを得ない主人公の想いは悲壮であるが、しかしそれは逃避ではなく紛れもない彼女の願いである。宇宙へ行く、その目標があったからこそ生まれ得た絆であるのだから、彼女は支えてくれた者たちのために宇宙を指さねばならないのだ。」

河城 いやあ、完璧だねえ。その後のスターボウの解釈（※註11）までパーフェクト。

霊夢 藍はどうなの？ 受賞できたのはだいたい藍のおかげっばいけど。

河城 あーうん、藍もまあ良い線突いてる。ちよっと小難しく書きすぎだけどさ。

萃香 やっぱり、未知なるものへの憧れっていうテーマは人間向きなんだろうね。

河城 未来への好奇心の無い奴は馬鹿だよ。過去ばかりか見てるような歴史家とかさ。昔のことぐじぐじ掘り返してる方がよっぽど逃避だっつーの。過去のこといつまでも引きずるような奴はみんな滅べばいいんだ。

霊夢 あんた、なんか自分の過去に恨みでもあんの？

河城 河童の里が昔のあれこれいつまでも引きずってるから腹立つんだよ！ おまけに自分も昔そういう過去のこと引きずってぐじぐじしてたからなおさら。

萃香 昔のあれこれ、って何さ？

河城 私のプライバシーに関わるんでそれはパス。ま、ホント、過去なんざ引きずったって仕方ないんだよ、過ぎ去ったことはどうにもならないんだからさ。

萃香 そんなこと言って、さっきまで過去の自分の小説への評価に怒ってたのは誰さ？（笑）

河城 心外だなあ。引きずってなんかいらないよ。思い出せば腹が立つってだけで。

霊夢 それを引きずってるって言うんじゃないの。

河城 正当な怒りまで忘れてやる義理はないよ！

マイペースに原稿書きたいから

萃香 さて、稗田文芸賞受賞後もだいたい小説は年に一作ペースで、相変わらずほぼ一貫して工学SF書いてるわけだけど、受賞後はそれまでと何か変わった？

河城 本の売り上げはさー、ぶっちゃけあんまり変わんなかったんだよねー。一緒に受賞した土蜘蛛の奴は売れてたのにさ、私のやつはベストセラーランキングに一度も入らなかつたんだ

よ！　なんでだよ！　理不尽だ！

霊夢　まあ、あんたの小説は誰でも喜んで面白がれるもんじゃありませんからねえ。

萃香　『雲の上の虹をめざして』はそれでもまだ一般性ある方だと思うんだけど、売れなかつたんだねえ。

河城　私の本の中では一番売れたんだけどさ。大橋もみじ（※註12）の十分の一ですよ。

萃香　そりゃ比べる相手が悪いよ（笑）。売り上げ以外ではどう？

河城　《幻想演義》（※註13）から連載の依頼は来たよ。断ったけど。

霊夢　なんで断ったのよ？　遺恨のある慧音が連載してるから？

河城　そこまで心狭くないっての。いやさー、これ言っちゃっていいのかな？

萃香　こんだけ好き勝手言ってる今更気になることなんざ何も無いだろ（苦笑）。

河城　やー、盟友との関係は壊したくないからねえ。……ま、いいか。単行本は稗田出版から出す前提で書いてくれないかって言われたんだけどさあ、印税がね、鴉天狗出版部より少なかったの。

霊夢　……あ、そう。

河城　ま、それに天狗様への仁義もあるし。毎回原稿料くれるってのは魅力的だったけど、毎月べ切に追われるのは性に合わないなあと思って。もうちょっとマイペースに原稿書きたかったからさ。小説書くだけじゃなくやりたいことは色々あるし。

萃香 博麗神社じゃ書いてもらえそうにないねえ、霊夢（笑）。

霊夢 うるさいわね。うちは売れっ子三人（※註14）抱えてんだから十分よ。

萃香 だったら私の本の印税ももうちょい上げてよー。あとレティのも上げてやんなよ、稼ぎ頭なんだからさあ。一冊目からずっと変えてないんでしょ？

霊夢 金の使い道もないような奴に払う金は無いっての。

河城 うわあ生臭い話。

萃香 言い出したのはお前さんじゃないかい！（場内笑） っと、そんな話してる間にそろそろ時間だね。あと何か今のうちに言っておきたいことある？

河城 なにその死刑宣告みたいな。やー、新刊の宣伝していい？

霊夢 この後また出番あるからそのときにしなさいよ。

河城 あ、そう？ でも宣伝する。最新刊の『さよならラバーリング』、一階の霧雨書店新刊コーナーで売ってますんでどうぞよろしく！ ていうか話を聞いた礼儀としてひとり一冊買うのは義務だよ！ もう持つてる人ももう一冊買ってよ！ 買わなきゃ尻子玉抜くよ！

霊夢 客を脅迫してんじゃないわよ。やっぱり退治するわよ。（お札を取り出す）

河城 や、やらせはせん、やらせはせんぞー！（と叫びつつ姿を消す）

萃香 なんつーグダグダな……（苦笑）。はい、というわけで十五分休憩です！ このあとは

第二部、もうひとりのゲストに登場願いますのでどうぞお楽しみに！（霊夢を連れて退場）

◆ 第二部 ◆

靈夢 やっぱりね、あの河童退治してやろうと思うんだけど、どこ行ったか知らない？

萃香 なに靈夢、なにかあったの？（笑）

靈夢 休憩中に楽屋に慧音が来たのよ。もー怒り心頭、怒髪天を突くってな調子で。にとりの奴がいらないから代わりに私が怒られたわよ。思わず慧音を退治しそうになったわ。

萃香 てか、慧音この場に来てたんだ（苦笑）。ま、あんだだけ好き放題馬鹿だの読解力無いだの言われたら怒るよ普通。なんて怒ってた？

靈夢 「文句があるならこういふ場の放言じゃなく、私に直接言うか文書で反論しろ」って。

萃香 まーた《幻想演義》誌上で論争（※註15）やる気なのか（苦笑）。ま、にとりの話はそのへんにしといて、第二部の時間だからね、もうひとりのゲストの話をしようよ。

靈夢 はいはい。第二部のゲストは、同じ第八回稗田文芸賞受賞者の、黒谷ヤマメね。

萃香 というわけで、黒谷さんどうぞー。（黒谷登場）

黒谷ヤマメ（以下黒谷） 毎度、地底のアイドル黒谷ヤマメちゃんです！（場内拍手） ていうか私ここに呼ばれて良かったの？ 大丈夫？ 私地底の妖怪よ？

萃香 ま、それ言ったら私だって元は地底の妖怪さね（苦笑）。

霊夢 病原菌振りまかなきゃなんでもいいわよ。振りまいたら退治するから。

黒谷 くわばらくわばら。人間は怖いねえ。

キース桶井から『土の家』へ

萃香 さて、黒谷さんは今までこの『メッタ斬り！トークショー』に呼んできたゲストとは違う点がひとつあって、それは稗田文芸賞初ノミネートで即受賞、しかもそれがデビュー作っていう、順風満帆すぎるスタートを切ったことなわけだけども。

霊夢 『土の家』ね。地底のリフォーム業者が主人公の短編連作。

黒谷 うーん、いや実はね、厳密なこと言えば私のデビュー作は『土の家』じゃないんだよね。

萃香 おっと？ 古明地さとり（※註16）みたいに自費出版で何か出してたの？（※註17）

黒谷 いやいや、そういうんでもなく。キス……じゃなくて、キース桶井っているでしょ。私より先に旧地獄堂出版からデビューした覆面作家の。

萃香 『ジャンピング・スパイダー』とか『落下する炎』とか『街路樹の首狩り魔』とか出してる作家だね。最近はおどろおどろしい怪奇小説が中心の。

霊夢 なに、あれあんただったの？

黒谷 正確にや、キース桶井の一割ぐらいが私。

萃香 一割ってまた微妙な（苦笑）。

黒谷 いやまー、ぶっちゃけるとキース桶井の正体は私の友達なのよ。覆面作家ってことにしてる以上素性は伏せるけど。そのデビュー作の『ジャンピング・スパイダー』はあの子が初めて書いた小説で、最初に読ませてもらったのが私。で、設定の詰めの良いところとか、展開もうちよつとこうした方がいいんじゃないかとか、気になったところを色々指摘したのよ。そしてあの子はそこを律儀に書き直してきて、こっちの方が面白い、って言ったら、それがなんかそのまま出版されることになっちゃって。

萃香 なるほど、アドバイザーだったわけだ。

黒谷 そゆこと。その後もあの子、何か書くと必ず私に最初に見せるのよ。プロット段階から相談されることも多いし、毎回私のアドバイスがかなり小なり取り入れられてるから、まあキース桶井作品の一割ぐらいは私の考えた部分で出来てるわけ。特に『ジャンピング・スパイダー』は中盤の展開ほとんど私のアイデアだから、実質あれは合作みたいなもん……って言っちゃうのはおこがましいかな。文章書いてるのはあの子だしね。

萃香 話の流れからすると、そのアドバイスが『土の家』でのデビューに繋がるのかな。

黒谷 これから言おうとしたこと取らないでよ（苦笑）。ま、そういうこと。あの子にいろいろアドバイスしてたら、「ヤマメちゃんも小説書けるんじゃないかな」って言われてねえ。試しに書いてみたのが『土の家』の最初の話。

霊夢 えーと、『土の家』を開いて、「橋の下の古い家」。ああ、あれね。橋を丸ごと家に作り替えちゃう話。

黒谷 そうそう。あの子以外の知り合いにも読んでもらったけどわりと好評だったから、同じテーマで続けてあと四本書いて、それが一冊にまとまって本になったのが『土の家』なわけ。

萃香 そして出版されると書評家筋の間でも好評で、第八回稗田文芸賞にもノミネート、そして見事に即受賞。

黒谷 それは正直びっくりしたわよ。なんだかんだ言っても私ら地底の妖怪だからさあ、地上の連中には嫌われてるとばかり思ってたもんね。

霊夢 言うほど嫌ってないっていうか、みんなもう忘れてたのよ、地底のことなんて。

萃香 私ら鬼のことも忘れ去られてたもんなあ。

黒谷 なんか複雑だなあ。ま、でも、嫌われて覚えられてるよりは、忘れられてまっさらな状態でもう一回やり直せる方がマシなのかもね。

テーマは地底社会？ それともお仕事小説？

萃香 『土の家』といえ、なんといってもリアルな地底社会描写が高く評価されたわけだけど、実際、作者としてはどうなの？ それをテーマにして書いてた？

黒谷 いや、別に。地底社会の矛盾とか鬱屈とか、そういうのを世に問いたいなんてご立派なお題目を掲げて書いた小説じゃないよ。読む方がどう受け取るかは読者の勝手だから、それに文句言う気はないけど。

霊夢 どこその河童とは正反対ねえ。

黒谷 河童？ え、なに、そういえばもうひとりのゲストって誰だか聞いてなかったけど……。

萃香 (無視して) じゃあ、単にお仕事小説として書いてたんだ？

黒谷 まあねー。どのエピソードも、モデルは私の知り合いだから、結果的にね、そいつらの背負ってる問題が小説の裏テーマみたいなことになったわけだけ。私としては、リフォームでお悩み解決！ なコメディとして書いてたわよ。あんま肩肘張っても仕方ないし。

萃香 土蜘蛛といえば建築業で有名だけど、リフォーム業者を題材にしたのもその関係？

黒谷 うん。建築・リフォームはうちら土蜘蛛の生業、一番よく知ってることだからね。普段やってることをそのまま、ちょっと大げさに書いてるだけよ。

霊夢 なに、普段からゴミ屋敷のゴミで家作ったり(※註18)してるわけ？

黒谷 それは《ちょっと大げさ》の部分だってば。(場内笑)

萃香 でも、稗田文芸賞ではお仕事小説部分より、地底社会描写の方が評価されて受賞に至ったわけで。そのへんはどう？ 自分の意図したところじゃない要素を褒められて受賞するっていうのは、どういう気分？

黒谷 んー、まあ、それはそれで参考になるわよ。あ、そういう風に読むんだ、って。こっちがどういいうつもりで書いたって、読者がどう受け取るかまでは私には制御できないからね。むずがゆい気はするけど、だからって怒るのも嘆くのも大人げないし。面白がってもらえたんなら、それでいいかなって。ま、あとファンレターなんかだと、仕事小説として面白かったって言ってくれる手紙が多かったしね。

萃香 うーん、最初に「これは地底社会小説だ」ってド深読みをドヤ顔で披露した八坂神奈子（※註19）は、これ聞いたらどんな顔するんだろうか（笑）。

黒谷 いやそれは読んだ方の勝手だから何でもいいのよ。どう受け取るも読者の自由。つまりなかったって思った読者さんだっているだろうし、それはこっちはごめんさといって言うしかないしねー。あれが地底社会小説として評価されるなら、こっちの意図よりそっちの方が正しかったのかもしれないわよ。小説は世に出た瞬間から作者の手を離れる、ってさとりも言うってたし。

地底における文芸出版と稗田文芸賞

萃香 地底といえばさ、実際私もすっかり地底はご無沙汰なんですけど、向こうじゃ地上の小説とか、稗田文芸賞なんかの文学賞はどう受け止められているの？

黒谷 もともとねー、お燐（※註20）がちよくちよく地上から仕入れてきてはいたのよ、地上の本。といっても売れるほど仕入れてこれるわけじゃないから、最初はお燐が知り合いに貸してたんだよね。私もそれで、地上で小説が流行ってるの知ったんだけど。

霊夢 最初はってことは、そのうち本格的に出版もするようになったってわけ？

黒谷 うん、地底でも昔から、さとりなんかが暇潰しに小説書いてたんだけど、それはあんまり売れてなかったのよね。そこにお燐が持ち込んだ地上の小説を、地底の印刷屋が複製して売り出したらこれがバカ売れ。それが今の旧地獄堂出版社に繋がったわけ。

萃香 そういや文が言ってたなあ。地底に地上の本の海賊版がたくさんあったって。

霊夢 参考までに訊くけど、地底で売れたのって誰の本？

黒谷 ぶっちぎりの一番人気は十六夜咲夜（※註21）の殺人鬼ものだったかねえ。『夜霧の幻影ジャック』とか『紅い館の殺人鬼』とか一時期みんな読んでたよ。あとは……ミス・レッドラム（※註22）とか、富士原モコ（※註23）とか、かね。

霊夢 あー、血みどろバイオレンス系が好きなのね。なるほど。

萃香 昔ながらの妖怪らしい、ってことにしておこうか（苦笑）。

黒谷 む、なんかバカにしてる？

萃香 いやいや、むしろ地上の連中の方が変に老成しちまったんだろうさ（笑）。好まれてるのがその路線ってことは、稗田文芸賞受賞作の評価はイマイチ？

黒谷 お憐はわりと『レインボウ・シンフォニー』（※註24）とか好きだったってんだけど、私の周りだとオビに『稗田文芸賞受賞作』って書いてるのはあんまり受けがよくなかったねえ。『桜の下に沈む夢』（※註25）とか、勇儀さん（※註26）に渡したら三ページで投げ出したよ。

萃香 そりゃ読ませる相手が間違ってるよ！（苦笑）

黒谷 あ、でもパルスィ（※註27）はなんか鬼気迫る表情で『雪桜の街』（※註28）とか読んだなあ。

霊夢 水橋パルスィって、あのなんだったっけ、ひっどいストーリーカー小説の？

萃香 第六回の候補だった『さようなら、恋』ね。あれはまあ、うん、ノーコメント（苦笑）。

黒谷 そういえばなんかあんたち、あれボロクソに言ってたっけ（※註29）。でもパルスィの小説、売れてんのよ？ 地底じゃエッセイでも小説でも売れっ子よ。

萃香 いや、そこは私らの好みの問題だからさ、うん（苦笑）。あ、でもパルスィのその後の小説はわりと好きだよ私ゃ。『丑の刻参り三十日目』とか普通にホラーとして面白かったし。

黒谷 第六回稗田文芸賞のあと、パルスィのやつそういうえば熱心に藁人形作ってたわねえ。

萃香 怖いこと言わないでくれよ！（場内笑）

霊夢 大丈夫でしょ、今私らこうしてピンピンしてんだから。ところで、例の異変（※註30）のあとはどうなの？ 第八回のあるた、第九回のととりと二回続けて地底から稗田文芸賞受賞

者が出たけど、地底での売れ筋は相変わらずスカーレット・パブリッシング（※註31）系？

黒谷 そうだねえ。実際売れてるのは今でも十六夜咲夜あたりだと思うけど。私が獲ったときも、それ自体には地底の反応はわりと鈍かったよ。稗田文芸賞の権威みたいなもんは、地底には通用してなかったからさ。大きく変わったのは、去年、さとりが獲ったときかなあ。

萃香 へえ？ 今までの話聞いた限りじゃ、『六花』は地底じゃ受けそうになさそうだけど。

黒谷 それが売れたのよ。あの勇儀さんだって顔しかめながら読み通したぐらいだもん。いや、自分で言うのもなんだけど、その前の年に私が獲ったことで、地底の皆にも稗田文芸賞の名前が少しは覚えられたのかなー、とかなんとか。手前味噌でごめん。

霊夢 ふうん。『土の家』は地底じゃ売れてるわけ？

黒谷 ま、ぼちぼちね。

萃香 地底の連中にとっちゃ、あの小説はあるあるネタの宝庫だからね（苦笑）。

第二回八坂神奈子賞の行方は？

萃香 文学賞の認知度という話が出たところで、いよいよリアルタイムの話題に入ろうか。ご存じの方も多いただろうけど、先日候補作が発表された第二回八坂神奈子賞に、黒谷さんの最新作『井戸の底にて空を見る』がノミネート。八坂神奈子賞といえば、昨年創設された娯楽小説の賞。第一回で大橋もみじの大ベストセラー『白狼の咆吼』第一部全六巻に受賞させたことで

幅広く周知されたわけで、第二回の結果にも否応なく注目が集まってるわけだけど。

霊夢 てゆーか、あんた選考委員じゃない。よく考えたら、このタイミングで候補者とトークショーとかしていいの？ 選考の公平性的に。

萃香 いやいや、選考会があくまでシビアに私は作品で評価しますよ。義理と人事での受賞は作品がよほど良くない限りは全力で阻止といきたいね。

黒谷 私も別に、ここでゴマすって受賞させてもらおうなんて気は無いわよ。

萃香 結構結構。——とここで、そろそろいいかな。今回、第一部で招いたもうひとりのゲストも、同じ第二回八坂神奈子賞にノミネートされてるわけで。

黒谷 ……ん？ ちょっと待った、てことはやっぱり——。

萃香 というわけで、再び登場してもらいましょうか。第二回八坂神奈子賞候補作、『さよならラバーリング』作者、河城にとりさーん。(河城再登場)

河城 うえーい、メッタ斬りよ！ 私は帰って……げえっ、土蜘蛛!?

黒谷 うげ、やっぱりあんただったのかい。

河城 帰る！ 決断的に帰宅重点！ サラバダー！

霊夢 途中退席じゃギャラが出ない決まりだけど、それでもいい？

河城 うぐ。ぐ、ぐぬぬ……。いやしかし、土蜘蛛と座を囲み談笑など河童の名折れ！

黒谷 あのさー、あんたたちなんでそう私ら土蜘蛛を毛嫌いするのさ。

河城 だってお前ら河を汚すじゃん！

黒谷 あー、製鉄組のことか。そりゃ同じ土蜘蛛だけど、私は建築組の方なんだけど。

河城 土蜘蛛は土蜘蛛だよ！ 環境破壊反対！ 河を守れ！ 水を汚すな！ 慈悲はない、土

蜘蛛は水のそばから追い出すべし！ インガオホー！

黒谷 だからそれは私ら建築組の仕業じゃないってのに。あんまり勝手な誹謗中傷するような

ら病気にしてやるよ？

霊夢 はいはい、そこまでにしないとふたりまとめて退治するわよ？

河城 ひえーっ。

黒谷 おお、こわいこわい。

萃香 やれやれ（苦笑）。というわけでお二人さん、第八回稗田文芸賞に続いて、第二回八坂

神奈子賞でも同時ノミネートとなったわけだけど、意気込みのほどをひとつ。

河城 意気込みって言われてもなあ。私や選考委員がちゃんと読んでくれることを祈るばかり

だよ。いや、伊吹様なら大丈夫と信じてますかね？

黒谷 うわ露骨なゴマすり。ま、私も意気込みって言われても、作品はもう書き上がって私の

手を離れてるしねえ。どう読まれても別に構わないし、受賞できてもできなくてもどっちでも

いいんだけど、まあ、貰えたら貰うぐらいのつもりで。

河城 おうおう良い子ちゃんぶってんじゃねーぞ。誰のシマで小説売らせていただいと

思っ^てやがんだい、ええ？

黒谷 少なくとも河童のシマじゃないことだけは確かだね。

河城 ちくしょー、河童の里をあげてあんたの本買い締めてやろうか。

黒谷 それはどうも、毎度あり。

河城 ぐぬぬ……。

靈夢 ……なんか、どっかの竹林の浮浪者と引きこもりの姫みたいねえ。

萃香 喧嘩するほど仲が良いって？（笑）

河城・黒谷 良くない！（場内爆笑）

（第一二七季 卯月 霧雨書店二階ホールにて）

【脚註】（萃）は伊吹萃香による註。印の無いものは編者による。

※1 第八回稗田文芸賞授賞式は、当初妖怪の山の麓、玄武の沢にて開かれる予定だったが、当日に受賞者同士の諍いが発生し、結局玄武の沢と旧都で別々に開かれることになった。詳しくは『稗田文芸賞メツタ斬り！リターンズ』を参照。

※2 伊吹萃香はかつて妖怪の山に四天王として君臨していたため、多くの河童や天狗には今でも畏れられている。

※3 秋穰子。豊穰の神様。河城にとりとは友人同士。『実りの季節 豊穰神の農作指南』などの農業書の著作がある。姉の秋静葉は紅葉神で小説家。

※4 巻末特別付録の192ページ参照。

※5 巻末特別付録の185ページ参照。

※6 『キカイノコトバ』は空想の新技術がいかに凄いのか、を示すのに夢中になるあまり、物語性が蔑ろにされた感が強く、小説として高く評価するのは難しいところです。（第五回稗田文芸賞 射命丸文選評より）

※7 『キカイノコトバ』と『うちの上司が横暴なんですけど。』は読み物としては楽しくページを捲れるにせよ、この内容を世に出すために敢えて小説という媒体を用いる必然性があり感じられない。（同 上白沢慧音選評より）

- ※8 作家・数学者・SF書評家の八雲藍が選考委員になったのは第八回から。
- ※9 《文々。新聞》連載の『伊吹萃香の呑んだくれ文芸時評』をまとめた単行本。幻想郷で出版された小説はほぼ全てを片っ端から読んで紹介する書評集兼ブックガイド。博麗神社から好評発売中ですんで、どうぞよろしく。(萃)
- ※10 『川の流れの果てる先』は、作者の世界の狭さがそのまま物語の狭さに仮託されており、狭量であるとの印象を免れ得なかった。(第六回稗田文芸賞 上白沢慧音選評より)
- ※11 「たとえ地上に戻ることが叶わないとしても。故にこそ、最後に彼女が見た宇宙の虹は、地上の虹と繋がる、彼女が地上に残してきた愛すべきものたちと繋がり続ける証であってほしいと思う。」(第八回稗田文芸賞 稗田阿求選評より)
- ※12 小説家。第一回八坂神奈子賞を受賞した剣豪小説『白狼の咆吼』シリーズは幻想郷の出版界でも一、二を争う発行部数を誇る超人気シリーズ。現在は第二部が刊行中。
- ※13 稗田出版が発行している、幻想郷唯一の文芸誌。といっても連載作は全て稗田出版から出るわけではなく、作家ごとに別の出版社から出る。事実上、幻想郷の各出版社の合同誌。
- ※14 白岩怜、マーガレット・アイリス、霧雨魔理沙の三人のこと。魔理沙は寡作、アイリスは作品によって売れ行きがだいぶ違うようで、一番稼いでいるのは間違いない白岩怜。(萃)
- ※15 上白沢慧音は《幻想演義》誌上で、西行寺幽々子『忘我抄』や古明地さとり『六花』などの読解を巡って、パチュリーなどと何度か論戦を開いている。

- ※16 地霊殿の主の覚妖怪、小説家。『六花』で第九回稗田文芸賞受賞。
- ※17 古明地さとりの地上出版デビュー作は第一二六季刊行の『六花』だが、それ以前から地底では自費出版の形で小説を多数発表しており、順次地上でも刊行されている。
- ※18 『土の家』第四話「廃棄物の摩天楼」は、ゴミ屋敷のゴミを使って家を改築する話。
- ※19 「住宅のリフォームを通して、コミカルな筆致で描かれる《家》の再生の物語は、しかし同時に地底社会の抱える様々な問題を浮き彫りにしていく。」(文々。新聞 書評欄より)
- ※20 火焰猫燐。地霊殿のペットの火車。宇津保凛のペンネームで小説家としても活動しており、代表作に『イカロス』シリーズなどがある。
- ※21 小説家。時間SFロマンスや耽美系ゴシック・アクション、ほのぼののバティシエ小説など様々なジャンルの作品を発表している人気作家。代表作に『クロック』『月影牢』など。
- ※22 小説家。『ナイトメア』シリーズ、『マッドネス・シスターズ』シリーズなどの血みどろバイオレンスアクション小説で若い妖怪に人気がある。
- ※23 小説家。不死と永遠をテーマにした《異質な論理》の冴える本格ミステリを得意とする。代表作に『屍は二度よみがえる』『永遠の途中で』など。
- ※24 巻末特別付録の187ページ参照。
- ※25 巻末特別付録の191ページ参照。
- ※26 星熊勇儀。山の四天王のひとりで、地底のまとめ役をしてる鬼。竹を割ったような性格

で、まかり間違っても幽々子の小説みたいなのを楽しむようなタイプじゃないよ（苦笑）。（萃）

※27 水橋パルスィ。小説家、エッセイスト。世の中への恨み辛みを呪詛のごとく書き連ねる暗黒系エッセイでカルト的な人気を得ている。小説の代表作に『緑色の眼をした私』など。

※28 巻末特別付録の187ページ参照。

※29 詳しくは『稗田文芸賞メツタ斬り!』を参照。

※30 第一二三季冬の、地底から怨霊がわき出た異変。この異変が地上と地底の交流が復活するきっかけとなり、また命蓮寺ができるきっかけともなった。

※31 レミリア・スカーレットが代表を務める出版社。パチュリー・ノーレッジ、ミス・レットラム、十六夜咲夜、門前美鈴の小説などを出版している。

第二回パチュリー・ノーレッジ賞に青娥娘々さん

スカレット・パブリッシングは二十五日、第二回パチュリー・ノーレッジ賞受賞作が、青娥娘々さんの『肢体』（道書刊行会）に決定したと発表した。

青娥娘々さんは住所不定の仙人。受賞作となる『肢体』はデビュー作で、恋人が次々と早死にしてしまう女性が、恋人たちの死体から好みのパーツをつなぎ合わせて理想の恋人を作ろうとする、グロテスクな恋愛小説。第一回幻想郷恋愛文学賞にもノミネートされたが受賞を逃している。

選考委員のパチュリー・ノーレッジ氏は今回の選考について、「当初は古明地さとり氏の『六花』が本命だったけれど、先んじて第九回稗田文芸賞を与えることに成功したため、それ以外の作品からの選出に切り替えた結果」と説明。『肢体』については「語り手の常軌を逸した感性と行動を、過剰に戯画化するのではなく、至極普通のものとして書く筆致に、常識や倫理から解放された奔放さがある。既存の価値観に対して自由であるという意味で、本賞の意義に相応しい作品」と評した。

受賞者には紅魔館付属図書館の永久利用パスが与えられる。

《選考委員》

八坂神奈子(作家)

伊吹萃香(書評家)

永江衣玖(作家)

古明地さとり(作家)

姫海棠はたて(花果子念報記者)

第二回

八坂神奈子賞

選考会実録

《候補作》

大橋もみじ『盤上の将を射よ』

河城にとり『さよならラバーリング』

十六夜咲夜『ブラドシナの奇術』

比那名居天子『遙かなる天獄』

黒谷ヤマメ『井戸の底にて空を見る』

卯堂院レイス『喪心創痕の狂視調律師』



八坂神奈子賞・新選考委員に古明地さとり氏

鴉天狗出版部は十日、八坂神奈子賞の選考委員として、第二回から作家の古明地さとり氏が新たに加わることを発表した。八坂神奈子賞の選考委員は、第一回の八坂神奈子氏、伊吹萃香氏、永江衣玖氏、姫海棠はたて本紙記者の四人に、古明地さとり氏の加入で五人体勢となる。

古明地さとり氏は地底在住の覚妖怪。地底では文芸ブーム以前から自費出版で小説を多数発表しており、地上での商業小説デビュー作となる『六花』で第九回稗田文芸賞を受賞している。今回の決定について八坂神奈子氏は、「選考委員の人数が偶数では、決選投票で同率になってしまうということが前回はつきりしたからね。さとりはまだこっちで刊行された作品は少ないけれど、作家としても読み手としても巧者であることははつきりしている。これによってよりよい選考が行えるようになるだろうさ」と説明した。

本紙の取材に対し、古明地さとり氏は「地底でいろいろ発表していたといっても趣味でのことですし、いきなりの大役に恐れ多いものを感じていますが、引き受けたからにはしっかり役割を果たせるよう努力いたします」と語った。

第二回八坂神奈子賞は、来月五日に候補作が発表され、二十日に選考会が守矢神社にて行われる予定。

第二回八坂神奈子賞候補作発表！

鴉天狗出版部は五日、第二回八坂神奈子賞の候補作を発表した。

小説部門には前回受賞者の大橋もみじ氏や、稗田文芸賞受賞者の河城にとり氏、黒谷ヤマメ氏などの六作品、ノンフィクション部門には豊聡耳神子氏の『逆らう事なきを宗とせよ』など三作品がノミネートされた。小説部門は八坂神奈子氏（作家・守矢神社祭神）、伊吹萃香氏（書評家・エッセイスト）、永江衣玖氏（作家）、古明地さとり氏（作家）、姫海棠はたて氏（本紙記者）の五名、ノンフィクション部門は八坂神奈子氏ひとりによって選考の上受賞作が決定される。選考会は本月二十日、守矢神社にて行われる予定。

小説部門ノミネート作品

大橋もみじ『盤上の将を射よ』（鴉天狗出版部）

河城にとり『さよならラバーリング』（鴉天狗出版部）

十六夜咲夜『ペラドンナの奇術』（スカレット・パブリッシング）

比那名居天子『遙かなる天獄』（天界舎）

黒谷ヤマメ『井戸の底にて空を見る』（旧地獄堂出版）

卯堂院レイス『喪心創痕の狂視調律師』（イリュージョニスター竹林書房）

密着！第二回八坂神奈子賞予備選考

先日、第二回の候補作が発表された八坂神奈子賞。幻想郷で発行されるエンターテインメント小説全般を対象とするこの賞の候補作は、いったいどのような基準で選ばれているのか？今回、本紙は予備選考委員である洩矢諏訪子氏（漫画家・守矢神社祭神）に取材を敢行した。

——実際、八坂神奈子賞の候補作はどういう手順で選ばれてるのですか？

諏訪子 いや、あんたも予備選考委員じゃん（苦笑）。まあ、説明役やれってならするけどさ。予備選考委員は、今回は私、はたて、ナズーリンの三人。それを、出版社別に手分けして、とりあえず対象になりそうな本を片っ端から読んで、各自四作ぐらいずつ予選候補を選ぶんだよ。今回、私は稗田出版、竹林書房、天界舎、道書刊行会担当。はたてが鴉天狗出版部、命蓮寺、是非曲直庁出版部、白玉書店。ナズーリンが博麗神社、スカーレット・パブリッシング、旧地獄堂出版、守矢新社担当だったかな。

——すると、予備選考時点では約十二作が残りますね。

諏訪子 まあ、そうなるね。今回は十三作残ったっけな。で、それを今度は予備選考委員で回し読みして、絞り込んでいくと。

——十三作も読むのは大変では？

諏訪子 事前に趣味で読んでる本もあるから、言うほど大変でもないかな。暇はあるし。

——絞り込みの作業の中でも、予備選考委員の間で駆け引きなどはあるのでは。

諏訪子 実際それをやり合った相手からそう訊かれるってのも妙な話だねしかし(苦笑)。まあ、調整を入れたりはそのよ。候補がひとつの出版社に偏らないようにとか、作品の傾向が被らないように、とか。そこで何を残すかの選択が駆け引きと言われれば、そうだろうね。

——そうして選ばれた今回の候補六作ですが、諏訪子委員の推薦作は？

諏訪子 え、言っちゃっていいの？ いやま、さっきの担当から推測つくだろうからいいか。私が推して上げたのは『遙かなる天獄』と『喪心創痕の狂視調律師』だよ。

——それを選んだ理由は？

諏訪子 まあ、どっちも稗田文芸賞じゃたぶん絶対候補にならないような作品だし、神奈子たちがこういうのをどう評価するか見たかったってのはあるね(笑)。普通によく出来たエンタメ上げるよりは、クセの強いのが選考委員の反応が面白そうじゃん？

——なるほど。今日はありがとうございました。

諏訪子 あ、私の新刊『核熱造神ヒソウテンソクZ①』もどうぞよろしく！ 買ってね！

第二回八坂神奈子賞選考会は二十日、守矢神社にて行われる。果たして今年の八坂神奈子賞には何が選ばれるのか。乞うご期待！

実録！第二回八坂神奈子賞（小説部門）選考会

第一回で大好評を博した、八坂神奈子賞選考会実録が帰ってきた！ 先日受賞作の決定した

第二回八坂神奈子賞小説部門。新たな選考委員も加わり、ますますヒートアップした選考会の模様を座談会形式で完全収録。前回を上回る大激戦・大論戦の選考バトルの模様をご覧あれ！

（は…姫海棠はたて、神…八坂神奈子、萃…伊吹萃香、衣…永江衣玖 さ…古明地さとり）

は えー、昨年の第一回に引き続き、今回もここ、守矢神社にお萃まりいただき、誠にありがとうございます。選考委員兼司会進行の姫海棠はたてです。まず今回は、先日《花果子念報》紙上で報じました通り、新たな選考委員として地霊殿から古明地さとり氏をお迎えすることとなりましたので、改めてご紹介させていただきます。

さ こんにちは。今日はよろしくお願ひいたします。（一同拍手）

は はい、司会進行モード終了。これから先はフランクに行くのでよろしく！

萃 身替わり早っ！

は だって敬語なんか使つてると肩凝るんだもん。

神 やれやれ。さとり、お前さんもこういう場は不慣れだろうが、このぐらいふてぶてしく、気楽に発言してくれて構わないからね。ここでは五人とも対等な選考委員だ。

さ わかりました。ではそのように。

衣 とりあえず、お茶でも淹れましようか。

神 そこでお前さんが下手に出てどうすんだい！ 空気読んでおくれ（苦笑）。

衣 あら、これは失礼しました。つい普段の癖で。

は すまじきものは宮仕えってね。

さ ……貴方のお気に入りの白狼天狗さんも宮仕えの立場では？

は はっ!? いや何を言い出すの急に!?

さ ……ああ、そういうことですね。なるほど。

は 何を納得されてるの!?

神 さとり、お前さんには心を読むのを控えてくれと先に言うべきだったね（苦笑）。

候補作選定に異議あり!

萃 ところでさー、はたて。選考に入る前に、どーしても言っておきたいことがあるんだけど。

は なに？

萃 なんて第一回受賞者の大橋もみじが今回も候補に入ってるのさ!

は あら、それは本賞の規定をきちんと読み込んでくださいませ伊吹様。《個人の重複受賞を

認めない」という文言はどこにもございませんことよ。

衣 確かに、複数回の受賞を不可とする規定はどこにも書いていませんね。

萃 うええ、マジカー。それも稗田文芸賞が認めてないから、こっちはOKにしようって魂胆？
せせこましいなー（笑）。

は 一度獲っちゃったら、そのあとどんな傑作書いても議論の対象にすらならない方がおかしいでしょ、常識的に考えて。

神 まあ、はたての言うことにも一理あるね。

萃 ううむ。しかしそれなら、なんで船水三波の『天空の宝船』は候補にしてないのさ。

は それは予備選考で落選。あ、門前美鈴の『睡拳使いのミレイ』も同様なのでご了承を。

萃 それはいいよ別に（苦笑）。『ミレイ』も面白いけど獲れるとは思えなかったし。……候補作選びには他にも疑問はあるんだけど、まあそれはあとでいいか。

衣 ひよっとして、総領娘様の作品のことでしょうか？

さ ……というか、そのことですね。

萃 だから心を読むんじゃないよ！（苦笑）

さ すみません、能力なもので。

萃 やりづらいなあ……大丈夫なかね、こんなん（苦笑）。

は はいはい、そろそろ開始前に集めた評価シートの集計結果出すわよー。

神 萃 衣 は さ

△ × × △ 『盤上の将を射よ』

◎ △ △ △ 『さよならバーリング』

△ ○ △ △ 『ペラドンナの奇術』

△ × - × △ 『遙かなる天獄』

○ ◎ △ × ○ 『井戸の底にて空を見る』

× △ △ △ △ 『喪心創痕の狂視調律師』

(印はそれぞれ、◎…本命として推す ○…本命ではないが推す △…受賞に強く反対はしない ×…受賞に反対する)

萃 まーた随分と割れたねえ。お、でも今回はいけそうかな？ いしし。

は さて、じゃあ今回も評価の低いものから絞っていくということでもいいの？ となると『遙かなる天獄』からになるけど……。

衣 その前に、『盤上の将を射よ』の扱いを決めるべきではないでしょうか。

萃 同意。まず大橋もみじにまたやるのか、つつーのが最大の問題でしょ(苦笑)。

二度目の受賞の基準は？

は え、ちょっと何よ。そこ×つけた二人、共謀して落とそうっての？ そうはいかんざき。
さ どなたですかそれ？ 魔界の神様ですか？

神 なんの話をしてるんだい（苦笑）。

は 『盤上の将を射よ』に作品としてどんな文句があるっていうのよ。人事とか外聞とかで落とすっていうのは無しっていうのが第一回での合意じゃなかったの？

萃 そりゃまあ、作品自体にはさほど文句はないけどさ。というかむしろ好きだよ個人的には。だつたら候補にするのに何の問題があるっていうのよ。

衣 はたてさんにお伺いしますが、本気で受賞させるつもりで候補にしましたか？ この賞の予備選考もやられていますよね？

は な、なに言ってるのよ！ 当たり前じゃない！ ◎もつけてるのよ私！

さ ……だいぶ煩悶していたようですね。

は だから心を読まないでってば！

萃 まあねえ、候補にしたくなる気持ちもわかるよ。大将棋エンタメとして過不足のない、大橋もみじの実力を示す良作ではあるからさ。『白狼の咆吼』が無ければ、私だって推したかも

しない。でもさー、『白狼の咆吼』にあげた賞を、これにまであげるのは無いでしょ。

衣 萃香さんに全面的に同意いたします。たいへん達者なエンターテインメントであることは事実ですが、『白狼の咆吼』を基準に考えるならば、それには及ばないでしょう。重複受賞を認めるのは大いに結構ですが、前の受賞作よりも落ちる作品で再び賞を与えるのは、賞自体の価値を落とすものではないかと思う次第です。

は ぐ、ぐぬぬ。

神 まあ、ふたりの言い分はもつともだね。『白狼の咆吼』六冊分のボリュームとスケール、波瀾万丈のストーリーに匹敵するだけのものが『盤上』一冊の中にあるかって言われれば、そりゃあちょっと苦しい。『白狼』の登場人物である将棋指し・みどりが名前だけちらっと出てくるあたりも、ファンサービスとしてはいいが作品の独立性を弱めてるしね。

さ とところで、この中で大将棋をたしなまれている方は？ ……神奈子さんですか。どうなのでしょう、大将棋小説としては。

神 いや、私も暇潰しに天狗とやるぐらいだがね（苦笑）。作者本人が大将棋の棋士だし、私の読んだ限りでは大将棋描写にはつきりした誤りや戦術ミスはないとは思うよ。本職の大将棋の棋士が読み込んだらどう思うかは知らんがね。

萃 まあ、細かいルールを知らなくてもどんどん読めるのはこの作品の美点だよね。ノリと勢いで押し切ってるだけのよな気もするけど（笑）。

衣 それならいっそ、対局描写よりも大将棋棋士の天狗たちの関係性に軸を置いた方が良かったのではないかとは思いますがね。せっかく主人公のライバルたちのキャラが立っているのに、個々のドラマがそれほど掘り下げられないのが不満ではあります。

神 私はそこは、匂わせるだけなところがいいバランス感覚だと思うがね。深く掘り下げだしたらおそらくこの三倍の分量があっても足りないんじゃないかい。そこを敢えて詳しく触れずに、匂わせるだけの描写で、対局相手の大将棋に賭ける思いをこれだけ感じさせるのが、大橋もみじの作家的技術じゃないかと、私は思うね、

萃 まあ、これもシリーズ化するかもしれないし、実際シリーズ化できそうな終わり方してるわけだから、そのへんの掘り下げはやるなら続刊で、ってことじゃない？　ところで、さとりはさつきからほとんど喋ってないけど、どうなのさ？

さ 私ですか？　言いたかったことはだいたい皆さんに言われてしまいましたね。個人的には『白狼の咆吼』よりもこっちの方が好きなのですけれど、この選考会では他に推したいものがありますので、落とすということならばそれに従いますよ。

萃 えーとじゃあ、はたて以外の四人は『盤上の将を射よ』は見送りで同意？

神・衣・さ 意義なし。
は ううー。

萃 はいはい、唸ったところで多数決だよ多数決（苦笑）。

はぐぬぬぬぬぬぬぬ。……無念（がつくり）。

神 まあ、次また『白狼』に匹敵する作品を書いたときに候補にしてやることだね。

萃 だからって今続いている第二部完結時にまた候補にするのは無しだよ（笑）。

成長小説とは何なのか

は えー、じゃあ、気を取り直して……次は……なんだっけ。

萃 やる気なくなりすぎだろ！（苦笑）

さ 評価の低いものから、でしたっけ。すると『遙かなる天獄』ですが。……たいへん困っている人が一名おられるようですけれど。

衣 ええ、困りましたね。とても困りました。

萃 そう、候補作選びの疑問その二がこいつだよ。なんで衣玖が選考委員にいるこの賞で比那名居天子の作品を候補にするかなー（苦笑）。

は あれ、知り合いなの？

萃 知らなかったんかい！ お前さん昔取材してただろ！

衣 まあ、普段から色々とありまして。総領娘様の小説には、僭越ながら出版前にアドバイスなどもしている身の上でして、この作品も構想段階から付き合っていたものなのです。なので、

申し訳ありませんがこの作品は、選考委員としては評価することができません。棄権させていただきます。

神 仕方ないね。賢明な判断だと思ふよ。

は じゃあ、衣玖さん抜きで進めますか。つても、特に推す人もいなさそうだし、個人的にこれ好きじゃないからスルーしちゃってもいいかと思ふんだけど。

さ いいのかしら？ ……あまりよくなさそうね。

萃 よくは無いと思ふな（苦笑）。一応検討ぐらいはしてやろうよ。

神 退屈な天界から地上を羨望していた少女が、うっかり地上に落ちこちてしまう。地上は全く少女が想像していたようではないところではなくて、いろいろ酷い目にも遭って、天界での平和で退屈な生活がいかに貴重なものだったか思い知り帰りたいと願うんだけど、どうにも帰れない。仕方がないのでなんとか地上で生きていくしかなくて——という、まあ構造的にはわりとありがちな異世界転移系のビルドゥングスロマン（成長小説）だね。

萃 やー、悪かあないよ。デビュー作の『天地開闢ストライク』なんかに比べると、随分こなれてきたと思う。ただまあ、良くも悪くも普通になっちゃったかな。こういうのだったら、それこそ宇津保凛なんかの方がずっと上手いわけで……。デビュー作の頃の『私、最強！』路線で突き進んでた方が天子の作家性は生きてたと思ふんだけど。

は 私はこれダメ。何がダメってまず主人公がもームカつくのよ。傲岸不遜な上に自己憐憫の

塊でさー。後半マトモになるったって、前半がマイナスすぎて。おまけに『井戸の底にて空を見る』もそうだけど、地上のこと悪く書きすぎなのよ。天人の偏見が滲み出て腹立つわー。

神 主人公への前半の評価が後半で反転するのが成長小説の醍醐味ではあるんだがね（苦笑）。

萃 だったらなんで予備選考で落とさなかったのさ。

は 予備選考でこれ推したの私じゃないし。私はこれ予備選考で落としかつたのよ。

さ 皆さんあまり評価高くないのですね。私は結構好きですよ、これ。

は 地上に恨みがあるから共感できるだけじゃないの？

さ それは否定しません。この作品の美点は、主人公にとっての価値の反転の繰り返しが、『失われるもの』を際立たせるところではありませんか。序盤で否定的に捉えていた天界の退屈さと、肯定的に捉えていた地上の猥雑さ。その価値観が、実際に地上に落ちたことで反転し、天界の退屈さへの憧憬に変わる。けれど天界には戻れないと解り、否定していた地上の猥雑さをもう一度肯定していくことで、一度は抱いた天界への憧憬がまた薄れていく。そうして、傷つきながら色々なものを切り捨てて生きていくということの切なさを描いているのではないかと、私は思うのですけれど。……あまりそういう風には受け取られていないよね。

萃 まー、比那名居天子の今までの作品は本質的に変化しない主人公の話ばかりだったから、そういう意味では主人公の内面の変化を描いたこの作品は天子の作家としての成長を示すものではあるんだろうけど。

神 私はこれは、天子の新境地といよりは、今までの天子の小説——たとえば『誰も私にかなわない』なんかと同系列に位置する小説じゃないかと思うんだがね。天子は今まで、最強の主人公っていうテーマを執拗に書いてきたわけだが、その流れでいくとこの作品は「主人公が最強性を奪われたら」という話じゃないかい。そういう風に読むと、本質的には今まで通りの天子の作品じゃないかとも思うんだが。

萃 それはさすがに深読みが過ぎるんじゃない？（苦笑） とうるか深読みの結果が「今までと一緒」ってのは、作者が新境地のつもりで書いてたら酷いと思うよ（笑）。

神 いやいや、そうじゃなくてだね。『天地開闢ストライク』も『誰も私をたおせない』も『全人類の緋想剣』もそうだったが、天子の今までの小説は反成長小説——どんな経験にしても、本質的に変化しない主人公の話だったろう。これも結局のところ、主人公が地上での生活経験をを経て、一度失った天人としての誇りを取り戻す話だ。一種の貴種流離譚だね。ということは、根っこにあるのは天人としての現状肯定なわけじゃないか。現状の価値を再確認することを成長と定義するのには、私は懐疑的なんだが——つまりこの小説のテーマは、成長小説の体裁で、本質的に反成長小説である物語を描くことで、成長とは何か、というのを問いかけるものじゃないかと思うんだが。

は あーもう、だからこの賞はそういう構造読解はどうでもいいんだってば！ 深読みするなとは言わないけど、この賞の評価基準は「ストレートな面白さ」なのよ！

神 ああ、すまんすまん。ついいつもの癖でね。

は で、一応訊くけど、この作品残したい人いる？

さ ……面白く読んだのは私だけのようですし、見送りでいいかと。

神 構造としちゃ面白いと個人的には思うが、まあこの賞の受賞に見合うかという疑問だね。

萃 私もパス。

は はい、じゃあ見送り！ てか最初から見送りでほぼ決まりの作品に時間とりすぎよ。次にくわよ、次。

萃 そこまでぞんざいに扱ってやらなくてもいいだろうに（苦笑）。

ルビと造語の生み出す効果は？

衣 ……しかし、作品の構想段階から脱稿後の修正まで関わった者の立場からすると、こうも多様に読まれるというのは不思議な感覚ですね。

萃 結局誰の読みが正解だったのさ？

衣 それはまあ、秘密ということで（笑）。

は はい次ー。えーと、卯堂院レイスになるのよね。これも落としちゃうの？ 大橋もみじがダメなら私これにあげたいんだけどなあ。ダメ？

萃 ダメってこたー、私はないよ。いやむしろこれを候補に入れた英断には拍手したい（笑）。
珍しく神奈子が×つけてるね。普段からあんま否定的なこと言わない印象だけど。

神 いやあ、読みづらかったね（苦笑）。漢字の単語の八割ぐらいにカタカナで変な読みのルビが振ってるだろう。諏訪子や早苗はわりとこういうの好きなんだが、私はどうもね、ついていけない（苦笑）。

は えー、格好いいじゃない。

衣 これは、読者の稚気が試されますね。

は 何それ、私がガキっぽいって言うの？

さ ……外の世界では《中二病》というらしいですよ。中二とは何なのか知りませんが。

神 今読んだのは私の心かい（苦笑）。いやまあ、そういうレッテル貼りによる矮小化は好きじゃあないんだが、しかしそれにしたってね、こういうのが面白いのかい？

は 面白いじゃない！ 《狂視症候群》^{イリュージョンシンドローム}と呼ばれる幻覚症のパンデミックが起きてる世界で、
克蘭ケ ^{ビジョン} シンクロ ^{チユートング} ^{イリュージョンシーカー}
患者の幻覚に共鳴して治療する 《狂視調律師》^{ハルシネーションワールド} が、《幻視世界》^{イマジナリークワイチャー} に現れる怪物 《幻獣》
と戦いながら、謎の存在 《悪夢演想者》^{クルールコンポーザー} に迫っていく——もー、このネーミングセンスだけで

わくわくするんだけど、え、私だけ？

萃 気持ち解らんでもないよ（笑）。実際、人里の若者なんかにはわりと受けてるらしいし。
実質的にはジュヴナイル枠だから、これを候補にしたことで作品の対象年齢も問わないって

う懐の広さも示したし、今回はそれでいいんじゃない？（苦笑）

さ このルビの多さと造語のセンスを受け入れられれば、楽しい作品ですよ。他人の心の中に入りこんで狂気の原因を倒すという設定には、私としては感情移入しやすかったです。幻視世界の奇天烈な描写も、なかなか味わい深いかと。

衣 私はどちらかといえば、神奈子さんと同じくついていけない派なのですが……主人公と、助手の少女との関係性は良かったと思います。他人の心の中を覗き続けた主人公が、たつたひとり、いつもすぐ近くにいた助手の少女の心だけは理解できていなかった——という終盤の展開の哀切は、王道といえば王道ですが、評価したいところです。

萃 あ、そうだ、関係ないんだけどさ、さとり。ひとつ訊いていいかい？

さ ……心を読める私は、作中人物が他人の感情を理解できないことに苛立ったりしないのか、ですか。いえ、むしろ「心が読めない」というすれ違いが起るのだから」と興味深いですよ。第三の眼を閉ざすとどうなるか——というシミュレーションとして、サトリではない人間や妖怪の小説はたいへん面白いです。

萃 質問を先読みしなさんなってばさ（苦笑）。

さ それに、小説の人物の心までは読めませんから、そういう意味でも私は小説を読むのが好きなのです。

萃 ほーん。あ、ごめん脱線して。話続けてどうぞ。

衣 萃香さんの評価はいかがなのですか？

萃 ん、ああ、私の番だったのか。まあ、そうさね。センスとしてはミス・レッドラム系だけど、あっちほどメチャクチャじゃない分、このルビの嵐と造語のセンスを除けば話自体はわりあい真つ当な若年層向けエンタメだからなあ。悪くは無いけど、そう強く惹かれるものも無いなあという感じかね。あんまり言うことないや。

神 結局、このルビの多さはどんな効果を生んでるのかね。私がそこが解らんのだがね。

は だから格好いいじゃない！

さ ……という層へのアピールというのが一点ではあるでしょう。推測ですが、作者本人もこののが好きなんでしょうね。もう一点は、やはり通常と異なる読みを重ねることによる異化効果が見込めるのではないかと。この突拍子も無い世界観と設定を、リアリズムに依拠するのでなく、用語のレベルから読者に馴染みのないものに組み替えることで、徹底的な非リアリズムに基づく世界観であるということの了解を、読者との間に求めるものではないですか。

神 ふむ。しかしこの作品、その世界観や設定が漠然としたイメージだけで終わっちゃいないかい。要するにサイコダイブもの一種だけれども、奇病にしろ主人公の能力にしろ、作中で理論的な説明がほとんど無いから、ファンタジーのお約束を言い換えてるだけに思えてね。

萃 それはもつともだけど、ぶっちゃけ、そういうSF的な理屈付けを求めるような層は読者として選ばれてないんだよ（苦笑）。

衣 結局、この世界がどういう社会構成になっているかも、よくわかりませんよね。

は いや、別にそんなのどうだっていいじゃない。

神 どうでもよくはないと思うんだがね（苦笑）。

さ 話の焦点が個人の心の中というミクロ中のミクロな物語ですから、マクロな世界観の説明などは極力省いたと見ることもできますが。この世界の情勢を詳しく描いたところで、この物語自体には大きく影響しませんから、蛇足になるのでは？

は そうそう、こっちはそういうのが読みたいんじゃないし。この作品の本質からかけ離れたところに難癖つけられて落とされるんじゃないわ。

神 ……なるほど、どうも私はあまりいい読者になれていなかったようだね。理解できないというだけで×をつけたのは狭量だったね、反省しよう。×は撤回するよ。△に切り替えた。

は おっ、ちょっと風向きが変わってきた？ よしよし。

衣 では、この作品については一旦保留ということで、次に行きましょうか。

さ ……それが良いのではないかと。

『井戸の底にて空を見る』はリアルなシミュレーション小説か？

は 残りの三つはどれも似たような評価だけど、どれからいこうか。

衣 はたてさんが×をつけている『井戸の底にて空を見る』からにしますか？

は あー。私としては落とせるならさっさと落としたいんだけど。でも◎ひとつに○ふたつでしょ？ ううん、この賞の選考委員の人選間違えた？

萃 これを予選選考から上げたのもお前さんじゃないさ（苦笑）。

は だから私じゃないってば！ これを上げたのは予選委員のナズーリン！

神 なんでもいいが、まずははたてが×をつけた理由から聞こうかね。

は 既にして私を論破する包囲網形成を感じるんだけど……。まあこれ、要するに「地上と地底の妖怪が全面戦争を始めたら」っていう設定で、地上視点から地底のスパイに翻弄される様を描いた連作長編なわけじゃない。圧倒的戦力だけでもとまりに欠ける地上と、結束力のある少数精鋭の地底と。正面衝突すれば大惨事が避けられないから、なんとかその前に戦争の落としどころを見つけようとして地底のスパイが地上に潜入する——そのシチュエーションには別に文句はないのよ。設定だけでスリリングだし。不満なのは、そのスリリングになるべき主人公のスパイの活躍が序盤で期待したほど盛り上がりがないところ。おまけにこの主人公、あんまり血の通った存在に思えないのよね。まず全体の大きなストーリーが先にあって、そのために主人公が駒として動かされてる感じがして、私はそこが非常に不満。ま、あと、地上の書き方が『遙かなる天獄』と同じで悪者一辺倒な感じなのも不満。ねえ、何が面白いのこれ？ 推薦組の皆さん、論破できるものならしてご覧なさいよ。

萃 はたてさんや、ものすごーく根本的なツツコミをしていいかい。
は あによ。

萃 スパイに人情味があっちゃダメだろう（笑）。己を殺して相手の懐に潜り込み、冷徹に目的を遂行するのがスパイの仕事なんだからさあ。「人情味のあるスパイ」なんて、「死体が苦手な殺人鬼」とか「潔癖症で他人の持ち物に触れない泥棒」と同じぐらい矛盾してるよ。

は いや、そういう意味じゃなくて。

衣 作者の都合で動かされているだけの存在にしか思えない、ということですね。

は そう、私が言いたいのはそういうこと。血の通った存在には思えないのよ。

さ いや、まさにそこが、この作品のポイントなのではないですか。主人公のスパイの内面に踏み込まず、作品の九割九分まで有能かつ冷酷無比な地底の手駒として描いているからこそ、最後の最後、停戦交渉直前に彼女が犯したたったひとつのミス、それが生み出す平和の代償としての悲劇に、声なく主人公が慟哭する、その哀しみが映えるのでしょうか。

萃 全面的にさとりに同意だね。これだけ気を遣って、主人公の内面描写を徹底的に省いたハードボイルドさを、人物描写が薄いつて言うのは、ちょっと読みが皮相的じゃない？ ハードボイルドが最後にウェットに落ちるのが不満ってならまだ解るけどさ。

神 私はそう、萃香の言ったそこが唯一の不満だね。そこで安易に俗情の悲劇で落とさず、最後までハードボイルドに徹して欲しかった。

衣 神奈子さんと同じく、私もこのラストはこの作品の弱点ではないかと思えます。萃香さんやさとりさんが評価する理由も解るのですが……地上と地底の戦争というマクロな話が、家族というマイクロ単位の悲劇に矮小化されてしまった感がありまして。話の焦点が最後でぶれてしまったのではないかと。

は 私としちゃ、そもそもこのラストが唐突にしか思えないのよねえ。ここで主人公が慟哭すること自体が興ざめにしか思えなくて。もっと冷徹なことやってきたじゃん！ って。

萃 その落差がこの作品のキモなんだけどなあ。隠しに隠してきた感情が最後で溢れ出す、それこそがねえ、自分の心を押し殺すことに慣れた者の心を揺さぶるんだよ。

神 鬼のお前さんが自分の心を押し殺す……？

萃 あ、いや、そこには突っ込まないでよ。私だって色々あるんだよ！ とにかく、話の焦点もぶれてないと思うよ。主人公が停戦交渉への工作のために近づく《蓮華院》、かつて地底にいた妖怪も暮らしていて、戦争に対してやや中立的な立場を取ってる宗教団体……って、これモデルは露骨に命蓮寺じゃん。その信者に、主人公の生き別れた姉がいて——地上と地底の対立が、蓮華院内部の地上派と地底派の対立、さらには地上から地底に逃げた過去のある主人公と、地底から地上に逃げ出した姉の見えない断絶とシームレスに接続されてるから、家族の悲劇が地上と地底の悲劇の象徴として物語を締めうるんじゃないさ。

さ そういう意味では、ヤマメさんの前作『土の家』と構造としては似ていますね。マイクロな

構図にマクロな視点を仮託して、大きな問題を小さな問題に象徴させる、という。……まあ、個人的には、この主人公と姉の関係性が他人事に思えなかったというのもあります。心を押し殺そうとしたが故に最後まで心を殺しきれなかった妹と、心を開こうとしたが故に心を完全に失ってしまう姉——という構図はちよつと、あまりにも身につまされて……。

は でもさー、そういう話として読むには説明不足じゃないの。

さ 説明されるまでもないような心理描写を書き連ねるよりは、こういう抑えた筆致が適当かと思えますけれど。

は やっぱりなんかバカにされてる気がするんだけど。

衣 そこは相容れないようですし、戦争小説としての側面に話を移しては？

神 おう、私の出番だね。私はこの作品は、地上と地底のリアルなシミュレーション小説だと思ってるんだがね。地底理解が深いのは『土の家』でも明らかだったが、今回は地上についてもよく取材されてる。戦争の発端となる、地底由来のパンデミック事件から、地上の有力な勢力がそれにどう反応するか、どうすれば地底との間に全面戦争が起こってしまいうるか、つていうのを緻密に考え抜いた、近未来予測SFとして素晴らしいと、私は思うよ。

は そう？ 正直、今どき地上の妖怪に結束して戦争しようなんて元気があるようには思えないけどなあ。ま、そこはフィクションだから、別にいいんだけど。

衣 私としては、それこそ『喪心創痕』ぐらいフィクションな舞台の方が納得できたのです

が。半端に地上の勢力がモデルの組織がいくつも出てくるので、モデルの皆さんの顔が浮かんでしまってます……。

萃 あー、うちの霊夢もそういえばこれ読んでそんなこと言ってたね（苦笑）。似せるならもつと徹底的にやればいいのに、半端にモデルに似てる部分と似てない部分があるから落ち着かないって。

神 そこはまあ、モデル小説の宿命だよ。あんまり似せすぎるとモデルに怒られかねないからね。適度なフィクションを、リアルの中にどう混ぜ込むか。

萃 そういや神奈子、モデル小説問題で訴えられてたっけ（苦笑）。

神 ありやただの身内の問題だったのに、あの天狗が記事なんぞにするから……（溜息）。まあ、私がシミュレーション小説としてリアルに感じる部分が、他人にはリアルに思えないってのは仕方ないのかねえ。リアリズムってのは結局は本人の主観に左右される面があるからね。

は 大枠にリアル感をイマイチ感じられないから、やっぱり全体的に作者の都合で話が動いてるように私は思うわけ。

衣 私も……：そうですね、どちらかといえば、はたてさん寄りです。

萃 意見が割れたねえ。三対二か。私やこれが本命だから引く気はないけど。

さ ……：残りのふたつを検討してさらにしましょうか、と衣玖さんが考えていますね。

衣 それは先回りして言っていたただかなくても（苦笑）。

本格ミステリの面白さに普遍性はあるか？

は えーとじゃあ次は……どっち？

萃 八坂神奈子賞だし、神奈子の本命は最後にとっておいてやろうか（笑）。

衣 ということは、『ベラドンナの奇術』ですね。さとりさんが◎、萃香さんが○。

萃 やー、咲夜がよく候補になること承諾したねえ（笑）。主より先に獲っちゃってもいいの
かね？ 稗田文芸賞はそれでずっと候補にすらなっていないのに。

は 候補が決まった段階でそこは打診して承諾を受けました。まあ、一度は断られかけたんだ
けど、どうも当主の鶴の一声があったみたい。

萃 レミリアの気まぐれか（苦笑）。ま、この賞ならレミリア……ミス・レッドラムもまあ、
可能性がないわけじゃないし。もし次以降候補になったら、あんまりボロクソに言わないよう
にしてやらんと（笑）。

さ とここで、これは本格ミステリということでもいいのですよね？ ……ですよね。

萃 心を読んでひとりで納得するんじゃないよ（苦笑）。いや、実際、堂々の本格ミステリだ
けどさ。幻想郷のミステリ作家といえば《異質な論理》の富士原モコと、叙述トリックの第一
人者・因幡てみだったけど、その二人に勝るとも劣らぬ堂々たる書きっぷり。大したもんだわ。

は えーと、館のパーティで起きた毒殺事件と、脱出トリックの実演中に変死した奇術師。前者は無差別殺人にしか思えない状況で、どうやって被害者にピンポイントで毒入りのパイを手に取りさせたのか。後者は衆人環視の密室状態だった舞台の上、狭い脱出トリック用の箱の中で、被害者をどうやって殺害し、かつ首を切り落としたのか。ふたつの謎を、館のメイドが地道な捜査から導き出した推理で解き明かすっていう話。

神 《読者への挑戦状》が入ってるあたりも、外の世界では古典的な《館もの》の本格に徹した作品だね。外の世界のミステリ小説を読んできた身からすると、どっちもどっかで見たようなトリックなんだが、幻想郷でこういうストリートな本格を書く作家はあんまりいなかったからね、本格ミステリ入門用の小説としては上出来じゃないかい。個人的に好きなタイプの小説かというと、そうでもないんだが（苦笑）。

は というか、本格って何？

萃 あ、そこからか（苦笑）。不可解な謎があつて、それが論理的に解決されることに主眼を置いたタイプのミステリのことだよ。私もそんなに数読んでるわけじゃなくて、パチュリーの蔵書と鈴奈庵の外來本で外の世界のを何冊か読んだぐらいだけだよ。

衣 論理的に正しいということが最優先される小説の形式、という理解でいいのでしょうか。
さ そういうことですね。

神 こいつをこの賞で評価するポイントは二点だろうね。精緻なロジックのために全てが計算

尽くで配置されたパズラーであって、サスペンス性や展開の起伏には乏しいから、一般的なエンターテインメント性を求めると肩すかしを食うかもしれないというのが一点。そして、そのパズラー趣向に相反するかのような耽美的文体——こいつは元々の十六夜咲夜の資質だが、その作品とのミスマッチをどう評価するかってのが、もう一点。

さ ……この作品の美点は、その文体にあるのではないですか。全ての謎が論理的に一点に収束して解決する切れ味鋭い構成は、その構成が論理に奉仕しすぎているが故に非現実的ですからありますが、それをこの耽美的な文体が生み出す独特のゴシックな雰囲気、非現実性を強めることで、論理重視の作品世界の土台となっているのではと。なので手法としては『喪心創痕』に近いのではとも思うのですが。 ……そう思うのは私だけのようね。

萃へえ、これを『喪心創痕』と同じ手法って文脈で語るのかい。予想だにしない読みが出てきて楽しいねえ。同意できるかはまあ、別として（苦笑）。

衣 萃香さんはどこを評価されているのですか？

萃 私は、純粹にこの考え抜かれた構成と、精緻なロジックの切れ味に感服した次第だよ。細部まで完成されたロジックは美しい、っていうことを示してくれる小説だよ。咲夜といえど時間SFのイメージが強いけど、この作品はメインの時間差トリックに加えて、読者の意表を突く形で作中時間のズレというのを上手く活用しているのも、咲夜らしくていいと思うよ。

は うーん。確かに解決編の全てが繋がる快刀乱麻っぷりは凄いなあって感心するんだけど、

私としちゃその推理の伏線を積み重ねる前半の捜査パートがあんまり……。

神 まあ、普通のエンタメを期待して読むと地味だね。パズラーだから読みどころはそこじゃないんだが。

衣 文章がいいので、読んでいて退屈はしませんが、物語性が薄すぎる気はしますね。登場人物も、名前だけの記号のような人が多いですし。短編ならそれでもいいのですが、長編でそうなる……ロジックのためにこの長さが必要なのは解りますが、もう少しサービスピ精神があってもいいのではないかと思います。

は そーそー。せめてもうちょっと起伏が欲しいわ。

さ ……ジャンル愛のない者って基本的に贅沢ですよ。

萃 ジャンル読者は自分がそのジャンルに求める要素があれば満足するからね（笑）。

神 本格というジャンルは様式美の塊だからねえ。その様式美の中で考えれば優等生的な作品だと思ふよ。この賞が本格ミステリの賞なら文句無く受賞だろう。だが、この賞はエンターテインメント全般の賞だからねえ。この面白さに普遍性があるかという……。

さ エンターテインメント全般を扱う賞であるからこそ、こういうジャンルの様式美に凝り固まったような作品に賞を与えることにも、意義があるのではありませんか。それこそ「誰でも楽しめる娯楽小説」にあげるだけならば、『文々。新聞』でやっているランキングで十分なのではないですか。

は 却下。それを言い出したら稗田文芸賞と同じ道よ！

萃 結局この賞も合議制文学賞のジレンマと無縁ではいられないのか（苦笑）。

さ ……それでも私はあくまで『ベラドンナの奇術』への受賞を主張します。精緻な論理のかきたてる知的興奮は、十二分に普遍性のある「面白さ」であると私は考えます。

神 仕方ない、これも一旦保留で最後に行くかい。

衣 そうしましょうか。

夢と希望のおとぎ話の是非

萃 さて、神奈子の本命、河城にとり『さよならラバーリング』。偶然開発された伸縮自在の新素材が、幻想郷に何をもたらすか——つていうワンアイデア系シミュレーションSF。まー、いかにも神奈子の好きそうな話だね（笑）。

神 そりゃもう、ね。いやあ、こういうシミュレーションSFをにとりが書いてくれるようになるとは、頼もしいことこの上無いね。できれば実際の技術開発でも河童がこのぐらい頼りになってくれるとありがたいんだが（苦笑）。

は 衣玖さんは◎なしで、○がこれだけなのね。

衣 まあ、今回は熱烈に推したいものはありませんでしたので……（苦笑）。

さ ……あれ以外を熱烈に推すと、あとで何を言われるかわからない、と。

衣 それは言わないお約束でお願いします。しかし、今回は否定的なことばかり言っていて申し訳ないので、これは推させていただきますね。伸縮自在の新素材の発明、という、ぱっと耳にしただけでは地味そうな題材から、思いも掛けぬ方向に話が転がっていく、その想像力を私は高く評価したいと思います。

神 そう、まさにそれがこの小説の最大の魅力だ。ひとつ現実から外れた設定を作り、それが現実はどう影響を及ぼしていくかを徹底的に考える。それこそ空想科学小説の醍醐味だよ。

萃 にとりのSFの弱点が今までそこだったんだよね。『キカイノコトバ』も『雲の上の虹をめぐして』も、作品世界に社会性があまり無くて、最終的に閉じた内輪の話になってしまっ、っていう。水道敷設プロジェクト小説の『水道をつくらう!』も、河童社会と人間社会の折衝の部分は露骨に想像で書きましたーって感じだったし。その意味では今回、ぐっと良くなった。

神 細かいことを言えば、疑問はいろいろあるがね。外の世界の科学レベルでツツコミを入れるのは野暮としても、この新素材が人間の技術者の間にこうもすんなり受け入れられるのか、とか。そのあたりに多少、理想論というか技術開発的な意味での願望充足小説的部分はあるが、この作品自体が明るく《夢の新素材》の導き出す「今よりちょっと素敵な未来」を描き出す話だから、瑕疵ではないと思うよ。

さ ……私としましては、最初から最後まで希望に溢れた明るい話で、暗いところがちっとも

無いのは、さすがにファンタジーすぎはしないかと思うのですが。

は 私はこのぐらい明るい話でもいいと思うけどなー。いいじゃない、性善説にのっとった話でも。明るい話は浅薄で、暗い話は重厚っていうのこそ、なんてゆうーか思考停止じゃないの。小難しい技術解説はよくわかんないけど、話としては好きよ、この小説。

萃 はたて、お前さん去年『大海原の小さな家族』に「良い話すぎて疲れる」とか言ってなかったっけ？

は あれはほら、サバイバル小説だと思って読んでたから緊張感がなさ過ぎるっていう話だったの！ これは夢を追いかける話なんだから明るくていいのよ。お話の中でぐらい、希望に溢れた未来を追いかけてもいいじゃない。

さ ……『雲の上の虹をめざして』のラストが嫌いだった派ですか。

は そーそー。あれ終盤までいい話だったのに、あんな夢も希望もないラストにされちゃってさー。それに比べたらこっちの方がずっと好きよ私。『盤上』が落とされちゃったし、私は『喪心創痕』が◎、これが○にするわ。

さ あのラストだからこそ『雲の上』は素晴らしいと思うのですが。……本当に意見の割れる小説なのですね、あれは。

衣 あの作品が賛否両論だったから、今回は夢と希望に溢れたおとぎ話的なストーリーにしたのかもしれないね。

萃 これ、慧音に読ませて選考させかつたなー(笑)。

神 萃香、お前さんはどうなんだい。

萃 やー、嫌いじゃないよ。嫌いじゃないけど、私はやっぱりこれは良い話すぎて疲れる派。短編連作ならまだついていけたと思うけど、長編として考えるとやっぱり、ハラハラドキドキのアクセントとかトラブル解決とか、そういう要素が足りてない気がして。これも一種のプロジェクトものなんだからさー、全部トントン拍子に上手くいきました終わり、じゃちょっとね、エンタメとしてはね。

は その読み心地の良さがいいと思うんだけど。

衣 確かにスリルを感じる部分は少ないですが、エンターテインメント的な起伏でいえば、次から次へと新素材の思わぬ活用法が登場していく、その予想のつかない展開だけでも十分買えると思うのですが。

萃 うーん、そこが私のご都合主義に思えるんだよなあ。ちょっと行き詰まりそうになると、新素材の新しい活用法が見つかって活路が開ける、って展開の繰り返しじゃん？ その活用法はよく考えられていると思うんだけど、小説としてはもうちょい工夫が欲しいなあ。他の四人全員一致でこれ推すなら降参するけど、そうじゃないなら抵抗勢力になるかね。

さ では、私も抵抗勢力ということで。SFはあまり読み慣れないので、強く反対するのは心苦しいのですが、悪意の欠如した物語は、私はやはり上っ面のものとしか思えませんので。

いざ、評決！ しかし……

神 どうもこりや、討論で意見の一致をみるということは無さそうだね。

衣 ということは、今のところ残っている四作で投票でしょうか。

萃 受賞に必要な票数は過半数？

は 一応そういう規定だけど。

さ ということは、三票入った作品が受賞ですね。

は じゃあ、投票用紙配るから、票を投じる作品を○で囲んで提出ってことで。

萃 そういや、ふたつ○つけてもいいの？

は え？ また二作受賞はちよつと……。

萃 前回認めておいて、今回は二作受賞認めないってのは無しじゃないかい（苦笑）。

衣 まあ、そうですね。あまり大盤振る舞いしても仕方ないかとは思いますが……。

は 解った解りました。じゃあ○はふたつまでつけていいってことで。

萃 さて、するとどうしたもんかね……。

神 あ、さとり。

さ なんですか？

神 他の連中の心を読んでから投票作品を決めるのは無しでお願いできるかい。

さ ……解りました。読まなかったという立証はできかねますが。

衣 そこは、さとりさんの良心を信用するということにしましょうか。

さ それはそれで重圧ですね。 ……結果がどうあれ私に文句を言われても困りますよ。

は ……そろそろ決めた？ じゃあ集めて、えー、集計します！

二票（神奈子・衣玖）『さよならラバーリング』

二票（萃香・さとり）『井戸の底にて空を見る』

一票（さとり）『ペラドンナの奇術』

一票（はたて）『喪心創痕の狂視調律師』

萃 うわあ（苦笑）。どうすんのこれ。

衣 全作品、三票に至らず、ですか。これは ……受賞作無しでしょうか？

神 はたて、お前さんが『さよならラバーリング』に入れてれば決まってたじゃないか。

は いや、主催としてはやっぱり一作受賞に絞りたいわけで ……。

萃 それを言ったら神奈子が『井戸』にも入れてくれてたら決まってたよ（笑）。

神 まあ、私も一作に絞れたかったというのはあるんだが。ふーむ。

さ ……萃香さんにも『ベラドンナ』に入れて欲しかったのですが。

萃 いや、私は前回悔しくも本命を譲ったからね。今回は譲れないのだよ、うん。

は じゃあ、悔しいけど私が『さよならラバーリング』に鞍替えで決定ってことで。

萃 待った待った、さとりを心を読むことを禁じておいてそれは無しだよ。

は そんなこと言われたって、受賞作無しこそ避けたいわよ、主催としては。

神 じゃあ、同票で『さよなら』と『井戸』の二作受賞かい？ 私はそれでもいいんだがね。

は う、うーん、二回続けて二作受賞っていうのもなあ……。

萃 第八回稗田文芸賞に続いて、またこのふたりで二作受賞は私もどうかと思うよ（苦笑）。

稗田文芸賞との差別化をはたてが求めるなら、ここはどっちかに絞らないと。

さ それならいっそ『ベラドンナ』で。……ダメですか、そうですか。

は じゃあ、八坂神奈子賞なんだし、最後は八坂様に決めていただくということ、どう？

神 いきなりそんな全責任を丸投げされても困るよ（苦笑）。

萃 ぶーぶー。八坂神奈子賞だからって、神奈子の推す作品にあげるだけの賞なら、パチュリー

賞と同じく神奈子ひとりの選考でやってりゃいいじゃん。

神 ……解った、こうしよう。まず、受賞は『さよなら』か『井戸』のどちらか、ということ
で良いのかい？

は ううん、まあ……仕方ないかなあ。

さ 私はあくまで『ペラドンナ』を推したいのですが。……ここは折れるべきかしら。

神 すまんね。じゃあ、今から休憩ということにしよう。その間に、各自『さよなら』と『井戸』の両方を再読して、全員の再読が終わったところで改めて、その二作のどちらか一作に投票する形で評決だ。どうだい？

は うわあ、何時になるのよ受賞作決定。記事書く時間がー。

衣 とはいえ、このままでは收拾もつきそうにないですし、仕方ないですね。今までの議論を踏まえて再読することで、評価が変わる可能性はありますでしょうから。

萃 やれやれ、今回は全六巻の候補とか無くて助かったと言うべきなのかね（苦笑）。

さ ……では、今から各自再読ということでは？

神 うちの中の部屋は好きに使って良いよ。お茶や菓子も早苗に用意させるから、自分が一番集中できる体勢で再読に構えておくれ。

は・衣・萃・さ はーい。

六時間後の決選投票

萃 やれやれ、もうすっかり夜も更けちゃまったね（苦笑）。

は うう、お腹空いたわー。

神 すまんね、終わったら盛大に宴会といこう。全員、再読の上で投票作を決めたかい？

衣 はい、決まりました。

さ ……皆さんに同じく。

神 じゃあ、いざ投票だ。どんな結果になっても恨みっこなしだよ。

萃 もうどうにでもな—れ（苦笑）。

は ……はい、みんな書いた？ じゃあ、萃めますよ。……はい、結果発表！

二票（はたて・衣玖） 『さよならラバーリング』

三票（神奈子・萃香・さとり） 『井戸の底にて空を見る』

萃 えっ、ええっ、ええええええ!! 一番無いと思ってたところが鞍替え!?

衣 これは、神奈子さんの弁明を伺わないといけませんね、『さよなら』派としましては。

は そ—よそ—よ、本命じゃなかったの？

神 いや、うん、断腸の思いでの決断だよ。はたて、衣玖、申し訳ない。

さ ……再読で、『さよなら』の評価が落ち着いたわけですか。

神 まあ、そういうことさね。最初に読んだときには、自分が求めていたタイプのSFを自分以外の作家が書いてくれた、っていうのが嬉しくてねえ、かなり甘めの評価をしてしまったよ

うだね。今回の選考にあたってもそれを引きずってたんだが、今回の議論を経て考え直した結果、『さよなら』はシミュレーションSFとしてはやはり、性善説に則りすぎていて物足りない。その点『井戸』は重層的かつ余韻のある人物描写が光るし、エンターテインメントとしても空想未来シミュレーションとしても満足のいくものだった。……これでいいかい。

は うううぬ。だからなんでそう暗いものをありがたがるかなー。暗い部分のある心がリアルだから優れていて、性善説はファンタジーだから劣るなんて考え方、私は気に入らないわー。エンタメが幻想で何が悪いってのよ。文学性なんてハクタクに食わせとけばいいのよ！

衣 まあまあ、民主的な投票の結果ですから、抑えて抑えて。

は ぶー。

萃 はっはっは、なんとも言いたまえよ(笑)。いい作品が勝った、それだけの話だよ。いやあ、本命に受賞させるって最高の気分だね。酒が美味い。

さ もう飲み始めてますよこの鬼……。まあ、私は『ベラドンナ』に受賞できなかったことは心残りですが、『井戸』なら次善ですので、よしとします。

神 というわけで、第二回八坂神奈子賞受賞作は、黒谷ヤマメ『井戸の底にて空を見る』で決定ということ、皆々様、よろしいかい？

萃・さ・衣 異議無し。

は ……ぶー。

萃 はーたーてー。

は うう、自分で作った賞なのに、なんでこう自分の思い通りにいかないのかしら……。

神 何もかも思い通りにいくわけじゃないからこそ、生きるってことは面白いんだろうさ。

は そんな人生論に引きつけられましても。……ぶーぶー。

さ ……唸られても結果は変わらないかと思えますが？

は 知ってるわよ。受賞に異議は……あるけど、なし。でも抗議は止めない。ぶー。

萃 やでやで。ま、なんだ、とりあえず呑みなよ（笑）。

（花果子念報増刊『第二回八坂神奈子賞決定号』より）

第二回八坂神奈子賞に黒谷ヤマメ氏、豊聡耳神子氏

第二回八坂神奈子賞（鴉天狗出版部主催）は二十日、守矢神社にて小説部門・ノンフィクション部門の選考が行われ、小説部門は黒谷ヤマメ氏の『井戸の底にて空を見る』（旧地獄堂出版）、ノンフィクション部門は豊聡耳神子氏の『逆らう事なきを宗とせよ』（道書刊行会）に決定した。授賞式は来月三日、守矢神社にて行われる。

黒谷ヤマメ氏は、地底・旧都に暮らす土蜘蛛。第一二五季にデビュー作『土の家』で第八回稗田文芸賞を受賞している。『井戸の底にて空を見る』は、地上と地底が戦争状態に突入した幻想郷で、有利な休戦協定を結ぶべく、地底から送り込まれたスパイの活躍を描く冒険小説。

豊聡耳神子氏は、夢殿大祀廟に暮らす仙人。人里では相談所を設けて人々の悩みを聞いているほか、『幻想演義』でエッセイ『お話があれば順番に』を連載中。『逆らう事なきを宗とせよ』は、古代の為政者・聖徳太子としての半生を回顧する自伝。

小説部門受賞者には賞金六十貫文、ノンフィクション部門受賞者には賞金二十貫文が贈られる。

黒谷ヤマメ氏の受賞の言葉

こないだ稗田文芸賞もらったと思ったら、今度は八坂神奈子賞？ やー、そんな大したもの

書いたつもりはないんだけどねえ。どう違うのかよく解らないけど、貰えるものはありがたく貰っておくよ。ま、読んでくれた人が楽しんでくれたなら、それに越したことはないさね。選んでくれた人もいち読者ってことで、感謝感謝。

※豊聡耳神子氏の受賞の言葉は、取材が間に合わなかったため割愛。

(花果子念報 卯月二十一日号 一面)

第二回稗田児童文芸賞にニツ岩マミゾウさん

十五日、第二回稗田児童文芸賞選考会（稗田出版主催）が人里の寺子屋にて行われ、ニツ岩マミゾウさんの『天野ジャックは嘘をつかない』（命蓮寺）が受賞作に決定した。

稗田児童文芸賞は、少年少女を対象とした児童文学作品の優秀作を表象する賞。選考委員は作家・歴史家の上白沢慧音、作家・数学者の八雲藍、命蓮寺住職の聖白蓮の三氏。受賞者には賞金二十貫文が贈られ、寺子屋にて推薦図書として生徒に配布される。

受賞作の『天野ジャックは嘘をつかない』は小説デビュー作となる。「ついた嘘を一度だけ本当にすることができると」能力を手に入れた嘘つき少年の天野ジャックが、その能力をたったひとりの友達を救うために使おうとするストーリー。

選考委員長の上白沢慧音氏は、「嘘をつくことをただ戒めるのではなく、他人を傷つける嘘と、他人を救う優しい嘘をはっきりと書き分けることで、単なる教訓話ではなく、優れた成長小説ともなっている。他愛もない言葉が時として他人を傷つけ縛り付けてしまう、という事実の恐ろしさを語りながらも、言葉を介して心を通わせ合う素晴らしさをまっすぐに語っており、子供たちにとって自分の使う言葉の意味について考えるいい機会となるだろう」と語った。

受賞したニツ岩マミゾウさんは命蓮寺に暮らす化け狸。今回の受賞については、「おやおや、あの狐が選ぶ賞で儂が選ばれるとは。ふおっふおっふおっ」と意味深な笑いを漏らした。

《選考委員》

白岩怜(作家)

風見幽香(作家)

本居小鈴(鈴奈庵店主)

第二回

幻想郷恋愛文学賞 選考委員座談会

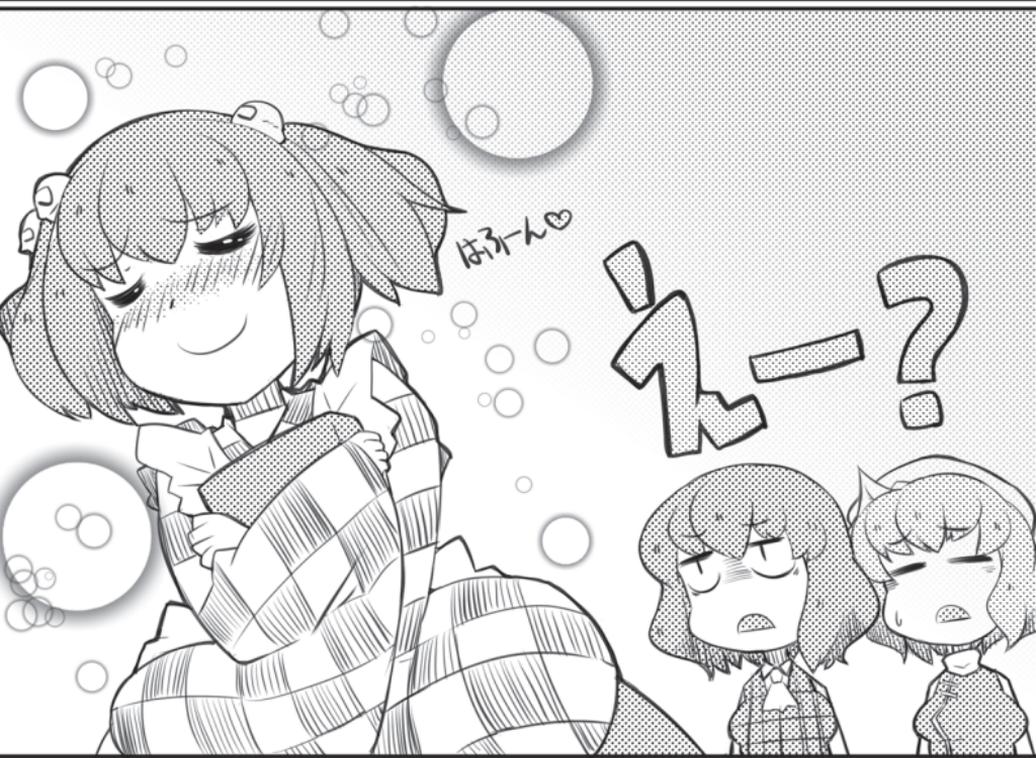
《候補作》

蘇我屠自古『遠雷』

秋静葉『神恋し森』

水橋ハルスィ『緑色の眼をした私』

幽谷響子『声を聞かせて』



第二回幻想郷恋愛文学賞、新選考委員に本居小鈴氏

博麗神社は七日、霜月に選考会の行われる第二回幻想郷恋愛文学賞において、第一回選考委員だった東風谷早苗氏に代わり、本居小鈴氏が新たに選考委員に就任することを発表した。

一般読者代表であった東風谷氏の退任について、博麗神社代表の博麗霊夢氏は「本人の一人の都合」とのみ語るに留めた。

新選考委員となる本居氏は、人間の里で貸本屋《鈴奈庵》を営む人間の少女。幻想郷文芸振興会代表の稗田阿求氏の友人であり、稗田文芸賞にも予備選考委員として協力している。

本居氏の就任について霊夢氏は「一般読者代表、何も早苗を引っ張ってこなくても、小鈴にやらせればよかったのよねえ、すっかり忘れてたわ」とコメントした。

本居氏は本紙の取材に対し、「幻想郷でたくさん本が読まれるようになったことは、貸本屋としても大変ありがたい話です。主にうちの経営的な意味で……。微力ながら文芸ブームの一助となるよう、精一杯務めさせていただきます」と語った。

第二回幻想郷恋愛文学賞は、神無月下旬に候補作が発表され、霜月上旬に選考会が博麗神社で行われる予定。

第二回幻想郷恋愛文学賞 候補作一覧

博麗神社は二十六日、第二回幻想郷恋愛文学賞の候補作として、予備選考委員（博麗霊夢・稗田阿求）の協議により、以下の四作品を選出しました。

蘇我屠自古『遠雷』（道書刊行会）

秋静葉『神恋し森』（稗田出版）

水橋パルスィ『緑色の眼をした私』（旧地獄堂出版）

幽谷響子『声を聞かせて』（命蓮寺）

本選の選考委員は以下の三名が務めます。

白岩怜（作家） 風見幽香（作家） 本居小鈴（鈴奈庵店主）

選考会は霜月十日、博麗神社にて行われ、選評は師走十五日発行の本紙にて発表されます。

（博麗神社月報 神無月号より）

第二回幻想郷恋愛文学賞受賞作決定

去る霜月十日、博麗神社にて第二回幻想郷恋愛文学賞の選考会が行われました。白岩怜（作家）、風見幽香（作家）、本居小鈴（鈴奈庵店主）の三氏による選考の結果、候補四作の中から、秋静葉さんの『神恋し森』（稗田出版）が受賞作に決定しました。

◆各選考委員の短評

白岩氏「『神恋し森』はやわらかく、落ち着いた、とても品のある文章が、なんてことのない物語をとても味わい深いものにしていたと思うわ。個人的な好みで言えば、もう少しドラマチックなところがあってもいいと思うけど」

風見氏「選考会では、水橋パルスイさんの『緑色の眼をした私』を強く押す声もあったけれど、総合力で『神恋し森』に軍配といたところかしら。受賞作は信頼を失った人間と、信仰を失った神様それぞれの孤独を上手くすくい上げていて、胸に迫るものがあるわ」

本居氏「正直なところ受賞作みたいな恋愛小説はもう読み飽きてるんだけど、作品としての出来は好みとは別ということ。受賞に異議はありません」

◆受賞者プロフィール

秋静葉（あきしずは）…妖怪の山在住の紅葉の神様。第一二二季に『落ち葉の季節に逢いましよう』で作家デビューし、人間に寄り添う神様の日常を柔らかな筆致で描く作風で、静かな人気を呼んでいた。受賞作の『神恋し森』は、紅葉に色づいた森の中で出会った人間と神様の恋模様を描いた恋愛小説。

◆受賞のことは

ありがとうございます。……………ええと、他に何か言わないとダメですか？ いや、あの、作品については私が説明するより読んでもらったほうがいいです……。あ、ええと、ごめんなさい、穰子みたいにこういう挨拶うまくできなくて……ごめんなさいっ（と言い残して引っ込んでしまった）

（博麗神社月報 師走号より）

選評に代えて——選考委員座談会（司会：稗田阿求）

——というわけで、今回は選評に代わりまして、今回は選考委員の皆さんに、座談会形式で選考の模様を振り返っていただきたいと思うわけですが。

小鈴　ねえ阿求、これ八坂神奈子賞のパクリ？

——ごほんごほん。この賞も独自の見せ方をしたいという、霊夢さんの意向です。

白岩　あっちが面白いから素直に真似したって言えばいいのにね（苦笑）。

幽香　私はなんでもいいけれど。阿求、貴方は大丈夫？

——ええ、まあ、数時間程度なら何とでも。

幽香　そう。無理をしてはダメよ。

小鈴　はいそこー、こんなところでまでいちゃつかないでよ。

——いちゃついてないから。

白岩　ところで、何を話せばいいのかしら？

——一応、各作品についての感想や、選考会でどんな話が出たか、ということを適当に話してくればいい、とのお達しですが。

幽香　それなら選考会の様子を書き起こした方が早かったんじゃないのかしら。

白岩　それじゃ本当に八坂神奈子賞と一緒にだからね（苦笑）。

小鈴 じゃあ、とりあえず適当に振り返っていきます？

幽香 そうしましょか。早めに終わらせてしまいましょ。

——選考会で最初に落ちたのが、『幽谷響子さんの『声を聞かせて』だったそうですが。

小鈴 これ、基本的には悪くないと思うんですよ。家の中に閉じこもっていた聾啞者のヒロインの元に、紙飛行機の手紙が飛び込んできて、そこから姿の見えない文通相手と紙飛行機で手紙をやりとりしていくうちに、ヒロインが外へ一步を踏み出す勇気を得る……っていうだけで面白い話な短編になりそうなところを、そこから手紙の主についてのサブライズも用意してあるサービス精神はいいんですけど。けど……。

白岩 私は読んでないんだけど、全く同じ設定の作品があったのよね？

——『ミステリア・ローレライの『くらやみのうたはきこえない』ですね。

幽香 そう、私はそれを読んでいたから、どうしてもそこが引かかってしまって。ストーリー展開は違うから、完全な模倣というわけではないのだけれど。

小鈴 でも、やっぱり読感はそっくりなんですよ。『くらやみのうた』はどちらかといえばジュヴナイルで、こっちはその大人向け版、と考えてもいいのかもしれないですけど、そこまで大人向けかというとそうでもないというか……ヒロインの設定年齢が上がってるだけで本質的にはあんまり変わってないですよ。

幽香 そうね。手紙の主の正体が判明することで、『声を聞かせて』というタイトルの意味が反転するあたりもよく出来ているのだけれど、そういった美点のほとんどが、やはり『くらやみのうた』からの借り物に見えてしまうのが、最大の弱点だと思うわ。

白岩 私は『くらやみのうた』を読んではないから、それについては何とも言えないのだけれど。この作品は、細かい描写に不自然な点が多いのが気になったわ。あんまり重箱の隅を突くようなことは言いたくないんだけど。たとえば聾啞のヒロインの視点から書いているはずの文章で、ヒロインが音を認識しているとしか思えない描写がいくつかあるのとかね。ずっと引きこもっていたヒロインがあっさり手紙の主まで辿り着いてしまうところかも、ちょっとそういう、大筋を支える細部が弱いのがね、勿体ないと思うの。

小鈴 命運寺の校正担当がうっかりさんだったんじゃないですか？

—— そんなピンポイントで関係無い人を狙い打ちにしないでね。ともかく、選考会ではそういったところが問題となって、最初に落選となったというわけですね。

白岩 『リピート・アフター・ミー』のラストみたいな、瞬間最大風速みたいに輝く名場面がひとつあれば、私はもうちょっと評価したかったんだけどね。

—— 次に落ちたのは、蘇我屠自古さんの『遠雷』ですか。

幽香 病で眠り続ける夫を、永い永い時間見守り続ける妻の話ね。個人的には、私はこれにも

賞をあげたかったのだけれど。

小鈴 そりゃ、幽香さんはこの話好きですよ。身につまされますよね。（司会を見ながら）
——ごほん、ごほん。

白岩 作品のトーンは全然違うのだけれど、ドラマチックなストーリーの無い恋愛小説、という意味では、去年候補だった『膝の上の君』をちょっと思い出したわ。

小鈴 この作品から『膝の上の君』を連想する人はそういないと思いますけど……。

幽香 時が止まったような小さな部屋の中で、永遠に変わらないように思える、愛する人の寝顔を見守り続けるだけの、静謐な日々。それを淡々と描いているだけなのだけれど、回想の挿入の仕方が非常に巧みだわ。現在の彼女の心象と、追憶の心象がシンクロしあっていく展開は、熟練の技さえ感じさせると思うのだけれど、あまり賛同してもらえなかったわね。

小鈴 いや、起伏の少ない話ですけど、するするっと読まされるあたりは確かに上手いと思うんです。でも、私、この話はオチが余計だと思っただけです。最後に明かされる語り手の正体によって、がらっと話の様相が変わるじゃないですか。その仕掛けがちょっと唐突というか、敢えてこういう話にする必要があったのかなーと。去年の受賞作の『ドールハウスにただいま』がそのへんの処理がすごく上手かっただけに、それと比べると見劣りするかなと。

幽香 まあ、そうなのよね。そこは私も引っかかったところで、そういう仕掛けを置かなくて良い作品だっただけに、蛇足という感は若干、否めなかったかしら。

白岩 作品の雰囲気は『神恋し森』と似ていたのは不運だったわね。どっちも淡々とした静謐な作風で。どっちを取るか、となれば、私は『神恋し森』だわ。

小鈴 あと、私は恋愛って一種の狂気だと思うので、特にこの話はシチュエーションの段階からある種の狂気を孕んでる話だと思いますから、そういう要素がもう少し見えてれば良かったなと思う次第です。

白岩 狂気とか残酷とか、意外と人間の若い女の子、好きよね。

幽香 ……狂愛の物語を否定はしないけれど、どうして早苗といい人間の少女はそういう話が好きなのかしら？ ねえ阿求。

——私に訊かれても困りますよ。

小鈴 というわけで、私は全力で『緑色の眼をした私』を推したんですけど。去年の選考会で『肢体』を推した早苗さんの孤立無援ぶりを実感したわ。

白岩 まあ、どうしてもそうなるわね。私と幽香の好みからすると。

幽香 去年の『肢体』もそうだったけど、こういう作品を《恋愛小説》というカテゴリーの中で語っていいものかどうか、私は悩ましいわ。それこそ、花壇になぜかラフレシアが紛れ込んでいるようなものじゃないかしら。ラフレシアが悪いとは言わないけれど、いささか場違いという気がして。

白岩 羊の中の狼よね。

小鈴 自分の顔を見たことがない少女が、鏡に映った自分自身に恋をしてしまったことから、破滅へ突き進んでいく恋愛ノワール。これが恋愛小説以外の何だっというんですか！ 狂おしいほどの愛憎と嫉妬の描写は、生ぬるい他の三作品にはない読書の刺激に溢れてるわ。

白岩 刺激ばかり求めていると、だんだん刺激に慣れてしまっって、もっと強い刺激を求めて、その繰り返しよ。辛いものを食べ過ぎたみたいに、舌がばかになっちゃうわ。

幽香 この主人公の造形はなかなか嗜虐趣味をそそるところはあるけれど、創作の中にそういうのを求めるのはやはり、非力な人間だからこそなのかしら。私は自分で、

——幽香さん、あまり人聞きの良くないことは。

幽香 あら、ごめんなさい。

小鈴 ああー、そっか。今解ったわ。このひとたち嫉妬と縁が無いんだ。

白岩 そんなこともないけど。(苦笑)。

小鈴 でも、今手に入れられないものは百年ぐらい待って、ゆっくり手に入れるのが妖怪のスタンスでしょ？ どこぞの数百年待ってた人みたいに。

幽香 私のこと？

——小鈴、あんまりそういうプライベートな話は。

幽香 確かにそうかもしれないわね。妖怪は基本的に気が長いから、こういう刹那的な感情に

振り回される話には、私はあまり入り込めないわ。花のように、泰然自若と構えればいいのに。

小鈴 恋愛って刹那的な感情そのもののような気がするんだけど……。

白岩 小鈴ちゃんは、この恋慕と嫉妬が身につまされるような経験をしているの？（笑）

小鈴 え？ あ、い、いや、そういうわけじゃ。

白岩 私としてはねー。過激な内容の作品はあってもいいと思うのだけれど、過激さを競い合うようなことになるのは、ちょっとどうかと思うわけー。

小鈴 ……妖怪殺しの白岩さんに言われてもなあ。

白岩 そんなに毎回ヒロイン殺してないわよー（苦笑）。そもそも、泣ける話を書こうとしてるわけじゃなくて、人間と妖怪の恋愛になるとどうしても死生観と寿命の差の問題は避けて通れないってだけだしー。

——— そういった経緯で、受賞は秋静葉さんの『神恋し森』に決まったと。

幽香 総合的な完成度の勝利ね。信仰を失った神様と、信頼を失った人間の恋愛譚。

白岩 お話したいはなんてことないんだけど、やわらかく品のある文章で、それぞれの孤独な心の機微に深く分け入った、お手本のような恋愛小説だと思うわー。

小鈴 私はこんな優等生的な作品にあげたって仕方ないと思うんだけどなあ……。出来がいいのは認めますけど、正直こんなのは読み飽きてるといえるか、驚きがないというか。

白岩 驚きだけが読書の醍醐味ではないと思うけど。

幽香 明鏡止水、枯淡の境地ね。優等生的と言うけれど、このしみじみとした味わいは、立派な秋静葉という作家の色ではないかしら。

白岩 なんてことない場面や描写が、すーっと胸に入ってくるのよね。ストーリーを追うだけが面白みじゃないというか、嘯めば嘯むほど味わい深い小説だわ。ちょっとだけ性愛描写もあるけど、それもすごく上品な書き方で。

小鈴 白岩さんは物語主義者じゃなかったんです？

白岩 『膝の上の君』を読んで、物語のない小説の味わいを知ったのよ。

小鈴 あれ、甘ったるいだけだと思うんだけどなあ。

幽香 『神恋し森』の際だった美点をひとつ挙げるなら、私は物語の色彩感覚を挙げたいわね。この小説は終盤まで、本文中で《色》の描写をかなり意識的に多用しているのだけれど。それが物語の終焉に向かうにつれてだんだん減っていき、最後には一瞬の紅葉の輝きののち、色をなくして土に還るだけの落ち葉のようなモノクロのわびしさを残して物語を閉じる。これとても見事な技だと思うわ。

白岩 夏の虹から始まって、夜の雪で終わるのが象徴的ね。

小鈴 ……まあ、こんな調子で、選考会でも説得されちゃったわけで。結果に異議はないけど、私としては残念かなあ。『緑色の眼をした私』にあげたかったなあ。

——というところで、今回の選考会、皆さん、いかがでしたか？

白岩 今回も楽しかったわ。自分は、あんまり偉そうにひとの作品にどうこう言えるような作家じゃないと思ってるけど、他のひとの意見を対面で聞いて、ああだこうだ言い合うのも、なかなか面白いわね。

小鈴 私はちよっと疲れたわ。今まで読者側だったから、こういう公の場で作者の方と、作品について話すのは初めてだったし。緊張しました。

幽香 そのわりには、なかなか図太くいろいろ言っていたように思うけれど。

——まあ、小鈴ですから。幽香さんは？

幽香 特に言うことはないわね。私たちは私たちがいいと思ったものを選んだのだから、今回も役目は果たしたと思うわ。それだけよ。

小鈴 これでうちの店もまた少し賑わうかな。ほんと、文芸ブームのおかげでうちの店も商売繁盛、毎度ありがとうございます。（小声で）妖魔本蒐集もはかどるわー。

白岩 鈴奈庵で一番借りられてるのって誰の本なの？

小鈴 メインは子供向けかなあ。門前美鈴とか星丸小虎とか、永江衣玖とか人気ですよ。

——子供はお金を持っていませんからね。

幽香 そうやって本を読んで育った子供が、大きくなったとき、霧雨書店で本を買うようになって

てくれれば、いいのでしょうか。種を蒔き、花を咲かせるように。

小鈴 まあ、大人のひとよく借りていきますけどね（笑）。

——何にしても、幻想郷に文芸が根付くことは喜ばしいことです。この幻想郷恋愛文学賞もまた、その一助となれば幸いですね。

小鈴 うちの店でも、大人の女性の借りてくものは恋愛ものが多いからねえ。それこそ白岩さんはうちの店でも大人気ですよ？

白岩 あらあら、それはどうも。

小鈴 あ、そうだ、阿求。候補作のセレクトなんだけど。

——何か不満でも？

小鈴 いや、三輪雲衣とか十六夜咲夜の耽美系とかは候補にならないの？

——ごほんごほん。では、本日はこれにて。おつかれさまでした。

小鈴 こら、質問に答えなさいよ。

幽香 そういえば阿求も好きよね、三輪雲衣。

——余計なこととは言わなくていいんです！ いや個人的には候補にしたいんですけど霊夢さんが顔をしかめるのと慧音さんに何を言われるかでごによごによ……。

霧雨書店・鈴奈庵に自警団から指導——性愛表現のある小説に対して

人間の里自警団は十六日、人間の里の書店・霧雨書店および、貸本屋・鈴奈庵に対して、性愛の表現を有する書籍に対し、子供の目に触れないよう設置するように指導を行った。

対象となったのは、成人男性向けの官能小説および、《耽美系》と呼ばれる女性向けの小説群。自警団の上白沢慧音班長は、「成人した大人がこういったものを個人的に楽しむのを否定はしないが、子供の目に容易く触れる形で販売・貸し出しされている現状は好ましくない。区分けは最低限のモラルとして必要だ」と語る。

これに対し作家で幻想郷文芸振興会副代表のパチュリー・ノーレッジ氏は、「性愛小説もまた文芸の一ジャンルであることに代わりはないし、今回の指導の範囲に入らない小説にも性愛表現の含まれるものはある。どこからが子供の目に触れぬべきで、どこまでなら良いのか、その線引きが不明瞭である限り、これは表現に対する弾圧に発展する可能性を孕む。公権力からの一方的な指導には断固として抗議したい」と語調を強めて語った。

幻想郷文芸振興会は近く自警団と話し合いを持った上で、出版社間で性愛表現を中心とした小説については独自の審査機関を設立する可能性も検討する方針である模様。

《選考委員》

パチユリー・ノーレッジ (作家)

西行寺幽々子 (作家)

上白沢慧音 (作家・歴史家)

八雲藍 (作家・数学者)

射命丸文 (文々。新聞記者)

稗田阿求 (稗田出版代表)

第十回稗田文芸賞 メツタ斬り！&選評

《候補作》

富士原モコ『永遠の途中で』

永月夜姫『バイバイ、スプートニク』

霧雨魔理沙『いじわる巫女と三匹の妖精』

水橋ハルスィ『緑色の眼をした私』

三輪雲衣『雲海の守護者』

青娥娘々『腐乱ドール』



第十回稗田文芸賞候補作発表

幻想郷文芸振興会は十五日、第十回稗田文芸賞の候補作を発表した。

今回は六作品がノミネート。富士原モコ氏の自伝的な長編『永遠の途中で』、第二回パチュリー・ノーレッジ賞を受賞した青娥娘々氏の第二作『腐乱ドール』などがノミネートされた。選考会は二十三日、人間の里の稗田邸にて行われる。

候補作は以下の通り。

富士原モコ『永遠とわの途中なかばで』上・下（稗田出版）

永月夜姫『バイバイ、スプートニク』（竹林書房）

霧雨魔理沙『いじわる巫女と三匹の妖精』（博麗神社）

水橋パルスィ『緑色の眼をした私』（旧地獄堂出版）

三輪雲衣『雲海の守護者』（命蓮寺）

青娥娘々『腐乱ドール』（道書刊行会）

（文々。新聞 師走十六日号一面より）

博麗靈夢&伊吹萃香の第十回稗田文芸賞メツタ斬り!

冬はメツタ斬り! もはや季語と化した感もある、恒例のメツタ斬りコンビによる言いたい放題の稗田文芸賞レース予想! ふたりの予想は果たして的中するのか?

◆受賞レース予想&作品評価

(◎:本命 ○:対抗 ▲:大穴 評価はA~Eの五段階)

霊夢 萃香

- ◎ B ◎ A 富士原モコ『永遠の途中で』上・下(稗田出版) 三回目
- A ◎ A 永月夜姫『バイバイ、スプートニク』(竹林書房) 三回目
- ▲ B 霧雨魔理沙『いじわる巫女と三匹の妖精』(博麗神社) 四回目
- ▲ B - A 水橋パルス『緑色の眼をした私』(旧地獄堂出版) 二回目
- C - C 三輪雲衣『雲海の守護者』(命運寺) 初
- B - A 青娥娘々『腐乱ドール』(道書刊行会) 初

◆富士原モコ『永遠の途中で』（稗田出版）三回目

予想：靈夢◎ 萃香◎ 評価：靈夢B 萃香A

靈夢 どう考えても妹紅で決まり。以上おしまい。

萃香 いやいやいや（苦笑）。そりやもう『永遠の途中で』の受賞は《幻想演義》で連載が始まったときから決まったようなもんだっただけだし、それで終わりじゃ済まないよ、今回は。

靈夢 そんなこと言ったってねえ。永月夜姫と同時受賞はさすがにやらないでしょ。授賞式で死人が出るわよ。

萃香 そりやそうだけどさ（苦笑）。黙って富士原モコにあげるなら、もっと候補作は穏当な、いかにも富士原モコシフトって感じの面子で揃えるべきでしょ。永月夜姫を外すのはさすがにあざとすぎるから避けたにしても、何も冒険して、水橋バルスイと青娥娘々を候補にする理由はないよ。この二作が入ってきた時点で、私としちゃ今回の稗田文芸賞は神回なんだけどさ。

靈夢 まあ、確かに妹紅の当て馬にするには勿体ないラインナップだとは思うけど。

萃香 とりあえず、大本命からいこうか。『永遠の途中で』……「とわのなかばで」って読むんだけど、これは《幻想演義》で二年ちよつと連載してた富士原モコの自伝的な長編。人外者に家族を奪われた少女が、復讐のために永遠の命を手にしてさすらう話。不老不死の異形として人間たちの間で排斥される苦しみとか、永い時間に摩耗していく感情とか、不死になっ

しまった人間の苦しみを迫真の筆致で描きつつ、不死の力を手に入れた際に犯した罪への贖いと、復讐の是非も問う渾身の力作だね。上下巻合わせて八百ページと読み応えもたっぷり。

霊夢 そりゃ自分の体験してきたことそのままなんだろうから真に迫るに決まってるじゃない。読む前はもっと自己憐憫くさい話かと思っただけど、意外とそのへんドライに書いてるあたりは私も結構好きよ。不老不死の子かわいそう、っていうお涙頂戴に行った方が一般受けしそうだけど、そうしないでちゃんと自分を客観的に見れてるのはいいんじゃない。

萃香 中盤はどんどん時間をかつとばして、盛り上がりそうな場面を敢えてスルーしたり、読者がまだ覚えてる人物のことを主人公が忘れてしまっていたり、そういう不老不死になってしまったための時間意識の表現が上手いね。中盤のそういう展開の速さが、後半の仇を見つけてからの濃密さと対比される構造になってるのもいいと思う。途中までは非常にイヤなシーンもあるけど、ラストはほろ苦くも綺麗にまとまってるし、まー常識的に考えて受賞は動かない。**霊夢** 選考委員の面子からしてもね。慧音は言うまでもないし、阿求も絶対これ推すでしょ。誰にでも解る話だから文や藍も強く反対はしないでしようし、パチュリーや幽々子にしても敢えて落とそうとする理由は無いでしょうね。

萃香 いや、不安要素があるとすればねー、選考委員の面子だと思うよ。

霊夢 え？

萃香 というか、慧音がこれを今まで通り推せるのか、という（苦笑）。だってさー、後半か

ら出てくる、主人公の心の支えになるヒロインの月夜って、これ誰がどう見たって慧音じゃない。こども露骨に自分のこと書いてある小説を、はたして選考委員として推せるのか。普通なら選考を辞退してもおかしくないレベルだよ。

霊夢 今までの慧音からすれば、妹紅を推すときは恥も外聞も捨ててる感じじゃない？

萃香 そうだけどさ（苦笑）。自分に累が及ぶとなると、どうなるかなー。あとはまあ、上下巻ものが候補になること自体珍しいから、この長さがどう言われるか、かね。

◆永月夜姫『バイバイ、スプートニク』（竹林書房）三回目

予想：霊夢 - 萃香◎ 評価：霊夢A 萃香A

霊夢 で、あんたは永月夜姫と二作受賞予想なわけね。

萃香 結局それが一番無難な落としどころだと思うわけよ（笑）。ま、実際『バイバイ、スプートニク』はすごく評判いいし、個人的にも『あの月の向こうがわ』の姉妹編としての期待を裏切らない傑作だと思うから、これで獲ってほしいなあ。そりゃもちろん『あの月』で獲るのがベストだったし、インパクトだったから『あの月』の方が上だけどさ。これで獲るのがまあ、永月夜姫にとっちゃモアベターでしょ。

霊夢 『あの月の向こうがわ』の冒頭で姿を消した少女・抄歌の視点から、あの作品の裏側を描く青春SFね。単体でも読めるけど、前作と並べて読むと、最初からこれ書くことが前提だったんじゃないかってぐらい完璧に前作の伏線回収してるのよね。そういう意味では前作読んだ直後に読む方が面白いから、前作からちよつと間が空いてるのは気がかりだけど。

萃香 SF要素は味付け程度だから、河城にとりとか苦手な人でも大丈夫。しかし姉妹編って聞いたときはあの傑作に何を付け足すのかって不安だったけど、さすがに自分の代表作に書き足そうってんだから気合い入ってるよね。富士原モコが渾身の力作を書き始めたからそれに対抗したんだと思うけど（笑）。最終的に抄歌がどうなるかは前作読んればみんな知ってるわけで、そこでスプートニク二号に乗せられたライカ犬・クドリヤファカのエピソードを作品全体の象徴に置くのはあざとすぎるぐらいにあざとんだけど、絶望的な結末へ突き進んでいく抄歌の姿を徹底して明るく描いているところが非常にいやらしい。思わず笑っちゃた直後に、そのエピソードが結末に至る布石のひとつであるということに気付いて一気に叩き落とされて、でも読み進むとまた笑っちゃって——という読者の感情の揺さぶり方が本当に意地が悪い。賛否両論だった前作のあのラストも、こういう背景があったんだとしたらまあ、納得するしかない。個人的にはそこは敢えてこういう説明つけなくても良かった気はして、そこだけちよつと不満だけど。ま、そういう意味では前作のラストに怒った人にこそ読んで欲しい小説かな。

霊夢 慧音とか？

萃香 まさしく（笑）。実際、票読みするとこっちが受賞作でも何もおかしくない。基本はコミカルでリーダビリティの高い青春SFエンタメだから、文と藍はまずこっち推すだろうし、阿求だってこっちも好きそう。幽々子も案外好きじゃないかな、こういうの。慧音が翻意したり、モコへの投票を辞退したりしたらこっちが単独受賞しちゃう可能性も無いわけじゃない。**霊夢** そうなったらそうなったで荒れそうだし、慧音は何が何でも妹紅をねじこんでくると思うけど。私も『あの月の向こうがわ』が候補になって落ちた上でこれなら合わせ技で本命だと思うけど、こっちだけ候補となると単品として評価するにはどうだろう、と思って外したわ。**萃香** 今回の選考会、どっかで覗き見できないもんかなあ（笑）。

◆霧雨魔理沙『いじわる巫女と三匹の妖精』（博麗神社）四回目

予想：霊夢 - 萃香 ▲ 評価：霊夢 - 萃香 B

萃香 そして本当に巡り合わせが悪いのが魔理沙。今回も作品はいいんだけど、大本命が他にふたつもある状況じゃいかんともしがたいね。

霊夢 あー。うん、私はこれパス。

萃香 だから、自分のこと書いてある小説にコメントするのって厳しいじゃん？（笑）

霊夢 確かにねえ。

萃香 博麗神社の近所に住み着いてる三妖精をモデルにしたほのぼの小説。幻想郷の四季折々の移ろいを妖精視点で眺めつつ、三匹の妖精が人里の人間にいたずらをしては、神社のいじわるな巫女に懲らしめられて、っていう短編連作で。たいへん微笑ましいし、妖精視点の何気ない描写から、幻想郷における人間と妖怪や妖精の関わりを浮かび上がらせるっていうテーマも上手く書ける。そういう意味では、黒谷ヤマメの第八回受賞作『土の家』と作品のタイプのにはわりと近いかな。

霊夢 小松町子と一緒に、軽すぎるって言われて終わりじゃないの？ だいたい、なんで私がいじわる巫女なのよ。こんな理不尽な暴力巫女扱いされるいわれは無いわよ。

萃香 えっ。

霊夢 あによ？

萃香 ……ああ、うん。自分を客観的に見られるかどうかって大いなる問題だよ、うん。

霊夢 何が言いたいのよ。

萃香 妖怪や妖精から見た霊夢はこういう存在だってことだよ（苦笑）。

霊夢 なんでよ。私は博麗の巫女の仕事をしてるだけであって、いじわるや理不尽なことなんて何ひとつしてないわよ。

萃香 いじわると理不尽の定義付けが必要だなあ（苦笑）。

霊夢 あんたも私のことこういう風に見てるわけ？

萃香 え、私？ いや私はなんというかその……いや、そういうのはいいから！ ま、ともかく、幽々子や藍はこういうの好きそうだし、慧音も案外これは認めるんじゃないかなあ。妖精の子供っぽい思考がすごくよく書けてるし。阿求が反対するのは目に見えてる気もするから、受賞はまずありえないとは思うけど、他はもつと無さそうだし一応大穴はつけておこうと。

霊夢 私は断固としてこれは受賞してほしくないわ。

萃香 なんです？ 自分とこの本じゃん。

霊夢 またうちの神社に変な評判立ちそうじゃない。

萃香 それならそもそもなんで出版したのさ（苦笑）。

霊夢 魔理沙の本は売れるんだから仕方ないでしょ。背に腹は代えられないのよ。

萃香 世知辛い話だねえ。

◆水橋パルスィ『緑色の眼をした私』（旧地獄堂出版）二回目

予想…霊夢 ▲ 萃香 - 評価…霊夢 B 萃香 A

萃香 さて、今回の影の目玉。

靈夢 あんた、前に候補になった奴はボロクソに言ってなかった？

萃香 あー、なんだっけ、『さようなら、恋』か。いや、あれがダメだったのは語り手の独りよがりが無自覚に肯定され続けるからであってさ、客観的に自分を見てどうか、っていう部分が致命的に欠けてたからね。そういう意味で、まるっきり別物と言っていいぐらい良くなった。靈夢 生まれてから自分の顔を一度も見たことがなく、自分は世界で一番醜いのだと信じて育った少女が、鏡に映った自分自身に惚れてしまつて、やがて自分自身への嫉妬から破滅へ突き進んでいくっていうダークな恋愛小説。

萃香 自分自身がそれなりに美しいことを知らずに、世界中の全てが自分より美しいと思つて全てに嫉妬する主人公の姿を、滑稽に描いているところが今回のポイントだね。このネタなら叙述トリックにも出来たと思うけど、敢えてそうしないで「自分を客観的に見る」ことができないうが故の苦しみと、傍から見たときのその滑稽さにテーマを絞ってるからスマートに仕上がってる。もともとと迫力のあつた嫉妬描写は今回も健在で、シチュエーションがシチュエーションだけにその迫真の嫉妬描写が全部コメディに転換して非常に笑えるんだけど、状況はどんどん洒落にならない展開に突き進むから笑う顔がだんだん引きつってくるあたりが上手い。そのへんは意外と『バイバイ、スプートニク』と読み口の感じは近いかも。

靈夢 そう？ 私はわりと最後まで笑つて読んだけど。

萃香 靈夢は劣等感とかと一番縁の無い人間だから、ほら（笑）。

霊夢 あによ、バカにしてる？

萃香 いやいや、私や霊夢のそういうところが好きだよ。

霊夢 ま、しかし大穴はつけたけど、受賞はないでしょうねえ。先に幻想郷恋愛文学賞でも落ちたし。パチュリーあたり気に入るかしら？

萃香 選考委員の面子もこういうねじくれた自意識に共感してくれそうなのはいいからねえ。そういや幻想郷恋愛文学賞では鈴奈庵の小娘がこれ推したんだっけ？

霊夢 かなり気に入ってたみたいよ。そういえばあの子、こっちの予備選考委員もやってたから、無理矢理ねじ込んできたのかしらね。小鈴も大概いい趣味してるわ、小説に関しては。

◆三輪雲衣『雲海の守護者』（命蓮寺）初

予想：霊夢 - 萃香 - 評価：霊夢 C 萃香 C

霊夢 三輪雲衣って、なんかアレなの書いてる作家じゃなかった？

萃香 女性向け耽美小説書いてた作家だね。十六夜咲夜なんかよりもっとそっち方面に特化したやつで、『ネズミの僕はトラに噛みつく』とか、『素直になりなよベイビー』とか、『君の海に碇を沈めて』とか、中身についてここで語るのはちょっと憚られる系の（苦笑）。

靈夢 これもちょっとそういうところあるわよね。それがメインじゃないけど、なんかこう、相棒関係というには距離が近すぎるよーな。

萃香 ま、それはさておき（苦笑）。これは三輪雲衣初の冒険小説。雲の上を駆け巡る飛行船の船長と、その船の護衛をする拳士のちょっと過剰な友情と、ハラハラドキドキの冒険の話。いや、悪くはないんだよ。若者向けの冒険ファンタジーとしてのツボは押さえてるし、船長と拳士の友情には一部読者がメロメロになってしまいうのも解るんだけどさ（苦笑）。

靈夢 なんかこう、これといった特徴というか強みが無いのよねえ、これ。

萃香 まさしく。ストーリーの骨格は門前美鈴の『風雲少女・リンメイが行く!』みたいな少女少女向け冒険活劇なんだけど、キャラ付けは普段の三輪雲衣的で、テーマ的には後半意外と抹香臭い方向に行くんだよねえ。色んな層に受ける要素を入れようとして焦点が不明瞭になってしまったというか、かえってニツチな方向に進んでしまったというか……。そういうアンバランスさぐらいしか特徴が無い。耽美ものでの文体がアクションに活かされてるかっていうとそうでもないし、キャラ付けも読者の妄想を煽る方に特化しすぎで話の中での掘り下げという意味では物足りないし。

靈夢 別につまらなくはないんだけど、この候補作の中じゃ完全に埋もれちゃってるわね。これなら幻想郷恋愛文学賞獲った秋静葉の『神恋し森』でも入れれば良かったのに。

萃香 いや、このラインナップの中だとあれ入れても埋もれると思うけど（苦笑）。ま、いち

ばん普通のエンタメだから、文あたりは評価してくれそうな気もするけど、選考会ではほとんどスルーされて終わるんじゃないかな。

◆青娥娘々『腐乱ドール』（道書刊行会）初

予想：霊夢○ 萃香－ 評価：霊夢B 萃香A

萃香 最後は青娥娘々の第一短編集。霊夢、これに対抗してるんだ。なんで？ 面白いけど、どう考えたって受賞の目はありえないと思うんだけど。

霊夢 妹紅以外はわりと適当につけたからねえ。ま、パチュリーが推すでしょ。幽々子も好きそうじゃない？

萃香 パチュリーは自分で前作に賞やってるからこれに関しては大人しいと思うけど。ええと、これは《幻想演義》に掲載された短編集を集めた短編集。二十四時間ごとに記憶がリセットされるゾンビの少女とその主の奇妙な愛情関係を描く表題作のほかに、壺に閉じ込められた少女を襲う理不尽な災厄をコミカルに書いた「とじこめられて」、連続放火魔の炎に向ける偏執的な愛情と恐怖を徹底的に掘り下げる「炎のめざめ」、誰にも聞こえない声が聞こえてしまう少女の狂気を描く「耳子」の全四編。たいへん粒ぞろいのホラー短編集だね。

靈夢 『肢体』もそうだったけど、常識から一步どころか百歩ぐらい間違った方向に踏み出してる連中のズレた価値観や倫理観を、まるでそれが当たり前みたいに書くのよね。どう考えてもおかしいのに誰も突っ込まないのが不気味っていう。

萃香 でもこの作者に関しては、それは狙って書いてるんじゃないかって、ナチュラルに作者自身がズレてるだけじゃないかとは思うけど（苦笑）。パチュリー賞もそういうズレをナチュラルに描いたことを評価しての受賞だったみたいだけさ。でも、小説の書き方としては青娥娘々はむしろ極めて真っ当。びっくりするほど普通に上手いよ。私は「とじこめられて」が好きだなー。みんな壺の中に誰かいるの解ってて、中の人が助けを求めているのにも気付いているのに、なんかかんや理由をつけてそれをスルーして壺を好き勝手に使う、無邪気な無関心の残酷さ。やー、うん、色々思い当たるところがあって胸が痛い（苦笑）。

靈夢 あんた本気で反省してんの？ 私は「耳子」が好きかしらね。他人にできないことができちゃうと色々めんどくさいっていうのはわりと身につまされるわ。

萃香 博麗の巫女が博麗の巫女であることをめんどくさがりなさんなよー（苦笑）。ま、しかし、嬉々としてグロテスクな描写入れるあたりの露悪的なところは顔しかめる選考委員がいそうだし、小説技術とは関係ないところで文句言われて落とされる気しかしないんだよなあ。こういうブラッくな作品も評価してやってほしいんだけどね。

◆ まとめ ◆

霊夢 結局妹紅と輝夜の一騎打ち？ 順当すぎて面白みに欠けるわねえ。

萃香 そうだけど、他の作品の目はさすがに無いと思うなあ。いや、候補作の粒は揃ってるから、富士原モコと永月夜姫が万一相討ちにでもなれば一気に面白くなりそうではあるんだけどさ。まあでも、他の作者はまだチャンスあるだろうけどモコと夜姫はここで獲れなきゃ一生獲れないかもしれないから、ここであげておくのが人情ってもんだと思うよ（笑）。

霊夢 ダブル受賞って当人同士が一番喜ばなさそうな結末だけど。
萃香 そいつは言いつこなしってことで、さ（苦笑）。

第十回稗田文芸賞に霧雨魔理沙さんの『いじわる巫女と三匹の妖精』

第十回稗田文芸賞は二十三日、人間の里・稗田邸にて選考会が行われ、霧雨魔理沙さんの『いじわる巫女と三匹の妖精』（博麗神社）が受賞作に決まった。授賞式は来月十日、博麗神社にて行われる。

今回の選考会の模様について、選考委員の西行寺幽々子氏は「選考委員それぞれの推す作品、反対する作品が分かれて、各作品についてじっくり話し合うことになったわ。三輪さんは誰からも票が入らなかつたんだけど、あとはバラバラでね。全員一致での決定は出来そうになかつたから受賞作なしにするかっていう話にもなつたんだけど、最終的に投票で一番点数の多かつた作品にしよう、っていうことになって、私と慧音さんの二人が○、残り四人が△で合計四点の魔理沙に決まつたわ。魔理沙の作品は以前の作品のような若々しいエネルギーのほとばしりは無いけれど、元から持っていた世界の優しさが、ただ甘いだけでなく、人間観察、妖怪観察の深まりによって味わいが豊穡になつた、その進境を高く評価したいと思うわ」とのんびりと語つた。

霧雨魔理沙さんは、魔法の森に暮らす人間の魔法使い。第一二〇季に『星屑ミルキーウェイ』でデビューし高い評価を得た。稗田文芸賞はこれまで三度候補になるも落選しており、四度目の正直での受賞となつた。受賞作の『いじわる巫女と三匹の妖精』は、神社に住み着いた三匹の妖精の視点から、神社の巫女や人里の人間、人里周辺の妖怪たちの関わりを通して幻想郷の

姿を描いた短編連作。

選評は来月十五日発売の《幻想演義》如月号に全文掲載される。

霧雨魔理沙さんの受賞のことば

あー？ 私が受賞？ おいおい、冗談きついで。……え、マジで？ いや嘘だろおい、今回は富士原モコと永月夜姫で鉄板だってみんな言ってただろ！ いや、そりゃ嬉しくないわけじゃないけどさ、どんなリアクションすればいいんだよ？（帽子で顔を隠しながらしばらく考え込み）え、マジで私なのか？ いやいや、うん、むしろ私が貰って当然だぜ！ 今まで三回も落とされたんだからな。ここらで断ってやるのも面白いけど、慧音あたりが怒って倒れても困るから、里の寺子屋の子供たちのために貰ってやるぜ。

賞金？ 今までの記事でも思ったけど下世話なこと聞くもんじゃないぜ？ ま、魔法使いは何かと入り用なんでな。今後の研究費用としてありがたく使わせてもらうさ。

（文々。新聞 師走二十四日号一面より）

《選評》

真摯な自己批評性 パチュリー・ノーレッジ

今回は久しぶりに選考委員全員の意見がはっきりと分かれ、白熱の議論が交わされた。「雲海の守護者」を除く五作品それぞれを強く押す委員があり、それぞれの文学観を元に議論白出、結果として個人的に推した作品を受賞させることは叶わなかったものの、有意義な選考であったと思う。

受賞作となった『いじわる巫女と三匹の妖精』は、これまで三度にわたり受賞を逃してきた霧雨魔理沙氏の、真摯な自己批評性が受賞に繋がったと言っていいだろう。「星屑ミルキウエイ」や『フェアリーウォーズ』が、娯楽小説としての質の高さは多くの人に認められながらも本賞を逃してきたのは、彼女の作品の根底に、世界に対する甘えがあったからに他ならない。世界は自分に優しいのであるという無邪気な信頼はときに美しくも映るが、自己と世界に対する批評性の欠如は、物語の底を浅くする。その点、本作もさりと一読しただけでは、特に深みのないほのぼのとした日常小説に思える。だが、直接的にこそ描かれないものの、妖精の無邪気な視線が鋭くえぐり出すのは、人間の営み、妖怪の営みが生み出す陰の部分だ。世界はただ優しいだけではない、その陰影を浮かび上がらせてはっきりと見つめ、しかしそれでも世界の美しさを、人間と妖怪、妖精が通じ合えることを正面から語る。そこに本作における、彼女

のはつきりとした自己批評性がある。彼女と個人的に関わりのある身としては、願わくばその自己批評性を普段の振る舞いにも適用してほしいのだが、兎も角、彼女の幻想郷文芸へのこれまででの貢献も含めれば、功労賞的な趣きこそあるが、これを機に作家としていつそうの進境を期待するものである。

私が個人的に最も強く押したのは、水橋パルスィ氏の『緑色の眼をした私』である。自己批評性による進境という意味では、よりはつきりとそれが現れていたのはこちらであろう。以前候補になった際に指摘された独りよがりな自己愛を、今回は敢えて真正面から扱い、諧謔的に描くことで過去の作品に対する彼女なりのアンサーともなっている。惜しくも受賞に至らなかったのは、鬼気迫る嫉妬描写を支えるべき日常、語り手の周囲の人物の描写が弱かったことが挙げられよう。本作で向けられた自己に対する眼差しを、今度は他者まで向けたさらなる傑作を期待したい。

この二作に限らず、自己批評性は今回の候補作の多くに共通するテーマであった。作者の自伝的小説である『永遠の途中で』もそのひとつであるが、これはいささか長すぎて焦点がぼけてしまった感は否めない。全ての出発点であるはずの過去の罪に対する掘り下げが、永遠を生きる苦しみにすり替えられ、何が罪であったのか、その点が宙に浮いてしまった。著者の全てを注ぎ込んだ力作であるのは間違いないが、自分自身の生きてきた時間の全てを、まだ著者自身が無機的に繋ぎ切れていないのが本作の不完全性に繋がっている。『永遠の途中で』という

タイトルからして、その不完全性こそが主題であると見なすべきでは、という意見もあったが、それならば本作で受賞するより、そこに対して著者が答えを出したときにこそ受賞すべきでは、という意見もあり、私は後者に賛同するものである。

規定の紙幅が既に尽きているが、もう少しご容赦願いたい。もう一作、『バイバイ、スプートニク』もまた、著者の代表作『あの月の向こうがわ』に対するアンサーであるという意味で自己批評性の高い作品である。が、『あの月の向こうがわ』のあの賛否両論を集めた結末の蛮勇に快哉を叫んだ者としては、本作でそれにかにも読者に納得を促すような解答をつけてしまったことが残念でならない。賛否を集めたが故の解答であろうが、絶賛とともに多数の『否』を集めたことにこそ、前作の最大の価値があった。一般的にはこの解答が歓迎されるのである。うが、大衆性に迎合することで前作の小説としての最大の価値は貶めてしまった。それを彼女自身が良しとするのであれば、残念ながら彼女の作品は私の評価するものではない。

残る二作は簡単に、『腐乱ドール』は、破綻した倫理観、異常を正常として描く筆致は『肢体』同様であるが、小説技術的にはあまりにお行儀が良すぎる。非常に質の高いホラー短編集ではあるが、彼女の作品の魅力は逸脱にこそある。既存の小説作法も、その倫理観に則って破壊してしまっ頂きたい。『雲海の守護者』は今回の候補作の中に入れられたのが不幸であったろう。それなりに楽しめる娯楽作ではあるが、厳しく言えば凡庸である。このフィールドは既に幻想郷にも実力ある先達が多い。作家として独自の武器を考えることを勧めたい。

小骨の取れた清々しい気持ち　西行寺幽々子

実を言うと、第三回ときに『星屑ミルキーウェイ』を落としてしまったことは、ずっと喉に刺さった小骨のような感覚として残っていたわ。第三回は私が初めて参加した選考会だったけれど、受賞作はひとつだけだと思っていたから『満月を喰らう獣』の方を推したのだけれど、今にして思えば別に受賞に強く反対する理由もなかったから、猛烈に推したふたりを立てて一緒に獲らせてあげれば良かったなあ、と。今回、『いじわる巫女と三匹の妖精』で魔理沙に受賞させてあげられたことで、今はようやく小骨が取れたような、清々しい気分できるところ。

今回の作品を私が受賞作として推したのは、ただ綺麗にデコレーションするだけが、作品を美味しく見せる手段ではないということ、作品を通して示してくれたことが一番大きいわ。苦みや辛み、あるいは塩気があるからこそ、甘みが引き立つのだということ。パチュリー委員はそれを自己批評性による進境と言っていたけれど、私は自分自身を掘り下げたというよりは、彼女の見聞が、その目に映る世界が、その舌に覚えた味が広がった結果だと思うわ。甘いお菓子の大好きな子供から、苦いコーヒーの飲める大人になったということかしら？　砂糖とミルクを入れたコーヒーが一番だと言うほほえましさはご愛敬。子供であることの全てを否定する必要はないのだから、苦くて甘いこの作品こそが、彼女の成長の印であると思うわ。

もう一作、私は『腐乱ドール』を推したのだけれど、こちらは受賞に僅かに及ばなくて少々残念。料理の過程を、食材の解体から読者に見せつけるみたいな悪趣味さはあるけれど、見た

目は綺麗に仕立てた中にクセになる味を仕込んでいて、楽しい作品集だったわ。生と死に対する感覚が重苦しくないのも好感が持てるところね。生きるも死ぬも、あんまり重苦しく考えればかりだと胃もたれしてしまうと思うのだけれど、寿命のある人間にとってはそれは胃もたれしないといけないもののかしらね。

その胃もたれ感が強かったのが、『永遠の途中で』。殺人という罪に対する贖いと、罰として与えられた永遠の命、そして復讐となると、トンカツ・チキンカツ・メンチカツの三段重ねみたいな重さがあるわ。その重さこそがこの作品を支えている原動力というのは理解できるのだけれど、そんなに深刻に考えなくてもいいんじゃないかしら、と言ってあげたいわね。『緑色の眼をした私』の語り手にも同じようなことを言ってあげたいと思ってしまうのは、私が亡霊で老成してしまったとかかしら？ 歳は取りたくないものだけれど。

『バイバイ、スプートニク』は、実は前作を読んではいたのだけれど内容を綺麗さっぱり忘れてしまっていて、読み終わってから前作のことに気付いたの。もちろん単体で読んでも美味しくはあったのだけれど、前作と合わせてこそその価値のある作品というのが引かかってしまった。前作と一緒に候補になってるなら兎も角、これ単体で賞をあげるのとは何か違うんじゃないかしら、と思って票を投じるのを躊躇ってしまったわ。ごめんなさいね。

ああ、もう残り行数が無いわ。『雲海の守護者』はお茶菓子にはちょうどよかったけれど、残念ながらそれ以上のものではなかったとだけ。

私人として、選考委員として 上白沢慧音

まず初めに断っておきたいのは、私は『永遠の途中で』の作者である富士原モコ氏と非常に親しい間柄にあるということだ。そして、彼女の自伝的小説である本作の中には、明らかに私をモデルとしている人物が、それも重要人物として登場している。そういう意味で、私はあまりに私人として作者とこの作品に近すぎ、この作品を公に論じる資格が無い。

これまで、富士原モコ氏の作品は公私を別として書評で取り上げてきたが、今回このような作品に対し、稗田文芸賞選考委員という公の立場で私が議論に参加するのは不適切であろうと、今回の選考会を辞退することも考えた。最終的には阿求委員の要望もあり、『永遠の途中で』に関する議論には参加せず、投票では賛成票も反対票も投じない、という条件で参加することにした。それはそれで候補作全てに対して公平性を欠いたかもしれないと今にして見れば思うが、結果の出ってしまった今更になって言っても詮無い話ではある。ともかく、この選評でもこれ以上『永遠の途中で』については触れないので、ご了承願いたい。

さて、受賞作である。今まで私は霧雨魔理沙氏の候補作について、作品世界が未成熟であるとして受賞に反対してきたが、今回、『いじわる巫女と三匹の妖精』について、私は初めて氏の作品を推した。それはひとえに、本作がそれまでの無邪気な寓話的世界観から一歩進み、その目で現実を見据えたからに他ならない。しかも、妖精の視点を通すことで、その現実にはリアリスティックな不透明性を与えたことが、作品全体に深みを与えている。寺子屋の子供たちを

見ていれば思うが、子供は子供なりに、大人の社会の理屈を理解してはいなくても、その本質を無邪気な視線で見抜き、また子供自身の振るまいが大人の社会の投影ともなる。その事実を、作者は自然の具現である妖精の視線を通して同様に描くことで、幻想郷における人間と妖怪の関わり合い、人間社会の陰の部分、純粋な視線で見つめ、そして幻想郷そのものと重ね合わせるという離れ業を演じたのである。作中に登場する妖精たちは、何度も人間にいたずらを仕掛け、いじわる巫女に何度退治されても懲りることがない。それは何度も自然を克服しようとしてきた人間と自然の関わり合いの象徴であり、妖精たちの底抜けの純粋さ、全てを見つめる澄んだ眼差しは、そのままこの世界を包み込む自然そのものの美しさであるのだ。四季折々の風景描写に少し気取りがちなきらいはあるが、そこに力を入れていることこそ、本作が描きたかったことは明瞭である。結末で三匹の妖精はいじわる巫女に受け入れられて友達となる、その結末にこそ、人間と自然のあるべき姿が示されているのだ。文句のない受賞といえよう。

もう一作、私は永月夜姫氏の『バイバイ、スプートニク』を推した。こちらも、これまで私は彼女の作品に対して厳しいことを繰り返して述べてきた。特に本作と対になる『あの月の向こうがわ』の結末に対して強く批判したことを覚えておられる方もいるかもしれない。本作は、その結末に至った裏側を綴る作品であり、前作で消化不良を起こしていたあらゆる要素が本作で氷解する。パチュリー委員は読みの多様性を捨て去ったと言っただけの事を批判したが、私は本作をもって前作の物語にきちんと決着をつけ、読者の疑問に答えを提示したことを高く評

働きたい。何事もはぐらかし、なあなあで済ませればいいというものではない。読者の読解力を信頼するといえば聞こえはいいが、それは単に読者に解釈を丸投げするということであり、生み出した作品に対する作者としての責任の放棄である。解る人だけ解ればいい、というのは多くの場合作者の怠慢に過ぎないのだ。本作は私と藍委員、阿求委員で強く推したが、残る三氏の反対により受賞させることは叶わなかった。前作を候補にしなかったことは本賞の失点とよく語られるが、本作で受賞させられなかったこともまた本賞の失点となるのではあるまいか。

規定の枚数を超過しているので、残る作品には簡単に触れる。最初に落とされた『雲海の守護者』は、稗田児童文芸賞の方にエントリーされるべきであっただろう。『緑色の眼をした私』は、嫉妬心という誰しも持っている感情を深く掘り下げた作品であるが、その嫉妬心を一面的にしか描いておらず、受賞作としては推しかねた。過度な嫉妬が身の破滅を招くのは事実であるにしても、嫉妬のエネルギーは負から正に転換しうることも描かねば嫉妬心の本質を描いたとは言えない。『腐乱ドール』は、こういう読み物が存在すること、こういうものを楽しむ読者がいることは否定しないが、それは隠れてこっそり楽しむべきものであり、稗田文芸賞という公の賞を与えて表の世界に晒し上げるべきものではないという、その一点に尽きるだろう。

1 + 1の証明 八雲藍

しばらく前から寺子屋で子供たちに算術を教えているが、子供たちから訊かれて答えに困る質問のひとつが、「 $1+1$ はどうして2なのか」という問いだ。高等数学を用いて $1+1$ が2であることを証明することはできるが、子供にそれを理解しろというのは酷である。子供に教える算術では、結局「 $1+1$ は2である」という決まりなのだ」という説明以外はしようがない。それは何も数学だけに限った話ではない。子供から「どうして?」と訊かれて、「そういうものだから」としか答えられずに困ってしまった経験は、子供と関わり合ったことのある大人ならば皆一度はあるのではないか。あらゆる事象は様々な要因が絡まり合って成立しており、世界の理の全てを見通し説明することは不可能に近い。思考停止してはいけなさと解っていて、日々の忙しさに難しい問題からは目を背けてしまうというのはよくある話だろう。

受賞作となった霧雨魔理沙氏の『いじわる巫女と三匹の妖精』は、妖精視点からの純粋な疑問を通して、多くの人里の人間が無意識に目を逸らし、思考停止しているだろう問題に問いを投げかけている。 $1+1$ の証明のように、普段当たり前に処理していることに対して根本的な疑問をぶつけられた読者は困惑し、目を逸らして表面上のほのぼのとした物語だけを味わってこの作品を読み終えてしまうかもしれないが、どうか目を逸らさずに、 $1+1$ がなぜ2であるのかを考えるきっかけにしてほしい一作である。

今回の選考会は委員の間で大きく意見が分かれ、稗田文芸賞という命題について、それぞれ

の読みによって今回も六者六様の予想が提出された。特に激しく意見が分かれたのが、私の一番に推した永月夜姫氏の『バイバイ、スプートニク』であった。SF要素はややイメージが先行して理屈が追いつかない欠点こそあるが、あざといまでに読者の感情の揺さぶり方に長けたエンターテインメントとして、また表裏一体の關係にある前作『あの月の向こうがわ』の完結編として、一読者として夢中になって読んだ。前回の受賞作『六花』が難解なものであったからこそ、今回は本作のような明快なエンターテインメントを評価すべきではないかと私は予想したのだが、パチュリー委員、幽々子委員はともかく、射命丸委員が難色を示したのは全くの意外であった。彼女ならば絶対にこれを推すと踏んでいたのだが、かように小説の読解というものは数学のように論理的にはいかぬものである。受賞させることは叶わなかったが、その決定が正しかったか否かは、これから読者によって証明されていくであろう。

『永遠の途中で』は、著者がその半生を見つめ直した渾身の力作であることは疑いようがない。しかし、作中で提示される罪と罰、復讐と赦し、苦しみからの救済といった要素が論理的な繋がりに欠け、未完成であるという印象を受けた。『緑色の眼をした私』と『腐乱ドール』は、どちらも深刻なことをコミカルに描いてブラッくな笑いを醸し出す佳品であるが、前者は非論理的な感情の暴走と対になる論理性が不足しており、後者は逆に論理性が過ぎて非論理的な不気味さが薄れてしまった感がある。『雲海の守護者』は正統派の冒険活劇であり楽しく読めるが、物語に詰め込む要素はもう少し整理した方がいいのではないかと思うところだ。

巡り合わせという難しさ 射命丸文

賞には巡り合わせというものが確実に存在します。たとえば前回、『六花』とぶつかってしまつたために受賞を逃した『ドールハウスにただいま』のように、高い評価を集めながらもライバルが強力すぎて受賞を逃した、そんな作品は稗田文芸賞の九回の歴史の中にも幾度もありました。その中でも、最も巡り合わせに恵まれなかったのが霧雨魔理沙さんでありましょう。第三回では歴史的大傑作『星屑ミルキーウェイ』が僅差で『満月を喰らう獣』に敗れ、第五回では意欲作『星盗人と鏡の国の魔女』で候補になりましたが相手が『天照戦記』では勝ち目はなく、第八回でも名作『フェアリーウォーズ』であと一步まで受賞に迫りながら『土の家』と『雲の上の虹をめざして』に打ち倒されると、三度に渡り苦汁をなめてきた、その心情は察するに余りあります。今回も候補作のラインナップを見た時点で、大方の人が予想した通り、富士原モコさんと永月夜姫さんの一騎打ちになるであろうと私も思いました。それがまさかの魔理沙さんの単独受賞になるので、世の中解らないものです。

受賞作となった『いじわる巫女と三匹の妖精』に関しては、個人的には魔理沙さんの作品の中でも地味な部類の話でありますし、『星屑ミルキーウェイ』を落としてこれで受賞させるのはまーたどこかの八坂なんとか賞主催を調子に乗らせそうな気はするのですが、だからといってまた落とすのも可哀想な話ではありますし、受賞には反対しませんでした。内容に関しては、強く推した幽々子委員や慧音委員に任せることに致しましょう。

巡り合わせという意味では、今回不運だったのが大本命と言われていた富士原モコさんと永月夜姫さんでしょう。私はモコさんの『永遠の途中で』を受賞に相応しい力作として推したのですが、いの一番に推すと思っていた慧音委員が棄権されてしまった結果受賞を逃すことになりました。読み応えは抜群で思った以上にエンターテインメント性も高い、大変な労作だったたけになんだか非常に申し訳ない気分であります。一方、永月夜姫さんの『バイバイ、スプートニク』に関しては、落ちた理由の一端は私が反対したことなので、これまた申し訳ない。ですが、何と言いますか……私は、前作である『あの月の向こうがわ』は非常に好きでして、本作も大変楽しみにしていたのですが、この話は前作の結末を知っていると、物語のありとあらゆる要素が悲劇の布石であると知った上で読み進めることになるので、前作を好きであるほどに読むのがあまりに辛く苦しいのです。読みながら「もうやめてください、読んでる私が先に死んでしまいます」と叫んでしまったぐらいでして、どうして娯楽小説を読んでこんな身を切り裂かれるような辛い思いをしなければならぬのかと……。それ自体がこの小説の力だというのは重々承知しているのですが、「一番面白かった小説を推す」という自分のポリシーから、読むのが一番辛かったこの本を推すことはできませんでした。

代わりに私がもう一作推したのは、青娥娘々さんの『腐乱ドール』です。確かにいかにも慧音委員が顔をしかめるような露悪趣味が鼻につくところはありますが、破綻した倫理観が醸し出すブラックな笑いの中に、周到に伏線を張り巡らせ、四編全てにサプライズを用意する贅沢

な短編集となっており、今回の候補作で一番素直に読んで面白かったこれは小説技術的にも受賞に相応しいと思ったのですが、もうひとつ賛同を得られませんでした。残念。

水橋パルスイさんの『緑色の眼をした私』もブラックユーモアを感じさせる佳作でしたが、こちらは自分自身への嫉妬に狂う語り手に共感できる選考委員がいなかったことが敗因でしょうか。『雲海の守護者』はキャラクター描写に光るところはありますが、それ以外はこれといって強みが無かったという感じですかね。

生きていくということ 稗田阿求

この頃、歳を重ねるごとに、自分に残された時間というものに思いを馳せるようになってきた。阿礼乙女の寿命は三十年に満たない。それ自体を嘆くことはないが、残された時間で自分ができるだろう、という問いは、今の私にとっては切実な問いかけである。

今回の候補作の中で、私が強く推した二作は、生きていくということに対して非常に対照的な描き方をした二作であった。その片方、『永遠の途中で』は、永遠の命を得てしまった人間の苦しみと、そこからの僅かな救いが描かれる。本作については、主題が不明瞭であるという意見が強くあったが、その不明瞭さこそが本作の本当の主題なのではあるまいか。千年以上を生きてなお、自分自身と完全な意味で向き合うことが困難であるという事実こそが、そして本

作の語り手のように、永すぎる時間に感情が摩耗していくならば、阿礼乙女が転生を繰り返すのは人間性を失わず、己自身について答えを得てしまわぬためなのかもしれない。

もう一作、『バイバイ、スプートニク』は逆に、あまりに短すぎる生を描いた。ロケットに乗せられたライカ犬のように、待ち受ける運命を知らないが故の喜劇性が、前作『あの月の向こうがわ』の存在により全てを了解している読者には果てしない悲劇性と映る。その対比は鮮やかであり、運命に翻弄されながらもそれを受け入れ、絶望の淵にあってなお前を向き続ける力強さに私は強く胸を打たれた。どちらの作品も受賞させることは叶わなかったが、私自身のこれからの生き方について、どちらも大切な道しるべとなってくれるであろう作品として、大事に抱えていきたいと思う。

『緑色の眼をした私』は、作者の身につまされるエッセイを愛読している者としては、とうとう自虐路線に走ったかと苦笑の漏れる作品であった。それなりに楽しくは読めるのだが、自虐的である分だけ切実さのようなものももうひとつ感じられないのが惜しまれた。

『腐乱ドール』はホラー短編集の秀作であり、特に「耳子」は他人に無い能力を持つ者のひとりとして非常に身につまされる。ただ、慧音委員や藍委員も指摘していたが、悪趣味な要素を売りにせずとも確かな個性と小説技術を持っているだけに、グロテスクさ以外の表現手段を模索してほしいと思う。

『雲海の守護者』は、個人的に主人公の船長と相棒の拳士の関係性には多大な魅力を感じる

のだが、全体的にはキャラクター小説に留まってしまっているのが惜しまれる。説教臭いのは悪いとは言わないが、説教をするならもう少し説教の内容について作中で掘り下げてほしい。

最後に、今回の受賞作となった『いじわる巫女と三匹の妖精』は、私はあまり強くは推さなかった。私のエッセイを読まれている方はご承知であろうが、私はいたずら者の妖精は嫌いである。そして本作の主人公である三匹の妖精は、まさにその私の嫌いな妖精のど真ん中だ。だからダメ、と言ってしまふのはさすがに狭量なので避けるが、途中まではやはり主人公たちに苛立ってしまうのは否定のしようがない。最終的には良い話になるのだが、人間と妖精が手を取り合う結末にするなら、妖精のしてきたいたずらについても巫女が退治するだけでなくきちんとした処理をしてほしいと思うのは、やっぱり私の心が狭いのであろうか？

〔「幻想演義」如月号 特集「第十回稗田文芸賞全選評」より〕

◆受賞作決定と選評を読んで、メッタ斬りコンビの感想

萃香 勉強し直して参ります。

霊夢 誰に頭下げてんのよ。

萃香 いやー、こんな大外ししちゃったら予想屋の看板掲げてられないじゃん（苦笑）。まさ

か魔理沙の単独受賞なんて……。驚天動地、あんびりーばぼーな結果と言わざるを得ないよ。

霊夢 別にいいじゃない、何か賭けてるわけでもないんだし。ま、私もびっくりしたけど、本

は今すごい勢いで売れてるし、神社に参拝客も増えたし、うちとしちゃ万々歳の結果だわ。

萃香 絶対獲ってほしくないとか言ってたくせに！（笑） とうか増えたのって参拝客じゃ

なくて聖地巡礼客のような……。

霊夢 賽銭入れてってくれば何でもいいのよ。

萃香 なんだかなー（苦笑）。ま、それはさておき、選評の方に触れようか。

霊夢 なんか今回、いつもより選評長くなってない？

萃香 あー、文から聞いたんだけど、前回の選評があまりに受賞作以外をスルーしすぎじゃな

いかってクレームがついたらしくて、規定枚数超過してもいいからなるべく全作品に触れよ

うって申し合わせがあったらしいよ。

霊夢 なるほどねえ。しかし、見事に意見が割れたのねえ、今回。

萃香 だねえ。慧音が『永遠の途中で』への投票を棄権する可能性は考えてたけど、まさか『バイバイ、スプートニク』がここまで意見が割れるとは。まあ、パチュリーや幽々子の言い分は解るんだけど、文はせめて△入れてやれよと（苦笑）。

霊夢 パチュリーと幽々子が×なら文が△でも魔理沙に並べないんじゃないの？

萃香 あ、それもそうか。『永遠の途中で』はやっぱ長すぎて焦点がぼけることがネックになったみたいだね。たぶんモコは稗田文芸賞狙ってきてたと思うんだけど、報われないなあ（苦笑）。選評読む限り、惜しかったのはむしろ青娥娘々だったのかな。強く反対したのは慧音だけっぽいし。

霊夢 結局魔理沙に決まったのも、三輪雲衣以外の五作品のどれにするか決めかねて、議論してるうちにみんな疲れちゃって、一番反対意見の少なかった魔理沙でいいか、って落としどころになった感じよね。そういう決め方で獲ったんだとしたら魔理沙的にはどうなのかしら？

萃香 いいじゃん、受賞記念の打ち上げでも授賞式でもなんだかんだ言って嬉しそうだったしさ（笑）。あの受賞の言葉は後で慧音に散々怒られたみたいだけど（苦笑）。

霊夢 妖精と一緒に、調子に乗ると痛い目見るわよって話ね。

萃香 そいや、三月精も本読んだ人間に追い回されて大変そうだねえ。

霊夢 あいつら放っておくと何しでかすかわかんないから、誰かが常に構ってやってるぐらいでちょうどいいのよ。

萃香 向こうは霊夢に構ってほしいんだと思うけどなあ（苦笑）。

霊夢 別に構ってやってもいいのよ？ 退治するけど。

萃香 はい、いじわる巫女はどこまでもいじわる巫女でしたとき（笑）。どっとはらい。

（文々。新聞 睦月二十一日号三面文化欄より）

○月×日

オーナーからの指示で、『いじわる巫女と三匹の妖精』を追加搬入。そろそろ売れ行きが鈍ってきているので、これ以上の在庫を抱えると大量に返本しないといけなくなりそうなのだが……まあ、いざとなったらオーナーが責任をもって引き取ってくれるだろう。今も毎日変装して一冊ずつ買っていくけれど、よくやるものである。

そういえば誰の仕業か知らないけれど、霧雨魔理沙コーナーにこっそり『緑色の眼をした私』や『世界なんて滅ばいいのに』を紛れ込ませるのは止めてほしい。棚差しに戻してもすぐまた置いていかれる。いちごっこは疲れるし、間違えて買った人からクレームが既に二件ほど入っている。タイトルも作者名も表紙に書いてあるのだから間違える方もどうかとは思いますが。何にしても、妖精の仕業めいたいたずらはほどほどにしてほしいところだ。

○月×日

二階ホールで、霧雨魔理沙の稗田文芸賞受賞記念トークショーが開催。司会は例のメツタ斬りコンビで、モデルになった妖精たちもゲストで来ていたいへん盛況だった。客席にはマーガレット・アイリスやパチュリー・ノーレッジの姿もあり、見つかってサイン攻めにあっていたらしい。ちよつと在庫過多になりかけていた『いじわる巫女と三匹の妖精』が減ってくれて、店としてもほっと一息。

途中で鈴奈庵の小鈴ちゃんが店番を代わってくれたので私もちよつと様子を覗きにいったけれど、壇上よりもオーナーが後ろの方でこそそしているのが気になって仕方なかった。霖之助さんがオーナーをからかって遊んでいるみたいだったけれど、紅白の巫女にしろ、人間のやることはよくわからないなあ、と思う。そういえばその紅白の巫女とすれ違ったけど、私のことは覚えてないみたいだった。ひどい。本返せ。いや霖之助さんがあとで読ませてくれたからいいんだけど。そのうちまた背後から不意打ちしてやる。

あと、私の読みかけだった三輪雲衣の新刊の栞の位置を変えた人は怒らないから出てくるように。けちよんけちよんにしてあげるから、ね？

《司会》

博麗靈夢 (博麗神社代表)

伊吹萃香 (書評家)

卷末トークショー
「受賞作家
大いに唸る」

《ゲスト》

霧雨魔理沙 (作家)



萃香 いい天気だねえ。

霊夢 そうねえ。

萃香 最初は大雨、二回目は大風と来たから、今回は猛吹雪だろうと予想してたんだけど（笑）。

霊夢 平和でいいことじゃない。外を猛吹雪にしそうな雪女も来てないし。

萃香 ま、おかげ様で今回も満員御礼。次は里の広場でやる？（笑）

霊夢 なんでもいいけど、さっさと始めましょ。

萃香 はいはい。というわけで、この《稗田文芸賞メツタ斬り！スペシャルトークショー》も早いもので三回目。今回のゲストは、つい先日『いじわる巫女と三匹の妖精』で第十回稗田文芸賞を受賞したばかりの時の人、霧雨魔理沙氏をお招きしております。どーぞ！（魔理沙登場）

魔理沙 おう、呼ばれたから来てやったぜ。（場内拍手）

霊夢 ……なんかこの三人で並んでると、神社にいるのと何も変わらない気がするんだけど。

萃香 いつもの調子で喋ってりゃいいんだから楽じゃん（笑）。

魔理沙 普段の駄弁りなんざ、人に聞かせるようなもんじゃないがな（苦笑）。

萃香 ま、一応この場では私らが司会、魔理沙は作家としての立場で喋ってくれってことだけ

ど、あんま堅苦しいことは考えず、気楽に構えて頂戴な。

魔理沙 元からそのつもりだぜ。ま、何でも訊いてくれたまえ（ドヤ顔）。

霊夢 受賞作家になった途端えらそーに……。もう終わりにしてやろうかしら。

萃香 場所押さえてる阿求に損害賠償求められるだろうけどいいの？（笑）

『星屑ミルキーウェイ』誕生秘話

萃香 ま、まずは例によって、魔理沙の作家としての経歴から振り返っていかうか。デビュー作は言わずと知れた名作、第一二〇季に博麗神社から刊行された『星屑ミルキーウェイ』。

霊夢 もう七年も前？ 懐かしいわねえ。

魔理沙 そんなになるか。そういやあれ書き始めたの永夜異変の後だもんな。

萃香 ここに来てる人にはもう説明不要だと思うけど、一応あらすじだけ紹介しとくと、『星屑ミルキーウェイ』は大空を翔ける新米運び屋の少女アリカが、最強の星空レーサー・マーヤとの出会いをきっかけに、星空レースでの優勝を目指す青春レース小説。《最速》がテーママッてあたりがいかにも魔理沙らしいけど、とりあえず定番の質問として、小説を書こうと思ったのはどうして？

魔理沙 あー、改まってそう訊かれると、なんとも答えにくいんだが。

靈夢 そういや、そのへん私も詳しく訊いてなかったわね。あんたってば、突然あの本の原稿持ってきたんだもの。

萃香 それこそ、『星屑』のアリカみたいにな、誰かの本を読んで衝撃を受けたとか。

魔理沙 いやー、これ言っちゃまっていいのかな。

萃香 ん？ どうしても言いたくないなら別にいいんだけど。

魔理沙 いや、ぶっちゃけた話な、あの当時、ちよいと色々物入りだったんだよ。それでな。

萃香 金儲けかい！（笑）

魔理沙 金は天下の回りものだけ。先立つものが無きゃおち飯も食えん。

靈夢 全く。そうか、あの本は珍しくあんたと利害が一致した結果だったわけね。

萃香 でも、そこで小説で一攫千金って発想は、里で小説が売れてるの見てなきゃ出てこないでしょ。

魔理沙 一攫千金とまでは考えてなかったぜ？ 小遣い稼ぎぐらいのつもりだったんだがな。

編集とか組版とか印刷とか在庫リスクとか、本を作る上で面倒なところは全部靈夢に押しつけて、利益だけ得られるなら美味しい話だと思っただが……。

靈夢 あんたねえ。

魔理沙 まさかあんなに売れるとはなあ。全部自分でやってりゃ黒字全部私の懐だったのに、大損こいたぜ。参った。

霊夢 稼ぎたいなら相応の労力を払いなさいってことよ。

魔理沙 原稿書く労力が一番大きいんだぜ？

萃香 でも、その後も自分で出版社作るわけでもなく、博麗神社から本出してるとよね。

魔理沙 ま、実際原稿書いて霊夢に渡せばそれであると勝手に本が出来てくるってのは楽だなあ。売ってくれたおかげで、わざわざ自分で全部やらなくても十分な収入になったし。しかしな、霊夢のやつ、『The Grimoire of Marisa』の出版は断りやがったんだぜ。おかげであれだけ自費出版だよ。

霊夢 小説ならともかく、スペルカード研究本なんか売れるわけないでしょーが。

魔理沙 ちえ、私の本業を何だと思ってるんだ。

霊夢 作家でしょ。そっちの収入で今食ってるようなもんじゃない。

魔理沙 それを言ったらお前だって博麗の巫女じゃなく出版業が本業だろ？

萃香 まーまー（苦笑）。生臭い話はそのへんにして、実際『星屑ミルキーウェイ』はどういう経緯で生まれたのか。お客さんが聞きたいのはそこだと思っただけ。

魔理沙 あー、もう七年も前だからあんまり細かいことまで覚えてないぜ？

萃香 覚えてる範囲でいいからさ。あれ書く以前、幻想郷で出てた他人の小説は読んだの？

魔理沙 いや、どっちかってーとアレだな、パチュリーの蔵書の外来本だ。

霊夢 盗んだ本ね。

魔理沙 死ぬまで借りてるだけだぜ。いや、主な狙いは魔道書だったんだが、借りてきた中に外来の小説もいくつか紛れ込んでな。そいつを暇潰しに読んでいたんだ。

萃香 なるほど。さすがに何も無いところからあれ書いたわけではなかったんだ。

魔理沙 ま、そもそも『星屑』が初めて書いた小説じゃないしな。

萃香 お？ あれ以前に何か書いてたの？

魔理沙 いや、人に見せるようなもんじゃない習作だぜ。(帽子で顔を隠す) 実験と検証で本番の精度を高めるのは研究も執筆も似たようなものだ。

霊夢 今後魔理沙んち行って未発表原稿漁ってこようかしら。魔理沙の未発表初期作品集って言って売り出せば今なら売れるだろうし。

魔理沙 そいつはやめてくれ頼むから！ てか『星屑』も今読み返すと気恥ずかしいんだがなあ。そもそもあれ、ペンネームでこっそり出すつもりだったのに霊夢の奴が……。

萃香 あー、そういうや霊夢がなんかそんなこと言ってたね(笑)。

霊夢 ちょっとした手違いの誤植よ。それに関しては謝ったじゃない。

魔理沙 ペンネームを本名と間違える誤植があるかよ！ 全く。

萃香 (苦笑) ところで魔理沙、お客さんの一部が『星屑ミルキーウェイ』が金儲けのために書かれた小説だったなんて……失望しました、魔理沙ちゃんのファンやめます」みたいな顔してるけど、いいの？(笑)

霊夢 トークがつまらなくても魔理沙ちゃんのことには嫌いなならないでください。 (場内笑)
魔理沙 何のネタだよ！ ……あー、ごほん。んなこと言ったってなあ…。 (もごもご何事か口の中で呟く)

霊夢 ま、こいつ嘘つきだから、どの話も話半分ぐらいに聞いておいた方がいいわよ。

萃香 正直なこと言いなよー。

魔理沙 あーもう、うるさいぜ。アレ、今読み返すとめっちゃ恥ずかしいんだよ！ なんで私こんなもん書いたんだよってレベルで！ 七年前だぜ七年前。そんなもん正視できるかよ！

萃香 えー、なに、やっぱり作者的には今読み返すと出来に不満？

魔理沙 今日の私は昨日の私より進化しているからな。明日の私がいつだって最強だぜ。

霊夢 単に話の青臭さが歳とって恥ずかしくなっただけじゃないの。

萃香 『フェアリーウォーズ』の方が青臭くない？

霊夢 だから妖精の話として書いてるんでしょ。

萃香 あー、なるほど。まー実際『星屑ミルキーウェイ』はあれ取り憑かれて書いたタイプの小説でしょ、読めばわかるよ (笑)。狙ってああいいう話書くほど器用なタイプには見えないもんねえ、魔理沙。永月夜姫とかならともかくさ。

魔理沙 勝手に決めつけるもんじゃないぜ、全く。 (ぶつぶつ)

霊夢 器用に書けるっていうんならせめて年に一冊は新作出しなさいっての。 (場内笑)

第三回稗田文芸賞落選と『星盗人と鏡の国の魔女』

萃香 さて、このまま『星屑ミルキーウェイ』のファントークに突入してもいいんだけど、このトークショーは《稗田文芸賞メッタ斬り！スペシャルトークショー》。ということは、やっぱり第三回稗田文芸賞に触れないわけにはいかないわけで。

霊夢 稗田文芸賞史上に残る落選事件。実際どうなの、当事者的には。

魔理沙 んなこと言われても、もう七年も前だしなあ。

萃香 作者的には、獲れると思ってた？

魔理沙 そりゃ、書き上げたときは快心の自信作だったから、私が獲って当然だと思ってたぜ。他の候補作は読んでなかったんだけどな。

霊夢 本当かしら。ま、実際下馬評でも本命だったけど、蓋を開けてみたら慧音の受賞で。

萃香 選考会では文と阿求が推しに推したけど、惜しくも及ばず。

魔理沙 それなんだよ。選考会の様子がどうだったかって、候補になっても選評読まなきゃ解らないってのは、どうなんだ？ 勝手に候補にされて密室で決められたんじゃないやたらんぜ。

萃香 候補作の公表すらないパチュリー賞なんかよりは開かれると思うけど（苦笑）。

魔理沙 選考会なんてこのトークショーみたいに公開して候補者も呼んでやりゃいいんだよ。

霊夢 見当外れなこと言って他の委員に言い負かされるの見られたくない奴がいるんでしょ。

萃香 霊夢まで飯の種をそうディスりなさんなってば（苦笑）。そういえば、今までのゲストに聞きそびれてただけど、落選の連絡ってどのタイミングで来るの？

魔理沙 ああ、ブン屋の奴が選考会後にわざわざ家まで飛んできてたぜ。

萃香 なるほど、確かにそれが一番早いか（笑）。落選って聞かされたときはどうだった？

魔理沙 ま、最初だったし宝くじぐらいの気分だったかなあ。当たる確率の高そうなくじだったから、ハズレって言われて肩すかし食らったぜ。

霊夢 世の中そう甘くないってことよ。

萃香 お、キーワード入りました。「甘い」。これ、魔理沙作品が稗田文芸賞で落とされるとき
の常套句みたいに使われてたよね。こないだ受賞した『いじわる巫女と三匹の妖精』まで、それこそ執拗に。それを踏まえて、今度は第五回稗田文芸賞候補作『星盗人と鏡の国の魔女』について聞いてみたいんだけど。

魔理沙 あれだってもう五年前だぜ？

萃香 まーそう言わずに（苦笑）。『星盗人』は『星屑』から一転して、メルヘンな世界の残酷童話みたいな路線に行ったけど、あれはやっぱ第三回で『星屑』が「幼い」とか「甘い」とか言われたことへの意趣返しとしてああいう話にしたわけ？ 少なくとも私はそういう風に読んだんだけど。

魔理沙 そう思ったなら、お前にとっちゃそうなんだろう。作者が正解言っちゃ興奮だぜ？

靈夢 なーにいったらいいのよ。単にパチュリーの小説みたいな書こうとして失敗したんでしょ？

魔理沙 勝手に失敗して決めつけるなよ。そりゃ、パチュリーの『本の森よバベルを語れ』とか意識しなかったとは言わないけどさ。

萃香 あ、元ネタそれなんだ。へー。

靈夢 なに、あれはあれで狙い通りの形になってるわけ？ 最終的にわかりやすい話に落ちちゃってるあたり、あんたの素が最後に露呈したんだと思ってたけど。

魔理沙 深読みの余地を残しつつ綺麗なオチにまとめる話のつもりだったんだけどなあ。今読むと気分つてるところがやっぱり恥ずかしいぜ。

萃香 やっぱ『星屑』への稗田文芸賞の評価は意識してたんじゃん(笑)。

魔理沙 小難しい話をありがたがれば読者として上等、みたいな風潮が気に入らなくてな。

萃香 あ、今色んな方面に喧嘩売ったよ魔理沙(笑)。

靈夢 別に誰もそんなこと言ってないと思うけど。落とされ続けた被害妄想じゃないの？

魔理沙 どっちにしろ、神奈子の『天照戦記』にゃ、悔しいが完敗だぜ。ま、『星盗人』のおかげで自分の書きたいもんがある程度はつきりしたのは収穫だったかな。

萃香 それが『フェアリーウォーズ』に繋がるわけだ。

『フェアリーウォーズ』から『いじわる巫女と三匹の妖精』へ

霊夢 『フェアリーウォーズ』って、チルノと三月精の喧嘩がモデルなんでしょ？ 別に異変でも何でもなかったから、私はよく知らないけど。

魔理沙 ああ、いつぞやチルノに喧嘩挑まれてな。そのときに三月精とやり合ってたって聞いてたんだが、その話を思い出して書いたんだ。つっても、使ったのは「一匹の妖精対三匹の妖精」って構図だけだぜ。

萃香 チルノたちがあんな真面目な理由で喧嘩したとは思わないよ誰も（笑）。直球のエンタメ路線に戻してきたのは、さっき言った「書きたいものがはっきりした」ってこと？

魔理沙 小難しい話は性に合わないってことだぜ。

霊夢 ま、あなたの作風はそっちの方がいいわよ。何も考えてないような感じの話。

魔理沙 お前なー、あれでも書いてる方はけっこういろいろ考えてんだぞ。どういう展開にするや面白くなるかって考えるのは結構頭使うぜ？ ああでもないこうでもないって原稿用紙の前で唸っていると、なんで魔法の研究も放り出してこんなことやってたんだ、とか思ってた一ヶ月ぐらい原稿放り出して別のことやったりしてなあ。

霊夢 そんなんだから二年に一冊しか本出ないんじゃないの。

魔理沙 早く書けばいいってもんじゃないぜ。

萃香 ここに来てる読者さんはもっと早く新刊出して欲しいって思ってるだろうけど（笑）。
ねー、皆さん？（場内同意の声）そいや《幻想演義》で連載持とうとか考えたりしないの？

魔理沙 依頼はあったけどな。べ切にせっつかれて書くのは性に合わないぜ。

霊夢 そういうのは、一度でいいから私の示したべ切守ってから言いなさいよ。

萃香 あれ霊夢、書き下ろしの本にべ切求めたりしてたっけ？

霊夢 だって、出せば売れるくせに新作書かないんだもの。

魔理沙 『星屑』の稼ぎだけで二年ぐらい暮らせたしな。だいたい私をせっつかなくたって、
白岩怜とアイリスの稼ぎだけでお前も食えてるだろ？

霊夢 神社壊れたときに吹っ飛んだわよ、色々。

萃香 あのときの損害まだ引きずってるんだ（笑）。

霊夢 温泉の設備整えたりもしたし。そのくせ温泉のお客あんまり来ないし……。

萃香 話を魔理沙のことに戻そう戻そう（苦笑）。その『フェアリーウォーズ』も、第八回稗
田文芸賞で決選投票まで残ったけど落選。このときはどうだったの？ 二年前だからまだ覚え
てるでしょ？（笑）

魔理沙 受賞した二作に負けたとは思ってないぜ。結果は結果だから受け入れたけどな。それ
よりあの回はお前だよお前、霊夢。

霊夢 あによ？

魔理沙 当たり前の事実みたいに『星屑』より落ちる」とか言いやがって。

霊夢 事実でしょ。実際世評でもそうじゃない。

魔理沙 ぐぬぬ。

萃香 魔理沙的には最高傑作のつもりだったと。

魔理沙 いっだって最新作が最高傑作だぜ。

霊夢 意気込みとしちゃそれでいいけど、それを決めるのは作者じゃなくて読者でしょ。実際お客さんに訊いてみる？ 『星屑』と『フェアリーウオーズ』とどっちが好きかって。

魔理沙 結果は分かっているからいいっての。みんな『星屑』に幻想抱きすぎだぜ……。思いっきり若書きの至りだったのに。

萃香 本人的にもあれがかえって足枷って自覚はあったんだねえ。

魔理沙 まあ、あんなもんもう一回書けって言われたって書けないのは事実だけどなあ。

霊夢 それでまた方針転換して、アレ書いたってわけ？

萃香 『いじわる巫女と三匹の妖精』。言わずと知れた今回の稗田文芸賞受賞作だね。

『いじわる巫女と三匹の妖精』はいかにして生まれたか

魔理沙 別に方針転換したつもりはないぜ。今回はああいう話になっただけで。

萃香 これもモデルは三月精だよな？

魔理沙 ああ。あいつらが普段どんな風に過ごしてるのか、色々聞いてみたらこれはこれで面白い小説になりそうだったんでな。

霊夢 だからってねえ。人をなんだと思ってるのよ。誰がいじわる巫女かっての。(場内笑)
こらあんたら、なんで笑うのよ！(場内爆笑)

萃香 (苦笑)

魔理沙 妖精どもから見れば、霊夢はああいう存在だったことだけ。ていうか、そんなに悪く書いたつもりは無いぜ？ 最後ちゃんと理解しあって友達になってるじゃんか。

霊夢 いくらなんでもあのラストあたり、実際にあったこと忠実に元にすぎでしょ。自分で実際喋った記憶のあることが小説に書かれてるってすっごい恥ずかしいんだけど。そもそもプライバシーの侵害よ侵害。

魔理沙 ちゃんと名前は変えたぜ？

霊夢 誰が読んだって私のことだって解るでしょうが。

萃香 でも、おかげで聖地巡礼の参拝客は増えたじゃん（笑）。

霊夢 ぐぬぬ。

萃香 ま、霊夢の扱いはさておき（笑）、この『いじわる巫女』で四回目の候補入りにしてついに稗田文芸賞を受賞。選評では、特に今まで魔理沙の受賞に反対する立場だった慧音が、妖精の視線から幻想郷の諸問題を浮かび上がらせるという手法を評価して受賞賛成に回ったりしたわけだけど。

魔理沙 あいつらの話聞いてると、色々「あ、あれはあの事件のことか」とか、思い当たるこ
とが色々あってな。妖精の目からだという風に見えたのか、つてのが面白かったんだよ。
そういう面白さを小説で書いてみようと思ってな。

萃香 問題提起をしたかったわけではないと。

魔理沙 無い無い。そういうのは慧音に任せるぜ。

霊夢 それより、あんた的にあの選ばれ方はどうだったの？ 推したのは幽々子と慧音だけで、
誰も強く反対しなかったから消去法みたいに決まったような感じみたいだったけど。パチュ
リーも文も渋々同意したっていう風だし。

魔理沙 あー？ どんな選ばれ方でも結果は結果だぜ。

萃香 『星屑』のときと言ってること違うかい？（笑）

魔理沙 ま、そもそもあれで獲れるとは思ってなかったしなあ。

萃香 そういえば受賞の言葉でもそんなこと言ってたね。そう、受賞の言葉といえば！

霊夢 慧音が激怒した「里の寺子屋の子供たちのために貰つといてやるぜ」発言。

魔理沙 あれは記事にした文のせいだったの！

萃香 でもそう言ったのは事実なんでしょ？（笑）

魔理沙 慧音の奴もケツの穴が小さいぜ。おかげで授賞式がなあ。

霊夢 受賞者挨拶のあとの選考委員講評が、慧音による公開説教になっちゃって。

萃香 せっかく選考会では推して受賞にこぎ着けてくれたのにね（笑）。

魔理沙 慧音が私の小説推すなんて想像もしてなかったんだよ。だいたい、私の世界認識を小説の内容から勝手に推定して批判したり賞賛したりってのもなかなかなあ。そう単純なもんでもないっての。

萃香 文芸評論ってのはそういう仕事だからさ（苦笑）。

魔理沙 ま、好き勝手言われるのは慣れてるけどな。正直『いじわる巫女』で獲っちゃまったのは予想外だけど、それはそれでひとつの評価として受け入れるぜ。

霊夢 「何も魔理沙にこれであげなくても」って言われてるしねえ。

魔理沙 主に言ってるのはお前だろ！（場内笑）

作家・霧雨魔理沙の今後は？

萃香 念願の稗田文芸賞も獲ったところで、次の小説の予定とかは？

魔理沙 あー、未定も未定、何ひとつ決まってるないぜ。

霊夢 来季中には何か出しなさいよ。今売り時なんだから、あんたの本。

魔理沙 んなこと言われたってなあ。

霊夢 とりあえず『フェアリーウォーズ』の文庫は出すけど。再来月あたり？

魔理沙 今初めて聞いたぜそれ！勝手に決めるなよ。手直しするからちょっと待ってくれ。

霊夢 あんたの手直しとか待ってらんないわよ。

萃香 あー、なんかアイデアだけとかでもいいから何か無いの？（苦笑）お客さんが一番聞

きたいのって、やっぱり次の新作はどんな話かってことだと思っただけだよ。

魔理沙 そうだなあ……。妖怪使いの少女が、百鬼夜行絵巻から飛び出した百体の妖怪を絵巻

に再封印していく話とか、面白いかもな。

霊夢 なんかそれ、身内に思い当たる節があるんだけど。またモデル小説？

魔理沙 ま、実際書いてみたら全然別の話になるかもしれないし、期待しないで待っててくれ。

二年以内にゃ出るさ、たぶん。

萃香 人間のくせして妖怪よりよっぽど呑気なペースで書いてるんだもんなあ（苦笑）。幻想郷最速がそれでいいの？（笑）

魔理沙 他にやるのが山ほどあるだけだぜ。

霊夢 いつそ、次は幻想郷恋愛文学賞狙って恋愛ものでも書いてみたら？

魔理沙 あー？

萃香 あ、それは読んでみたい（笑）。『星屑』の軽いラブコメパート、私ゃ好きだよ。

魔理沙 いやいやいや、無茶言うなよ。そんなもん書けないぜ。白岩怜とかアイリスと一緒にすんなよ。

霊夢 恋符使いのくせに？

魔理沙 スペルカードと小説を一緒にするもんじゃないぜ！ っていうかいい加減恋符って名前も恥ずかしいんだけどなあ……。なんでそんな名前つけたんだよ昔の私はよ。

萃香 魔理沙の恋愛小説かー。めっちゃくちやピユアな話になりそう（笑）。

霊夢 たぶんヒロインは「うふふ」って笑ってるわね。

魔理沙 （笑顔で）アームロックかけるぜ？

霊夢 おっと、そうはいかないわよ。（お札を取り出す）

魔理沙 お、やるか？（八卦炉を取り出す）

霊夢 そっちがその気ならね。

魔理沙 負けた方がこの後の打ち上げ奢るってんでどうだ？

霊夢 いいわよ、受けて立とうじゃない。

萃香 お、一勝負？ いいねえ——って言いたいけど、トークショーの最中だよ！（場内笑）

霊夢 あ、じゃあ外出ましようか。

魔理沙 おう。

萃香 そういう問題じゃないっての！（場内爆笑）

（第一二七季 如月 霧雨書店二階ホールにて）

あとがきがわりに——決定！第一回メツタ斬り！大賞

萃香 いい加減三冊目ともなると、あとがきのネタももう無いよね（苦笑）。

霊夢 ていうか、今回の本は私らの労力大きすぎじゃないの。トークショー二本はともかく、巻末の採点企画までやらされて……あれのおかげでうちの本の編集作業滞りすぎよ。

萃香 まあまあ。せっかくの稗田文芸賞十周年記念なわけだしさ。

霊夢 もう十年になるのねえ。早いもんだわ。

萃香 というわけでこのあとがきも、十周年記念ということで、これまでの稗田文芸賞の受賞作・候補作全作品から私ら独自のメツタ斬り！大賞を決めようと思うんだけど。せっかくだから八坂神奈子賞と幻想郷恋愛文学賞、パチュリー・ノーレッジ賞と稗田児童文芸賞も入れて、幻想郷の全文学賞の総合チャンピオンでもいいかな。

霊夢 あの採点企画ってそのための前振りだったの？ まあ、なんでもいいけど。

萃香 ふたりの採点をすりあわせた結果、メツタ斬り！大賞候補の十作が既に決定しております！
ばちばちばち。

霊夢 パチュリー『魔法図書館は動かない』、幽々子『桜の下に沈む夢』、魔理沙『星屑ミルキーウェイ』、虹川月音『レインボウ・シンフォニー』、神奈子『天照戦記』、幽香『輪廻の花』、永

月夜姫『バイバイ、スプートニク』、大橋もみじ『白狼の咆吼（全六巻）』、アイリス『ドールハウスにたたいま』、宇津保凛『イカロスは太陽を夢見る』。まあ、順当な面子ね。

萃香 私としちゃ門前美鈴の『そして大地は眠る』を残したかったんだけど……。

霊夢 いつまであんたアレにこだわってんのよ。

萃香 で、実際この中からひとつ選ぶとすればどれにする？ 霊夢が一番高い点つけたのどれ

だっけ。えーと……あ、『星屑』か。無難だなあ。

霊夢 普通に『星屑』でいいんじゃないの？ 落選作を選ぶのもメッタ斬り！らしいでしょ。

萃香 いや、作品自体には文句はないけどさー（苦笑）。こないだトークショーでわいわいやつて、メッタ斬り！大賞も魔理沙じゃいかにもお手盛りでしょー。

霊夢 あんた八坂神奈子賞でもそんなこと言って『白狼の咆吼』に反対してたわね。

萃香 ほら一応この本ブックガイドでもあるわけだからさ、既に売れまくっててみんな読んでいる本に大賞あげるとは無いと思うわけよ（苦笑）。

霊夢 そんなこと言ったって、候補の十作はどれもそれなりに売れてるじゃない。

萃香 そらそうなんだけどさ……ううん、さっきの十作だと順当というか穏当すぎるかあ。こ

こはやっぱりそんなに売れてないの意味でも『そして大地は眠る』を。

霊夢 却下。

萃香 即答すぎるっての！（苦笑） じゃあ古明地さよりの『六花』とかさー。

霊夢 あれも稗田文芸賞獲ってるし、私はあんま好きじゃないし。この本でちゃんと紹介してない宇津保凛でいいんじゃない。イカロスシリーズ三部作ならあんたも文句ないでしょ。

萃香 やっぱりそこかー。あ、一応紹介しておくけど宇津保凛の《イカロス》シリーズは、地底で太陽に憧れる少女・ソラの冒険と成長を描いた、『地の底のイカロス』『イカロスは雪原に舞う』『イカロスは太陽を夢見る』の傑作ジュヴナイル三部作。

霊夢 一巻で自分の身を賭してソラの地底脱出を助けた親友のレンの存在が、三部作を通しての《何かを犠牲にして得られるものはあるのか》っていうテーマを象徴して、最終巻で綺麗に決着したのには感心したわ。

萃香 自己犠牲の尊さを描きつつ、それを一巻のラストと対比させて鮮やかに否定してみせる結末の処理は完璧だね。稗田文芸賞が候補にしなかったのが不思議。まあしかし、稗田文芸賞メツタ斬り！で稗田児童文芸賞受賞作をメツタ斬り大賞に選ぶってのもなあ（苦笑）。

霊夢 だったら何ならいいってのよ。

萃香 いっそなぜか候補から漏れたやつから選ぼうか（笑）。稗田文芸賞をメツタ斬るという趣旨からしても、稗田文芸賞が取りこぼした傑作にメツタ斬り！大賞をあげちゃうっていうのは大いにアリだと思っただけど、どう？（笑）

霊夢 漏れたのっていうと、永月夜姫の『あの月の向こうがわ』？『バイバイ、スプートニク』と合わせ技一本で大賞あげちゃう？ まあ、私もあれならそんなに文句はないけど。

萃香 『バイバイ、スプートニク』が今回わりと理不尽なこと言われて落とされたしねえ。永

月夜姫は誰もが認める実力派なのに無冠、という意味でもいいセレクトじゃない？

霊夢 魔理沙が今回獲ってなければ魔理沙で決まりだったんだらうけど。まあ、いいわよ。永月夜姫で。

萃香 はい、では決定しました！ 第一回メッタ斬り！大賞は永月夜姫『あの月の向こうがわ』

『バイバイ、スプートニク』の二部作に進呈いたします！ わー、ぱちぱちぱち。

霊夢 案外あっさり決まったわね。ところでまさか賞金とか出すの？

萃香 現金はなんかアレだから、賞品にしようよ。作品の内容にちなんで。

霊夢 内容にちなんでって言うってもねえ。月の話だから、桃でもあげる？

萃香 天界からかっぱらってこようか（笑）。あ、あと酒も出そう。とっておきの古酒（笑）。

霊夢 なにそれ？

萃香 紫か幽々子に訊けばわかるよ（笑）。

【作品別索引】

- あの月の向こうがわ 104 158
 天照戦記 185
 天野ジャックは嘘をつかない 82 163
 《イカロス》三部作 158
 イカロスは太陽を夢見る 164
 いじわる巫女と三匹の妖精 106 150 174
 井戸の底にて空を見る 59 169
 インビジブル・ハート 179
 丑の刻参り三十日目 27
 うちの上司が横暴なんですけど。 184
 雲海の守護者 110 172
 遠雷 90 166
 大海原の小さな家族 71 171
 落ち葉の季節に逢いましょう 183
 華国英雄伝 182
- 神恋し森 86 94 166
 川の流れの果てる先 15 182
 キカイノコトバ 12 184
 雲の上の虹をめざして 17 71 178
 くらやみのうたはきこえない 89
 クリムゾン・ナイト 191
 くるくる回るオルゴール 175
 紅の血脈 186
 クロック 190
 月下白刃 176
 幸運エスケープ 181
 声を聞かせて 89 166
 氷の王国 190
 桜の下に沈む夢 191
 殺人人形とタイムトラベラー 192
 サブタレイニアン・ラブハート 165
 さようなら、恋 29 181
- さよならラバーリング 69 169
 肢体 38 91 164
 ジャンピング・スパイダー 23
 水道をつくろう！ 70
 戦国春秋 191
 喪心創痕の狂視調律師 55 168
 そして、死神は笑う。 180
 そして大地は眠る 177
 月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ 170
 土の家 23 178
 動物屋敷の仙果さま 174
 ドールハウスにただいま 167
 永遠の途中で 102 173
 ナイトメア症候群 189
 人形の森 179
 猫のための方程式 187
 バイバイ、スプートニク 104 158 173

- 白狼の咆吼 48 171 183
 遙かなる天獄 51 168
 盤上の将を射よ 48 175
 膝の上の君 91 167
 ビスクドールの枢 162
 風雲少女・リンメイが行く！ 111
 フェアリーウォーズ 147 177
 不幸のシステム 180
 腐乱ドール 112 172
 ベラドンナの奇術 65 168
 星屑ミルキーウェイ 139 188
 星盗人と鏡の国の魔女 145 184
 マスカレード・スコープ 145 185
 魔法図書館は動かない 13 192
 満月を喰らう獣 189
 緑色の眼をした私 91 108 173
 無限の殺人 176
- 優しい花を咲かせましょう 183
 憂鬱ラプソディ 188
 幽霊客船はどこへ行く 179
 幽霊屋台の緑日騒動 170
 雪桜の街 187
 夜に鳥籠の鍵を 186
 六花 176
 リビート・アフター・ミー 90 174
 龍拳伝 189
 輪廻の花 180
 レインボウ・シンフォニー 187

※内容に触れている箇所のみ
 記載。タイトルのみの言及と、
 稗田文芸賞選評での言及は煩
 雑になるため割愛。

巻 末 特 別 付 録

稗田文芸賞10周年記念企画
《文学賞の値うち》
各賞の受賞作・候補作を
メッタ斬りコンビが点数で斬る！

*第118季から第127季までの10年間に決定した、
幻想郷の各文学賞受賞作品・候補作品について、
博麗霊夢・伊吹萃香が大胆に採点、寸評を加えました。
(両者がそれぞれ単独で執筆したデータを合体させたもので、
評価のすりあわせはしていません。

採点・寸評の一致は偶然によるものです)

*採点の基準は、稗田阿求の定めたものです。

*各賞の選考委員名は、当該回の時点でのデータに基づきます。

*版元表記は、文庫版の出ているものは文庫名、単行本のみのも
の・単行本版の採点であるものは出版社名を採用しました。

「文学賞の値うち」採点基準

- 90点以上** 外の世界においても読まれるべき作品。
- 80点以上** 幻想郷文芸の歴史に銘記されるべき作品。
- 70点以上** 幻想郷文芸として優れた作品。
- 60点以上** 再読に値する作品。
- 50点以上** 読んでも損はしない作品。
- 40点以上** 読めないわけではない作品。
- 39点以下** 読む価値を見出しにくい作品。

第1回稗田文芸賞

主催 紅魔館
選考委員 なし
賞金 なし

『魔法図書館は動かない』パチュリー・ノーレッジ | 紅魔文庫 | 受賞作

79点 霊夢 初めて読んだときはなんかすごい変な話という印象だったけど、改めて読み直してみるとパチュリーの小説にしてはわりと普通のエンターテインメント。っていうかこんなわかりやすい話だったっけ？ やっぱり面白いけど、たぶん意図的に回収してない伏線が多さが今読むとパチュリーにしてはちょっとわざとらしいかも。

91点 萃香 舞台は移動し続ける図書館都市。“物語”の枯渇による都市停止の危機が迫る中、ひょんなことから都市中枢に入り込んでしまった4人の少年少女は、そこに閉じ込められた少女を救うため、新たな“物語”を求める冒険に出る——。こんな変な設定で、中作をガンガン投入するメタフィクショナルな構造でありながら、「世界の秘密を知ってしまった少年少女の冒険譚」というストリートな外枠を採用したおかげで、一気に通読のエンターテインメント性をも兼ね備えた掛け値無し傑作。読書慣れしてから読んだ方が圧倒的に楽しいので、昔読んだままの人は是非再読してほしい。

『殺人人形とタイムトラベラー』十六夜咲夜 | 紅魔文庫 | 候補作

53点 霊夢 未来から来た殺人人形に追い回される、逃走劇ホラーの先駆け。どうにかして殺人人形を撃退する話だと思ってる、時間ネタを絡めて意外な方向に進む。ひねりの利いた展開はさすが咲夜って感じだけど、文体や雰囲気作りにその後の咲夜らしさはあんまり無いので、普段の耽美・ゴシック趣味についていけない人向け。

56点 萃香 無慈悲な殺人人形から逃げ続ける前半のスリリングさと絶望感には素晴らしいんだけど、後半のSF展開は詰めが甘くて都合主義（に思える）なのが難点。タイムパラドックスを棚上げする理屈に私はどーしても納得できない。まあ、咲夜とは時間の捉え方が違うのかもしれないけれど。ハッピーエンドと見せかけて思い切り皮肉なラストは素晴らしい。

『クリムゾン・ナイト』ミス・レッドラム | 紅魔文庫 | 候補作

34点 霊夢 最強主人公が血みどろ無双するだけの話。これに対してアレコレ言うのも大人げないけど、《エターナルマッドストーリー》みたいなネーミングセンスはもうちょっとどうにかなんないの？

41点 萃香 霧深き古城の主たる吸血鬼・ブラッド卿の元に、攻め込んでくるのは悪魔狩りの狂人たち。ブラッド卿による鮮血に彩られた殺戮の夜が始まる。大らかな気持ちで読めばそんなに悪くないけど、首がぼーん、内蔵と鮮血ドバーの繰り返しで残酷描写が単調。どうせなら奇天烈な殺し方の博覧会にすれば良かったのに。

『戦国春秋』門前美鈴 | 紅魔文庫 | 候補作

49点 霊夢 戦乱の世で、拳ひとつで身を立てる女拳士が一騎当千の兵士として活躍する話。そこそこ面白いけど、この5倍ぐらいの分量かけて書くべき内容を1冊分に詰め込んでるせいで、大長編の名場面集にしか見えないのよねえ。

54点 萃香 戦国の世を駆け抜けた女拳士の一代記。世界観などのバックボーンの説明をばっさり刈り込んで、50年近い時間がとてつもない密度で語られる。かなり無理して詰め込んだ感は強いけど、その後の門前美鈴作品の構成要素がだいたい全部詰まってるので、ファンとしては改めて読み直すとかっこう感慨深い。

第2回稗田文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 バチュリー・ノーレッジ、八雲紫、射命丸文、稗田阿求
賞金 50貫文

『桜の下に沈む夢』西行寺幽々子 | 白玉文庫 | 受賞作

72点 霊夢 文章はべらぼうに上手いし、作品全体を貫く幻想的なイメージもすごく綺麗で、するするっと読まされて話がよく解らなくても作品世界に浸ってしまうのは、良いんだか悪いんだか。『忘我抄』っほどじゃないにしても話がわかりにくすぎるので、もうちょっと普通の読者に対するサービス精神が欲しいんだけど。っていうか「結局これどういうこと？」って訊かれるのもう疲れたわ。

萃香 一文一文に超絶技巧の張り巡らされた、芸術作品としての小説の幻想郷におけるひとつの完成形だと思う。一応これでも幽々子の小説の中では話がわかりやすい方。大傑作なのは間違いないが、あまりに技巧が過ぎて全部を把握できている気がしないので、もうひとつ自信をもって凄さを語りにくいのが困りもの。

88点

『氷の王国』 白岩怜 | 博麗文庫 | 候補作

52点 霊夢 リアルな雪山遭難小説。人間が寒さに対してどう抵抗し、どう弱っていき、どう屈服するかを書きっぷりは迫真の一言だけど、主人公のキャラがあんまり立ってないのが弱点かしらね。夏場に読んでると冷房いらずでお得な小説。

53点 萃香 吹雪の雪山からいかにして生還するか、迫真のサバイバル小説。人間用の雪山登山心得を記したハンドブックとしても活用できそうな、遭難時の対策と危機管理のディテールの描写がすごい。エンタメとしてはずーっとピンチが続いて緩急がつかないので、少々単調かな。しかしこの程度で死んじゃう人間は大変だなあ。

『クロック』 十六夜咲夜 | 紅魔文庫 | 候補作

62点 霊夢 時計が壊れた瞬間から周囲の時間が止まってしまう表題作、だんだん若返っていく女性との恋を描いた「リバース」など、時間をテーマに叙情的な泣かせの技が炸裂する6編の短編集。あざとく泣かせを狙いすぎなところが個人的にはちょっと鼻につくけど、実際面白いから悔しい。泣いてなんかないわよ。

68点 萃香 時間SFとして読むと相変わらず理屈が放置されてるのでもちょっと落ち着かないんだけど、話の主眼はそこではなく、時間に引き裂かれる人間たちの哀切であって、SF要素はそのための味付け。そう割りきって読めば、とにかく読者の感情を揺さぶることにかけては嫌味なぐらいに巧みな作品ばかり揃った、たいへんレベルの高い短編集。世間的には一番泣かせ技があざとい「リバース」が人気みたいだけど、個人的なベストはラブレターを何回も渡し続けるループ状況が愉快的「リピート」かな。意識だけ60年後に飛ばされた人間の哀愁を描く「ジャンプ」もいい。

『ナイトメア症候群』ミス・レッドラム | 紅魔文庫 | 候補作

38点 霊夢 最強主人公が血みどろ無双するだけの話。設定とキャラが違うだけでやってることはほとんど『クリムゾン・ナイト』と一緒に。あっちよりは多少こなれてるけど誤差の範囲？

40点 萃香 全5巻のシリーズの1冊目だけど、振り返ってみると大したストーリーも無く残酷描写とバトル描写だけで5冊分書き抜いたことは評価に値するような気がしないでもない。《ナイトメアハンター》《クレイジーキラー》みたいな脱力系のネーミングも今読むと妙な愛敬はあって嫌いにはなれない。

『龍拳伝』門前美鈴 | 紅魔文庫 | 候補作

50点 霊夢 本編の7割ぐらいがアクションシーンな格闘小説。格闘描写はよく書けてると思うけど、主人公の天界追放を巡る謀略の真相を、ラストバトルの前にボスが棒立ちで長々と解説してる絵面は想像すると間抜けじゃない？

61点 萃香 『風雲少女・リンメイが行く！』や『睡拳使いのミレイ』にも繋がってる、通称《天龍拳サーガ》の最初の話。天界を追放された龍の血を嗣ぐ拳士・ホウリンの流浪の旅はここから始まった。『風雲少女』が絶賛クライマックスの今読むと、若々しいホウリンに懐かしい気分になる。今じゃすっかり老成した師匠になっちゃって（笑）。格闘シーンの迫力はこの頃から折り紙付き。その後の関連作と若干辻褄が合わない部分があるのはご愛敬。

第3回稗田文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 パチュリー・ノーレッジ、西行寺幽々子、八雲紫、射命丸文、稗田阿求
賞金 50貫文

『満月を喰らう獣』上白沢慧音 | 稗田文庫 | 受賞作

39点 霊夢 堅苦しい文体とくどい説明で歴史の授業をしながら、「歴史は変えられない」という当たり前のことをやたらもったいつけて書き連ねるだけの話。正直言って何が面白いのかさっぱりわからない。歴史に興味が無いせいで萃香は言うけど、だったら興味を持たせるような話をしてほしいと思うわ。

萃香 史実の裏側に封じられた逸史をめぐる歴史小説。史料を丹念につなぎ合わせて、「あったかもしれない事実」を実際の歴史と重ね合わせにして、もうひとつの歴史を大きな流れとして語る雄大なビジョンは素晴らしいけど、差し挟まる歴史講釈がくどくて退屈なのが困りもの。登場人物の行動もお行儀が良すぎて少し違和感がある。もう少し娯楽性のある語り口なら傑作になったかも。

62点

『星屑ミルキーウェイ』霧雨魔理沙 | 博麗文庫 | 候補作

霊夢 主人公のアリカより、ライバルのマーヤの方に感情移入してしまって、最後のレースには悔しいけど柄にもなく胸が熱くなってしまった。最強でいるのもけっこう疲れるのよねえ、ホント。誰が読んでも面白い、エンターテインメントの王道みたいな話。これを落として『満月を喰らう獣』を受賞させたのが稗田文芸賞最大の謎。

82点

萃香 爽やかさと甘酸っぱさに溢れた、この上なく熱い青春レース小説。ストーリー自体は予定調和と言ってもいいぐらい王道の展開だが、これだけ無垢な最速への憧れ、星空への憧れを真正面から書けるのが魔理沙の強みだろう。幻想郷のエンターテインメント小説の金字塔にして模範解答。ただ、魔理沙にとってはデビュー作でこれを書いてしまったことが足枷になってる感は少々……。

86点

『憂鬱ラブソディ』虹川月音 | 白玉文庫 | 候補作

霊夢 マイルドで人畜無害な癒やし系短編連作。そういうものとしての出来は悪くなかったと思うけど、ぶっちゃけほとんど印象に残らない。っていうかもうほとんど忘却の彼方なんだけど。

48点

萃香 憂鬱を抱えた人々に対して、鬱を肯定的に捉えて自分を見つめ直してみましよう、と語りかける、ちょっと自己啓発っぽい小説。それぞれの憂鬱の理由や、凹んでいるときの思考回路の描写は非常に身につまされ、読んで思わず「あるある」と頷いてしまう。物語としては「凹みました→立ち直りました」というパターンのいい話が続くので、最後の方では飽きてくるのが難。最近何かと凹むことが多い人への人生応援歌としては上出来かな。

50点

『猫のための方程式』 八雲藍 | マヨヒガ書房→稗田文庫 | 候補作

62点 霊夢 老賢者の語る解りやすい数学の話が、各話のハートフルなエピソードにきちんと繋がって、読んでほのぼのできる。聞き手役の猫たちもかわいい。数学なんてちっとも知らない身にもわかりやすくその魅力を語っている点で、慧音の歴史講釈の百倍面白いと思うんだけど。地味っちゃ地味だけど捨てがたい佳作。

51点 萃香 猫にでも解る数学入門書。子供向けと言っていい平易な文体で易しく数学の魅力を語っているので、人里の算術嫌いな子供に読ませるといいかもしれない。でも小説としてはもう少し企みというか工夫が欲しいかなあ。

第4回稗田文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 パチュリー・ノーレッジ、西行寺幽々子、八雲紫、射命丸文、稗田阿求
賞金 50 貫文

『レインボウ・シンフォニー』 虹川月音 | 白玉文庫 | 受賞作

69点 霊夢 落ちぶれた7人の音楽家たちがひとり、またひとりと集まって、奇跡の楽団を結成していく、希望に満ちたおとぎ話。演奏パートの盛り上がりはすごく良いし、個々のエピソードも作り込まれているから読んでる間は減法楽しいんだけど、読み終えて数年経ってみると意外と中身を忘れてたりする。まあ、そのライブ感こそがこの小説の魅力なのかも。

80点 萃香 幻想郷の音楽小説の金字塔。ことばの持つイメージを縦横無尽に駆使して紙の上に七色の旋律を紡ぎ出す様は、下手なアクションシーンなどよりもはるかにエキサイティングな読書体験だ。音楽を小説で表現する、という困難に対する模範解答と言うべき傑作。人間の子供から歳経た妖怪まで万人にお勧めしたい。

『雪桜の街』 白岩怜 | 博麗文庫 | 受賞作

58点 霊夢 雪女と人間の悲恋という、ものすごくベタな人妖恋愛小説。人里の女性層に大受けしたせいでなんやかんや言われがちだけど、季節感の描写がすごく良くて、あざとすぎるラストへの伏線もちゃんと張られている。筋立てのありきたりさに目を瞑れば意外とよく出来ている話。うちとしても儲けさせてもらったしね。

萃香 徹底して通俗的、ベッタベタな人妖恋愛小説。ここまでベタに徹すればいっそ清々しい、とは思わないでもないけど、個人的には痒すぎて読むのが非常に辛い。白岩怜の全作品の中でも特別よく出来てるといってもいいと思うし、いくら阿求がゴリ押ししたとはいえこれが受賞したのが稗田文芸賞最大の謎。

45点

『夜に鳥籠の鍵を』 ミステリア・ローレイ | 稗田出版 | 候補作

霊夢 謎の襲撃者に喰われそうになる前半の緊迫感は抜群なんだけど、話が進むほどに展開は破綻、描写は矛盾して、色んな意味で全く予想のつかない話になっていく。連載のドライブ感重視といえども聞こえはいいけど、単にメチャクチャなだけじゃない？ 大幅に手直しが入った文庫版なら50点以上つけるけど。

46点

萃香 全く読者に先の展開を読ませないことにかけては屈指のサスペンソホラー。整合性なんざ知ったこっちゃない、という勢いで突っ走る後半の展開のハチャメチャぶりには大笑いしたので個人的には好きだけど、誰にでも勧められる小説じゃないか。文庫版は大きく手直しが入って、良くも悪くも普通の逃走劇ものに。それはそれで面白いけど、私は単行本版の無鉄砲さを買いたい。

57点

『紅の血脈』 門前美鈴 | 紅魔文庫 | 候補作

霊夢 絶大な力を持っていた紅の一族の長だった祖父の変死を引き金に、一族の没落と流転の運命を三代に渡って力強く描く大河小説。読みやすい文章で、真相にはミステリー的な解決までサービスされるし、長さのわりに一気に読めて楽しい娯楽作。でも大げさな格闘アクションまで詰め込んだのはサービスのしすぎかしら。

63点

萃香 門前美鈴の書いてきた格闘小説・戦記小説のダイナミズムを、陰謀渦巻く歴史の暗部というテーマと融合させた集大成的な大作、なんだけど、さすがにちょっと長すぎ。あれよあれよと風呂敷を広げる上巻は無敵の面白さだが、下巻に至って引っ張り続けてきた祖父の死の真相が明らかになるとだんだん失速。力尽きたように終わる肩すかしなラストに徒勞感が残る。竜頭蛇尾というか、作者の熱意と労力が、不慣れなミステリー展開の導入のせいでうまく実を結ばなかったというか。惜しい。

52点

『マスカレード・スコープ』 マーガレット・アイリス | 博麗文庫 | 候補作

37点 霊夢 自分とこれから出しておいてなんだけど、せっかく舞台設定も謎もいいのに、いくらなんでもこのオチはちょっと。常識的に考えてこのオチに本を投げ捨てないのは、よっぽどのゲテモノ好きかパチュリーみたいに何か拗らせた奴だけだと思うんだけど。台無し。

65点 萃香 たぶん上で霊夢がボロクソに言ってるだろうけど（笑）、きちんとこのオチへの伏線は張られているわけで、私は言うほどひどいオチだとは思わない。いくらでも酒の肴にできるという意味では希有な作品。小説としての欠点を丸ごと作品全体の仕掛けに取り込んでしまう戦略的な小説かもしれないが、絶対そうとは言い切れないのが困りもの。万人には勧められないが一読の価値ある怪作。

第5回稗田文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 パチュリー・ノーレッジ、西行寺幽々子、上白沢慧音、八雲紫、射命丸文、稗田阿求
賞金 50貫文

『天照戦記 蛙は口ゆえ蛇に吞まるる』 八坂神奈子 | 守矢文庫 | 受賞作

75点 霊夢 神と人の関わり合いと相克を真っ向から描いた戦記小説の名作。神が描く神と人の物語って一とものすごく上から目線の話になりそうなところを、人間よりも人間くさい神様を、それ故に彼女が血にまみれるほどに畏れて遠ざけてしまう人間の弱さを、当然のこととして書いているところが、人間サイドとしては好感度高め。隙らしい隙のない、ものすごく完成度の高い小説だけれど、それ故に読後に引っかかるところがなさ過ぎて、「すごい面白かった」という漠然とした印象しか残らないのが最大の弱点？

89点 萃香 舞台は内陸にある山に囲まれた肥沃な大地。主人公は、その地の人々が崇める土着神だ。神と人が助け合い平和に暮らしていたその大地に、中央政権の軍勢が迫る。敵は三十万、味方は数千。絶望的な状況の中、土着神と人々は故郷を守るため戦いに挑む。力強い文体と容赦の無い凄絶な展開、そして神と人間の物語が人間と人間の物語に昇華される完璧なラストシーンまで巻を描く能わず、一気通読の完璧な徹夜本。およそ文句をつける箇所が見当たらない、幻想郷文芸オールタイムベスト級の傑作だ。必読。

『星盗人と鏡の国の魔女』霧雨魔理沙 | 博麗文庫 | 候補作

57点 霊夢 稗田文芸賞に対して《傾向と対策》を練ってきたみたいなの、幻想的な寓話。本人の目指したところは解るし、ストーリーテリングは達者なので楽しく読めるけど、「文学性ってこういうもんか？」と手探りで書いてる感じで、あんまり板についてない。結局わかりやすいオチがついちゅうあたりまで含めて、良くも悪くも魔理沙の小説になっちゃってるから、全体的にはやや中途半端。

60点 萃香 一見メルヘンな世界観のファンタジーだけど、子供向けの寓話かと思えばさにあらず。メルヘンに見せてドライで即物的な世界観は、『星屑〜』が甘ったると言われて落とされたことへの魔理沙なりの返答か。意欲作なのは確かだが、そういった工夫が前作を超える面白さに結びついているかという点と疑問。稗田文芸賞対策で文学性に浮気したのが仇になった感じ。惜しい。

『うちの上司が横暴なんですけど。』大橋もみじ | 天狗文庫 | 候補作

50点 霊夢 露骨に文がモデルのコミカルお仕事小説。文の傍若無人ぶりを知っているから大笑いして読めるけど、それ以上に特に何かあるわけではないから、結局身内向け小説で終わってる気も。パチュリーがなぜか気に入ってたみたいだけど、何が琴線に触れたのか謎。

49点 萃香 ほとんど作者の実体験じゃないの？ というような、モデルが露骨すぎるコミックノベル。最終的にいい話に落とすコメディとしては普通によく出来てはいるが、よく見知っているモデル当人の反応が気になって冷静に読めないのが難。

『キカイノコトバ』河城にとり | 天狗文庫 | 候補作

46点 霊夢 小難しい技術解説をかつとばせば、話はいたってシンプル。シンプルすぎて長編としては食い足りない感じ。SF的なディテールは詳しくないので評価不能。

56点 萃香 科学技術で道具に《心》を持たせることは可能か、をテーマにした工学ハードSF。ディテールは凝り凝りで読み応えは充分。技術開発へ向ける並々ならぬ熱意がほとばしる、いかにも河童らしい小説だ。ただ、《心》をテーマにするなら、主人公の工学者の人物像をもっと掘り下げるべきだったんじゃないかなあ。そのへんの心理ドラマを増強すれば傑作になったかも。

『落ち葉の季節に逢いましょう』 秋静葉 | 稗田文庫 | 候補作

46点 霊夢 秋の季節感の描写で読ませる雰囲気小説。ストーリーはびっくりするほど薄味。読み心地はいいけど、読んだあとに何が残るわけでもないし、読んでる最中わくわくできるわけでもないから、あらずじ知ってればぶっちゃんけ別に読まなくてもいいんじゃない。

48点 萃香 毎年秋になると届く手紙の差出人をめぐる、穏やかな家族小説。設定からベタベタな恋愛小説になるかと思えばそうはならず、物語はどこまでも淡々と静かに続く。季節感の描写の美味さや、頑なだが姉想いな妹のキャラクターなど美点もあるけど、エンターテインメントとしては起伏に欠けるかな。白岩怜はあざとすぎて苦手という人にはいいかも。

第6回稗田文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 パチュリー・ノーレッジ、西行寺幽々子、上白沢慧音、八雲紫、射命丸文、稗田阿求
賞金 50 貫文（※この回は受賞作なし）

『白狼の咆吼（第1巻）』 大橋もみじ | 天狗文庫 | 候補作

53点 霊夢 単純明快なストーリーと個性的なキャラで読ませる痛快剣豪アクション小説。達者は達者だけど、この巻だけだと特別すごく面白いわけでもない、ごく普通のエンターテインメント。第一部全6巻まとめたの評価は八坂神奈子賞の方で。

62点 萃香 幻想郷文芸史上最大のベストセラーシリーズの第1巻。過去編にあたる4巻を読んでから読み直すと、さりげない描写に山ほど過去編の伏線が張ってあって、なんてことないシーンですら泣けてくるから困る。とはいえそれはあくまで4巻以降を踏まえての評価なので、この巻単体ではこのぐらいの点数が無難か。

『優しい花を咲かせましょう』 風見幽香 | 稗田文庫 | 候補作

52点 霊夢 やさくれた子供の心を園芸で癒してあげる話。文章は上手いし読んでて退屈はしないけど、物語より園芸指南の方に力が入っていて、園芸書のおマケに小説がついてるみたいな感じ。明日使える園芸知識なら園芸書で十分と言われても仕方ないんじゃない。

萃香 端正な文章で、いじけた少女の心の再生がガーデニングに託して語られるほのぼの小説。小説部分より園芸指南の方がメインに見えるが、文章がいいので読んでて退屈することは無い。八雲藍『猫のための方程式』なんかが好きな人向け。

50点

『華国英雄伝』 門前美鈴 | 紅魔文庫 | 候補作

霊夢 個性的な英雄たちの活躍する戦記小説。登場人物は多いけど文章はいつも通り読みやすく、キャラもそれぞれ立ってるので一気に読めるのが美点。門前作品では上の方に入る佳作だと思うけど、慧音は深読みのしすぎじゃない？

55点

萃香 架空の国家《華国》を舞台に、魅力的な英雄たちが群雄割拠する華々しい架空戦記小説。面白いけど、いろいろ詰め込みすぎて全体的にはちょっと散漫。全5巻ぐらいでじっくり書けば傑作になったかもしれない。慧音の選評の、語り手に着目した読みは面白いけど、書き方がさりげなさすぎて上手く機能はしてない気が。

61点

『川の流れる果てる先』 河城にとり | 天狗文庫 | 候補作

霊夢 ちょっと幻想郷っぽい閉鎖世界の秘密を探る話。そりゃまあ、同じ系統の『魔法図書館は動かない』なんかに比べれば小説的に見劣りはするけど、「閉ざされているが、どこかと繋がっている」世界というビジョンに不思議な郷愁を覚える。印象的な佳作。

59点

萃香 博麗大結界に閉ざされた幻想郷のあり方に対する大胆な考察小説……だとばかり思ったら作者いわく全然違ったらしい箱庭世界SF。技術に関する考察が緻密なわりに、社会に関する考察がいかにも弱く、結果として孤独な少女が空想の世界で遊んでいるだけの話にも見えるのが難点。幻想郷小説として読めば面白いんだけど、違うらしいのでどうしたものかね（苦笑）。

54点

『ビスクドールの枢』 マーガレット・アイリス | 博麗文庫 | 候補作

霊夢 肢体消失トリックを軸にした人形ミステリだけど、肝心のトリックは肩すかしで、殺人の動機はよくわからない。一応ちゃんとしたオチがついてるだけ『マスカレード・スコープ』よりはいいけど、《心の在処》をテーマにしているわりに登場人物の思考回路がベタすぎるのが最大の問題。本気出してないだけ？

47点

萃香 死体消失トリックが主眼と見せかけて、この作品のミステリ的な眼目は、魔法使いの《異質な論理》。しかしその肝心の動機が明らかに説明不足で、魔法使いでない人間にはさっぱり理解できないのが困りもの。『マスカレード・スコープ』ほどの衝撃はない。ヒトとヒトガタ、心の在処という主題もまだ板についてない感じ。

49点

『幸運エスケープ』 因幡てゐ | 竹林文庫 | 候補作

霊夢 前半、まだ常識的な騙し合いをしているあたりは面白いけど、後半になると嘘がエスカレートしすぎてついていけない。ちゃぶ台が何回転したのか数えるのも面倒でどうでもよくなっちゃう。結局、どっちが財宝手に入れたわけ？

48点

萃香 師匠の遺産を巡る、新米詐欺師とベテラン詐欺師痛快コンゲーム小説。詐欺師同士の虚々実々、丁々発止のやりとりで騙し騙され、物語は二転三転どころか八転九転、嘘がはてしなくエスカレートしていく様に爆笑。どう考えても最終的に手に入る金額以上の金を詐欺のために投資している気がするが、そんなところにツッコミを入れるのは野暮か。因幡てゐの語りと騙りの技術が、物語と直結して愉快痛快なエンターテインメントに仕上がった傑作。

72点

『さようなら、恋』 水橋バルスイ | 地底文庫 | 候補作

霊夢 全力でツッコミ待ちのストーカー小説。どう考えても主人公が全部悪いのに、全力で他人に責任転嫁して嫉妬し続ける構図はブラックジョークとして読めば笑えるけど、結局行き着く先が無理心中じゃ予想通りすぎて肩すかしよねえ。いい話にされても困るけど。

45点

萃香 片思いする主人公の嫉妬にまみれた心情を赤裸々に描く恋愛小説というか、実質ホラー小説。完全にストーカーの主人公が全く自分の行動を顧みようとしないあたりが妙にリアル。鬼気迫る嫉妬描写はなかなか読み応えがあるが、ギャグとして読む前に個人的にはドン引き。挙げ句の果てにラストがこれでは……。色んな意味で珍品。しかし何も永月夜姫『あの月の向こうがわ』(85点)を差し置いてこれを候補にしなくても。

38点

第7回稗田文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 パチュリー・ノーレッジ、西行寺幽々子、上白沢慧音、八雲紫、射命丸文、稗田阿求
賞金 50 貫文

『輪廻の花』 風見幽香 | 稗田出版 | 受賞作

65点 霊夢 大筋は白岩怜が書くような、ものすごく通俗的な恋愛小説なんだけど、端正な文章と人物描写の妙でそれを全く感じさせない。個人的な趣味でいえばどうでもいいけど、技術的にはめちゃくちゃ上手い。ていうか上手すぎて嫌味。

80点 萃香 生まれ変わる人間と、長く生き続ける妖怪の時を超えた愛を、咲き続ける花の姿に託して語る恋愛小説。語り手の立場によって全く違う姿を見せながら、一切軸のぶれないヒロインの造形がすばらしい。第四話（老婆の話）で、向日葵畑で酒を酌み交わすシーンは鬼の私が不覚にもボロ泣きしてしまった。個人的に好む類いの小説ではないが、この完成度で出されたら参りましたと両手を挙げて降参するしかない。幻想郷における《時を超えた愛》というテーマの模範解答にしてスタンダードたる傑作。

『不幸のシステム』 厄井和音 | 天狗文庫 | 候補作

55点 霊夢 厄祓いの神様が、人間の不幸の元を解き明かして解決していく連作。単なるいい話かと思っていると、ミステリ的なひねりの利いた話がいくつかあって、地味ながらけっこう楽しく読める。大したことのない不幸でも重く書きすぎなところはあるけど、他人から見たら大したことない話も本人にしてみりゃ切実よねえ。

52点 萃香 小松町子『そして、死神は笑う。』と好一對な、人間が大好きな厄神様の連作。個々のエピソードはよく作り込まれているが、人間の《不幸》の描き方が一本調子で、生死に関わるような不幸も、大したことのない不幸も同じような読み口になるのが弱点か。全部いい話で終わるところも含め、妖怪よりも人間向きの連作。

『そして、死神は笑う。』 小松町子 | 是非曲直庁出版部 | 候補作

59点 霊夢 仕事をしない死神が、三途の川を渡る前の死者の未練を解決する連作。形式は『不幸のシステム』とそっくりだけど、こっちの方が軽くて楽しい。生も死も笑い飛ばすぐらいが幻想郷らしいっていう文の選評に同意しとくわ。

萃香 死にゆく者たちの抱える未練についつい手を貸してしまう、心優しい死神が主人公のハートフルな短編連作。名も無き人々のささやかな幸せを切り取った人情小説としてはほぼパーフェクトな出来。一見重いテーマを扱っているように見せて、ライトな読み口でしみじみとした感慨を呼び起こす。なんとも心温まる連作だ。

64点

『人形の森』 マーガレット・アイリス | 博麗文庫 | 候補作

霊夢 心を得た人形の悲恋話。変に捻ったことはやらない、さらっと読める小品で、そう悪い出来じゃないけど、短すぎてほとんど印象に残らない。っていうかもうほとんど覚えてないわ。

51点

萃香 第5回で候補漏れした『マリオネットは悲しまない』(58点)と対を為すような恋愛小説。しかし心理描写を掘り下げずにさらっと流すので、もうひとつ作品全体が悲恋ものとしては切実さに欠ける気が。もう少し分量を増やしても良かったと思う。

50点

『幽霊客船はどこへ行く』 船水三波 | 命蓮寺文庫 | 候補作

霊夢 海のない幻想郷で海洋冒険小説を書こうっていう無謀な度胸はいいけど、舞台がイメージし辛いのよねえ。話はシンプルなスペクタクルもの。爆発音を「ドガァン」って大きいフォントで書く文章は慧音に「粗雑」って言われても仕方ないんじゃない？

53点

萃香 幻想郷では馴染みのない海洋冒険小説ながら、一度ページを開けばワンシタティング、波瀾万丈の娯楽小説。畳みかけるようなストーリーテリングもさることながら、白眉は気むずかしい老潜水艦長と主人公チームの絆の描写で、クライマックスで宝そっちのけで沈みゆく幽霊客船から潜水艦長を助け出そうとする場面はありがちな展開ながら胸が熱くなる。展開に御都合主義な部分は目につくし、文章はお世辞にも上手くはないが、ストレートに面白い小説が最近少ないとお嘆きの人には非常にオススメ。

65点

『インビジブル・ハート』 米井恋 | 旧地獄堂出版 | 候補作

霊夢 全く予想のつかないめちゃくちゃな展開にしる、悪文の極みみたいな文章と端正な表現が同居する妙な文体にしる、他では読んだことがない極めつけに変な小説。ものすごく上手い部分と、単に下手にしか思えない部分が混在して読んでると頭痛がするけど、読み終えてからじわじわ面白かった気がしてくるのが謎。パチュリーが入れ込む理由も、慧音が激怒する理由もよくわかるわ。

60点

萃香 インパクトという意味では歴代最大級の珍品。整合性なんか知ったこっちゃないという展開に加え、文章はめちゃくちゃだし、構成も小説的な常識から大いに逸脱しているが、不思議とどんどん読めてしまい、完全に破綻していること自体がひとつの壮大なギャグとして完結しているような気さえしてくる。そのくせ、場面場面を取り出すとまるで感動大作のような輝きを放つからわけがわからない。普通の読者にはとっては怒って壁に投げる失敗作だろうが、パチュリーの奇想小説が好きな人なんかには爆笑の傑作。

66点

第8回稗田文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 パチュリー・ノーレッジ、西行寺幽々子、上白沢慧音、八雲藍、射命丸文、稗田阿求
賞金 50貫文

『土の家』黒谷ヤマメ | 旧地獄堂出版 | 受賞作

霊夢 地底のリフォーム業者が主人公のコミカルなお仕事連作小説。引きこもりを家から出すために家ごと改築しちゃう話に爆笑。地底社会の投影云々は深読みだと思うけど、そういう風にも読めるからこそこういうコメディが受賞したのかしらね。お仕事コメディとしては幻想郷の同種の小説の中でもベスト級。

68点

萃香 外枠はお仕事コメディだけれど、コミカルな描写の端々に滲み出る地底社会の姿に、元地底住民としては深く感じる。誰でも楽しめるコメディ小説の中に鋭い観察眼を忍ばせた快作であり、大仰にテーマを演説調で語る小説よりもよほど上品で上等。これに稗田文芸賞が与えられたのは言祝ぐべき慶事だと思う。

72点

『雲の上の虹をめざして』河城にとり | 鴉天狗出版部 | 受賞作

霊夢 個人的にロケットにいいイメージが無いのはさておくとしても、孤独な少女の救済の話だったはずなのに、あまりに夢も希望もないラストに徒労感だけが残る。なんでこんな結末に行かなきゃいけないのか、私はどうしても納得いかないわ。

42点

萃香 とかく結末をめぐる賛否両論真つ二つの作品だが、私はこの作品は夢を追った先の希望の話であり、ハッピーではないかもしれないけれどこれしかないトゥルーエンドだと思う。技術開発のディテールと、キャラクターのドラマが上手く両立できているが故の賛否両論だとすれば、やはりにとりの最高傑作はこれだろう。

65点

『フェアリーウォーズ』 霧雨魔理沙 | 博麗神社 | 候補作

65点 霊夢 『星屑ミルキーウェイ』の直系にある、直球勝負の妖精バトル小説。相変わらず敵対する者同士、互いの事情と闘う理由をきっちり描いて、悪意のない爽やかな読後感のラストへ結びつけるストーリーテリングは達者で面白い。ただ妖精の話として読むには主人公も敵方も真面目というか良い子すぎ。そのくせ相手の話を聞かないので「少しは融通効かせたら？」とちょっとじれったい。

67点 萃香 いい歳した人間や妖怪じゃ青臭すぎてやれないような、ものすごくストレートな友情の話を語るのに、妖精を主人公に持ってきたのは慧眼。最終的に誰も悪者がいないという構図になる点といい、ジュヴナイル系友情バトル小説の優等生的作品。たいそう面白いけど、まとまりが良すぎてやや展開が恣意的。『星屑ミルキーウェイ』ほどのパワーはなく、あと一步で傑作になり損ねた感じ。

『そして大地は眠る』 門前美鈴 | スカーレット・パブリッシング | 候補作

47点 霊夢 地震の元凶をタコ殴りに行くという展開への心当たりはさておき、地底の神様をぶっとばすところまではいいとしても、ただの人間が拳ひとつで地震そのものまで止めちゃうのはいくらなんでも。最後は主人公に都合が良すぎて寓話か何かにしか見えない。

92点 萃香 大災害を前に己の矜持を叩き折られた格闘家が、誇りを取り戻し愛する者を守るため拳ひとつで世界を救いに行く、門前美鈴の格闘小説の最高傑作。信念を込めた拳は大地をも砕くという設定の一点突破で最後まで突き抜ける潔さが素晴らしい。運命も道理も些末な小説作法もまとめてぶっ飛ばす、この圧倒的な物語の力強さに魂が震えない奴は軟弱者だと声を大にして言いたいんだけど、悲しいかな理解してくれるひとが少ない。なぜだ。

『大海原の小さな家族』 船水三波 | 命運寺 | 候補作

※第1回八坂神奈子賞の欄を参照

『月下白刃』 永月夜姫 | 竹林書房 | 候補作

58点 霊夢 二重人格の剣士が血に飢えた半身を減ぼすため彷徨する話。ミステリ的な味わいも投入しつつ、そつのない出来にまとめた剣豪小説だけど、永月作品の中では凡作よねえ。『あの月の向こうがわ』を外しておいて何もこれを候補にしなくても。

60点 萃香 青春SFからサスペンスホラーまで何を書かせても水準以上のものを書く永月夜姫だけに、初の剣豪小説のこの作品も手堅い出来。いかにも依頼されて書きましたという感じがする（主観）ので驚きは無いが、永月夜姫の安定した実力は十分に感じられる一冊。

『無限の殺人』 富士原モコ | 竹林書房 | 候補作

57点 霊夢 「殺人者はなぜ不死者を延々と殺し続けるのか？」という謎を主眼においたミステリ。寿命ある者には咄嗟に理解しかねる独特のロジックという妹紅ミステリの醍醐味は存分に発揮されてるけど、『屍は二度よみがえる』のあとでは確かにちょっと地味かも。

52点 萃香 富士原モコお得意の《異質な論理》をフィーチャーしたミステリだけど、第7回で候補にならなかった傑作『屍は二度よみがえる』(76点)の焼き直しというか縮小再生産っぽいところが少々。あらゆる点で『屍は〜』の方が出来は上なのに、あっちを漏らしてこっちを候補にした予選委員の判断には大いに異議あり。

第9回稗田文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 バチュリー・ノーレッジ、西行寺幽々子、上白沢慧音、八雲藍、射命丸文、稗田阿求
賞金 50貫文

『六花』 古明地さとり | 旧地獄堂出版 | 受賞作

49点 霊夢 それぞれ文体の異なる六つの手記を書き分けて、ひとつの事件を重層的に浮かび上がらせるメタミステリだけど、そういう構造の話は既にバチュリーが書いてるし、最大の特色の文体模倣も、作者本人のことを知っているともあまりそこで高く評価する気にはなれない。それらを抜きにして見ると、単純なものを不必要にややこしくしてるだけの話に思える。文学性ってそういうものだったけ？

萃香 メタミステリ的手法的にはパチュリーの後追いつぱいけど、既存作家6人分の上手すぎる文体模倣によって、ひとりアンソロジータンみたいなお得感のある小説。二読三読してもなかなか全貌は掴みきれないが、なんとなく完全無欠の答えがありそうに思えるあたりがミソ。読み甲斐のある小説だけど、もうちょい読者に親切でもいいのでは、とは思わなくもない。

74点

『ドールハウスにただいま』 マーガレット・アイリス | 博麗神社 | 候補作

※第1回幻想郷恋愛文学賞の欄を参照

『盤上の将を射よ』 大橋もみじ | 鴉天狗出版部 | 候補作

60点 霊夢 大将棋の「だ」の字も知らないような人間にも楽しく読ませる大将棋小説。冷静になってみると後出しジャンケンの嵐にしか見えない対局シーンをこれだけ読ませるのは流石の技術といえるかなんとか。誰が読んでもそれなり以上に面白い娯楽小説の見本。

70点 萃香 大将棋の複雑怪奇なルール説明をばっさり切り落として、多彩な駒の動きをスベルカードの応酬みたいに書くのが大橋もみじ一流のセンスであり、幻想郷ナンバーワンの大衆娯楽小説作家としての技術。内面を深く掘り下げずにキャラを立てる巧さや、緊迫感ある状況を構築する展開の無理のなさなど、大橋もみじのテクニクの見本市みたい。いきなり『白狼の咆吼』を買いそろえる度胸のないひと向けの、大橋もみじ入門としてはモアベター。

『くるくる回るオルゴール』 厄井和音 | 稗田出版 | 候補作

56点 霊夢 消えた恋人を追いかけ続ける主人公の心理を追う話。追いかけ続けた恋人が、最後の最後によく登場して、けれど一言の台詞もなく幕を閉じるというラストにはちょっと感心。心理描写の書き込みが多すぎて中盤ダレるのは難点だけど、主人公の切実さはなかなか真に迫ってる。佳作だけど相手が悪かったかしらね。

46点 萃香 恋人に逃げられた女のやり場の無い鬱屈と、恋人に対する自分の感情への懐疑を延々掘り下げる話なので、イマイチ読んでて楽しい気分にはなれない。追っかけて追っかけて、最後ようやく諦めたら向こうが一周して追いついたっていうオチも脱力。話がベタなパターンの繰り返しなのも含めて個人的には割とどうでもいい。

『動物屋敷の仙果さま』小松町子 | 是非曲直出版部 | 候補作

50 点 霊夢 説教臭い正体不明の仙人・仙果さまがお悩み解決をするっていう連作だけど、なーんかこの主人公が知り合いのような気が知てならない。話はわりと毒にも薬にもならない感じのハートフル系。さすがに上手いけど普通すぎて言うことがない。

54 点 萃香 説教臭いくせに世間知が足りず、変な失敗が多い仙果さまのキャラクターが魅力的な連作。なんてことのない話だが、人情話を書かせたら天下一品の小松町子だけに、技術的には優秀。しかし動物キャラはもうちょっと上手い使いようがあったのでは。

『リピート・アフター・ミー』幽谷響子 | 命蓮寺 | 候補作

47 点 霊夢 ラストシーンの輝きは抜群。でもシチュエーションのありがちさはともかく、赤子に言葉を教えていく前半は退屈だし、後半の主人公の鬱屈描写も陳腐で、小説としては欠陥が目立つ感じ。せめてこの2/3の長さだったらまだ良かったと思うけど。

51 点 萃香 妖怪が赤ん坊を拾って育てる話。ありがちなシチュエーションにありがちな展開で、パツとしないなあと思っていると、ラストシーンに至って不意打ちのような感動が襲い来る。おかげで読後の印象は非常に良い。不器用で荒削りだがこの輝きは買える。

第10回稗田文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 バチュリー・ノーレッジ、西行寺幽々子、上白沢慧音、八雲藍、射命丸文、稗田阿求
賞金 50 貫文

『いじわる巫女と三匹の妖精』霧雨魔理沙 | 博麗神社 | 受賞作

霊夢 まるっきり自分のことが書いてある小説なので採点はパス。『うちの上司が横暴なんですけど。』を書かれた文の気持ちがよく分かったわ。しかしよりによって魔理沙にこれであげなくても。

63 点 萃香 いじわる巫女にちょっかいを出す三匹の妖精の目から幻想郷を描く連作。コミカルな掛け合いや、お約束のオチを繰り返して飽きさせない趣向など、地味な話ではあるが、さすがに魔理沙だけあって楽しい小説になっている。黒谷ヤマメ『土の家』の地上版、と考えるとこれへの受賞もまあ納得といえば納得。

『永遠の途中で』 富士原モコ | 稗田出版 | 候補作

63点 霊夢 自伝的小説って聞いて自画自賛か自己憐憫かと身構えてたら、意外とシニカルな視点で自分の半生を振り返って、長さのわりにけっこう面白い。長生きしすぎるのも大変ねえ、としみじみ。後半、どう見ても慧音なヒロインが登場してからはちょっと筆の勢いが鈍るけど、小細工を弄さない愚直な書きっぷりもわりと好感。

69点 萃香 千年以上を生きてきた不老不死の人間の、流浪の歳月を力強く語る著者の自伝的大長編。単行本二段組で上下巻合わせて800ページという無慮の大作だが、さすがに渾身の力だけあって長さに見合うだけの面白さはある。詰め込まれた重いテーマの全てに答えを出してはいないが、それも含めてのこのほろ苦いラストかな。しかし9割方受賞は動かないと思ってただけだなあ。

『バイバイ、スプートニク』 永月夜姫 | 竹林書房 | 候補作

74点 霊夢 『あの月の向こうがわ』の裏側を描く青春SF。設定的には後付けなんだろうけど、それを全く感じさせないぬけぬけとした辻褃合わせっぷりと、悲劇の約束された物語をこれだけ楽しく読ませてしまう語りの技術に脱帽。めちゃくちゃあざとく泣かせにしているのに、読んでる間は作為を微塵も感じさせない。上手すぎ。

82点 萃香 著者の出世作『あの月の向こうがわ』で賛否両論を巻き起こした衝撃のラストの背景を説明するのがこの話の主眼だけど、そこは敢えて説明しなくても良かった気はする。しかしそれを差し引いても、前作と遜色のない傑作であることに変わりはない。前作の読者は「やめてくれ、もうこれ以上読ませないでくれ」と呻きながらもページを捲る手が止められなくなること請け合い。単体でも読めるけど、是非『あの月』とセットでどうぞ。

『緑色の眼をした私』 水橋パルスィ | 旧地獄堂出版 | 候補作

63点 霊夢 鏡に映った自分自身に惚れてしまった少女のダークな恋愛小説。客観的に見れば美人の部類に入るのに、自分は世界一醜いと信じている主人公の主観と客観のズレがどンドンエスカレートして洒落にならないことになっていく、ブラック極まりない展開に爆笑。誰もフォローしてくれないってのが振り返るとちょっと切ない。

71点
萃香 4年前の『さようなら、恋』とはまるで別人の作。語り手の独りよがりな思考回路を、諧謔的に客観視する視点を得たことで、迫真の嫉妬描写の全てがとてつもなくブラックなコメディに転換する、その転換の鮮やかさが見事。下手に書けば説教臭いジュヴナイルになりそうなのを、最後まである種のサイコホラーとして突き抜けることで、爆笑と戦慄の傑作に仕上がっている。

『雲海の守護者』 三輪雲衣 | 命蓮寺 | 候補作

47点
霊夢 友情と呼ぶには距離の近すぎる気もする、飛行船の船長と護衛の拳士の友情冒険譚。つまらなくはないけど、あまりに普通の若年層向け冒険小説で、特に言うことが思い浮かばない。後半がどうにも説教臭いのはマイナス。

46点
萃香 エロティックな耽美小説を書いた三輪雲衣初の冒険小説。そう悪い出来でもないけど、耽美的なキャラの関係性と、明朗冒険活劇と、抹茶臭いテーマが上手く噛み合っていないくて、どうにも収まりが悪い。読者の妄想を煽るのもほどほどに。

『腐乱ドール』 青娥娘々 | 道書刊行会 | 候補作

62点
霊夢 明らかに倫理観や価値観がおかしい連中の、奇妙な関係や狂気を描いた短編4編を収録。どの話も出来はいいけど、『肢体』ほどのインパクトは無いかしら。他人と違ってしまった人間の苦勞を描いた「耳子」が身につまされる。ミス・レッドラム的な露悪趣味にはちょっとついていけないところはあるけど、富士原モコのミステリなんかが好きなのはハマるんじゃない？

73点
萃香 ゾンビ少女とその主の奇妙な関係を描いた表題作ほか、どれも年間の短編ベスト10入りしそうなクオリティの作品が揃った非常にハイレベルなホラー短編集。題材や描写の悪趣味さのわりに、小説の作りが真っ当すぎるほど真っ当なところに若干の物足りなさはあるけど、総じて満足度は非常に高い。無関心の残酷さをコミカルに描く「とじこめられて」が白眉。《異質な倫理》によるミステリ的にも読める「炎のめざめ」もいい。

第1回八坂神奈子賞

主催 鴉天狗出版部
選考委員 八坂神奈子、永江衣玖、伊吹萃香、姫海棠はたて
賞金 60 貫文

『白狼の咆吼 (全6巻)』大橋もみじ | 鴉天狗出版部 | 受賞作

69点 霊夢 第一部が完結したタイミングで賞作って即受賞はいかにもお手盛りくさいけど、実際読むと面白いのは確か。まとめて読むと意外と周到に書かれてることがよく解ってちょっと感心した。今やっ
てる第二部も面白いけど、ここで完結すべきだったんじゃない？

90点 萃香 3巻までを助走に、全ての因縁が明らかになる4巻から物語の面白さは比類無き高みに飛翔する。決戦の下準備だけでべらぼうに読ませる5巻を挟んで、過去と現在の両方が決着を迎える6巻の盛り上がりはすさまじい。魅力的なキャラクター、周到な伏線回収、単純な勧善懲悪に留まらない物語の懐の深さまで、およそ完璧。選考会では諸般の事情から受賞に反対したけど、作品のクオリティには何の文句もない。売り上げ的にも内容的にも、幻想郷文芸史上に燦然と輝くエンターテインメント小説の金字塔。惜しむらくは人気が出すぎて、この完璧なラストで完結しなかったことか。

『大海原の小さな家族』船水三波 | 命蓮寺 | 受賞作

61点 霊夢 ほのぼのサバイバル小説っていうと「何それ？」だけど、実際そうとしか言いようがないハートフル遭難小説。サバイバルものを期待して読むと緊迫感のないご都合主義の嵐だけれど、これはタイトルが示す通りの癒やし系疑似家族小説で、そういうものとしては非常によく出来ている。口語調で大げさな文章は読みやすいけど、小説というより上手なお喋りを聞いているみたいなのが難。

70点 萃香 無関係だった人たちの間に絆の芽生えていく話を書かせれば、船水三波の右に出るものはいないということを示した疑似家族小説の秀作。登場人物が皆、それなりに鬱屈を溜め込んだ中、わりと打算的に疑似家族を構成していくうちに、少しずつ互いを認め合っ
て、自分自身の問題にも向き直っていくという構図はありがちといえ
ばありがちだが、個々の打算が最後まで抜けないおかげで、物語は微妙に予定調和から逸脱する。大海原の真ん中で、釣った魚とポケットに入ってた焼酎で宴会を開く場面が抜群にいい。

『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』 因幡てゐ | 竹林書房 | 候補作

67点 霊夢 スリリングな誘拐ミステリだと思って読んでると、最後の最後まで全ての様相が一変する、二度読み必至のいかにもてらしい叙述もの。ラスト1ページのちゃぶ台返しを綺麗に成立させるための微妙な違和感の持たせ方はさすが本職だわ。初読で驚愕、再読で納得、1冊で3冊分くらい楽しめるという意味でお得な小説。

73点 萃香 因幡てゐ作品は毎回、読者の勝手な思い込みを利用して綺麗な巴投げを決めるわけだけれど、この作品もそのテクニックが冴えに冴える。仕掛けがあるぞと身構えて読み始めても、本筋である誘拐ミステリパートの面白さのおかげで最後には綺麗に騙されること請け合い。これだけの大仕掛けを、エンターテインメント性に溢れた物語と同時に成立させる技術はもっと評価されるべき。

『幽霊屋台の縁日騒動』 小松町子 | 是非曲直行出版部 | 候補作

58点 霊夢 ハートフル系縁日屋台繁盛記。何しろ作者が小松町子だから内容はコテコテの人情ものだけど、そのコテコテっぷりがお祭りの楽しい雰囲気と噛み合って、ベタな話なりに楽しく読ませる。驚きはないけど、誰でも安心してそこそこ楽しめる無難な一冊。

66点 萃香 老若男女人妖問わずの万人向けお祭り縁日小説。縁日の騒がしさと楽しさの描写は素晴らしい。予定調和の話を用意通りに書く金太郎飴的な安心感の人情ものなので新鮮な驚きはないが、個々のエピソード作りにしろ、キャラ立てにしろ、屋台同士の距離感の描写にしろ、つくづく上手いなあと実感できる。中有の道のプロモーション小説としては完璧な出来。

『そして大地は眠る』 門前美鈴 | スカーレット・パブリッシング | 候補作

※第8回稗田文芸賞の欄を参照

第2回八坂神奈子賞

主催 鴉天狗出版部
選考委員 八坂神奈子、永江衣玖、伊吹萃香、古明地さとり、姫海棠はたて
賞金 60 貫文

『井戸の底にて空を見る』黒谷ヤマメ | 旧地獄堂出版 | 受賞作

53点 霊夢 地上と地底の戦争小説、って設定がそもそもどうなの？ってのは
さておき、地上の有力者として登場する連中がどっかで見たよう
な奴ばかりで苦笑。どうせならいっそ全員実名で出すぐらいの方
が良かったんじゃないの？ 半端に似てる部分と似てない部分が
混在するので、読んでて落ち着かないのよねえ。

78点 萃香 地上と地底の全面戦争を避けるため、休戦協定を結ぶべく地上に
潜入する地底のスパイの活躍を描く冒険小説。現実の幻想郷妖怪
勢力図を下敷きに、幻想郷のアクチュアルな問題に挑む意欲作だ。
ハードボイルド・スパイアクションとしても上出来だが、徹底し
て主人公の内面描写を避けることで保ってきた、張り詰めた糸の
ような緊迫感が最後に崩れ去り、一転してウェットな情景に辿り
着く結末は、ものすごく身につまされて鬼の目にも涙。現実の地
上に照らすと不自然な点はあるが、志の高さに惚れ込む野心作。

『さよならラバーリング』河城にとり | 鴉天狗出版部 | 候補作

56点 霊夢 偶然生まれた新素材が幻想郷に革新を起こす話。底抜けに明るい
希望に溢れたおとぎ話なので、にとりの小説の中では一番物語に
入り込みやすい。技術が導く素敵な未来というビジョンにはあん
まり心惹かれないし、何もかも上手くいきすぎる話なのでちょっ
と疲れるところはあるけど、夢も希望もない話よりはよっぽどい
いんじゃない。でも現実の河童どもはもっと姑息よねえ。

55点 萃香 河童の願望充足系技術開発シミュレーションSF。「技術は未来を
明るくするもの」という素朴な信頼に基づいて、性善説に則った
トントン拍子の展開で「今より少し素敵な未来」を幻視する。小
説技術的にはさすがに初期よりずっと上手くなっているから読ん
でてて退屈はしないけど、ご都合主義に溢れている感は否めない。
まあ、そこが魅力と言われればそうなのかもしれないけど。

『盤上の将を射よ』大橋もみじ | 鴉天狗出版部 | 候補作

※第9回稗田文芸賞の欄を参照

『遙かなる天獄』 比那名居天子 | 天界舎 | 候補作

44点 霊夢 地上に落ちこちた天人が苦勞する話。傲慢な主人公が地上での暮らしで謙虚になっていく様を成長小説として読むのが正しいんだろうけど、個人的には「いい気味だわー」と思いながら前半を笑いながら読む方が楽しいというか、そう読まない面白くない。

42点 萃香 謙虚に自分を見つめ直すことを覚えたという点で、比那名居天子作品としては新境地を拓いた作品だと思うけど、じゃあ面白かったかというと……。技術的には初期作品よりだいぶこなれたが、そのせいで個性が薄れた感じ。これより面白い娯楽小説はいくつもあつただろうに、これを神奈子賞の候補にする理由がよくわからない。

『喪心創痍の狂視調律師』 卯堂院レイス | 竹林書房 | 候補作

54点 霊夢 ミス・レッドラム系のゲテモノかと思ったら全然違った。造語とルビの嵐に最初は面食うけど、慣れれば中身はわりと真っ当なジュヴナイル系ファンタジー。文章と設定の破天荒さのわりに話が普通すぎる気はするけど、意外とめっけもん程度には面白い。

49点 萃香 さすがにこの歳になると、良く言えば若々しい、悪く言えばガキっぽいセンスを心の底から楽しむのはちょっと厳しいけれど、話自体は案外普通で、ルビと造語さえ受け入れられれば年寄りでも読める小説ではある。漢字四文字前後の造語にカタカナのルビを振りまくるノリに興奮する人は15点ぐらいプラスして考えてOK。

『ベラドンナの奇術』 十六夜咲夜 | スカーレット・パブリッシング | 候補作

71点 霊夢 鈴奈庵に置いてある外来本で見たような感じの謎解き小説。奇想天外なトリックと意外性抜群の真相は見破れず不覚にも感動。よくもまあこんなこと考えるわね。でも外の世界ならともかく、スキマでの運命操作だの時間停止だの壁抜けだの出来る連中がゴロゴロいる幻想郷で、人間が小細工を弄して犯罪を隠そうとする話を書いてどうすんのよ、ってツッコミは野暮？

70点 萃香 外来本と比べても遜色ない、堂々たる館ものの本格ミステリ。精緻なロジックで全ての伏線が綺麗に繋がりが、意外な真相が明らかになる、快刀乱麻の解決の美しさには惚れ惚れする。読者の意表を突いた時間の扱いは、時間SFロマンスの名手・咲夜の面目躍如。本格ミステリの醍醐味を余すところなく伝える秀作だ。

第1回幻想郷恋愛文学賞

主催 博麗神社
選考委員 白岩怜、風見幽香、東風谷早苗
賞金 10 貫文

『ドールハウスにただいま』 マーガレット・アイリス | 博麗神社 | 受賞作

70点 霊夢 今まで作品を淡泊に見せていたさらっとした筆致が、そのまま洗練されてきて、何気ない描写で文章に陰影をつけるのが格段に上手くなったと思う。ヒトとヒトガタ・心の在処というテーマと、心理描写を流す作風、ラストでの仕掛けという構成要素が綺麗に絡み合った、アイリス作品のひとつの完成形じゃないかしら。

65点 萃香 幽香が選評で言っていたけど、「普通はみっちり描写するところを敢えて書かない」というアイリス独特のスタイルが、ミステリ的な技巧と見事に組み合わせあって、鮮やかな人物造形の反転を決める、叙述ミステリと恋愛小説の幸福な結婚。しかしドールハウス職人の前半の描写はドリーム入りすぎて個人的にはちょっと痒い。

『膝の上の君』 虹川月音 | 白玉書店 | 候補作

67点 霊夢 日常スケッチ風の、大きな事件の起こらない恋愛小説ってだけなら他にもあるけど、何しろこの2人、喧嘩もしなければすれ違いさえもしないのよねえ。いちやついてるカップルをただひたすら眺めるだけの話。そう要約するとなにひとつ面白くなさそうなのに、虹川月音のしみじみとした文章で書かれると、その平穩すぎる日常が心安らぐ癒しの空間になっちゃうから不思議。お茶飲みながらひなたぼっこする心地よさを読書で感じさせる希有な作品。

46点 萃香 旧友に会いに行ったら新婚ホヤホヤで、顔を引きつらせながらそのイチャイチャを眺めてるときの気まずさが満ちた、なんとも困った小説。構造としては「こんな超いい子の恋人が欲しい」という願望充足小説なのに、巧みな日常描写がそれをリアルに見せてしまう。技術的には感心するけど、個人的には甘ったるすぎてパス。

『くるくる回るオルゴール』 厄井和音 | 稗田出版 | 候補作

※第9回稗田文芸賞の欄を参照

『肢体』 青娥娘々 | 道書刊行会 | 候補作

※第2回パチュリー・ノーレッジ賞の欄を参照

第2回幻想郷恋愛文学賞

主催 博麗神社
選考委員 白岩怜、風見幽香、本居小鈴
賞金 10 貫文

『神恋し森』 秋静葉 | 稗田出版 | 受賞作

57点 霊夢 信仰を失った神様と、信頼を失った人間の恋愛小説。季節感と色彩の描写は上手くて、しみじみ系恋愛小説としては上出来な部類の作品。読み終えた瞬間にはもうどんな話だったか忘れてるけど、なんとなく不思議な寂寥感が残るのがポイントかしらね。

50点 萃香 上手いけど地味というか、地味ながら上手いというか。わびさびすら感じさせるような「普通の」恋愛小説。驚きも盛り上がりもなければ、特に文句をつけるような欠点もないので、なんというか感想が何も浮かばない、書評家泣かせの小説。これに賞を出す白岩怜や風見幽香とは好みが違うなあと再確認。

『声を聞かせて』 幽谷響子 | 命蓮寺 | 候補作

48点 霊夢 設定がミスティア・ローレライの『くらやみのうたはきこえない』の丸パクリすぎて反応に困る。話の展開は全然違うから盗作とは言えないけど、肝心のサプライズも『くらやみのうた』を読んでもらえば一発で想像できちゃうのはどうにもこうにも。『リピート・アフター・ミー』よりは小説として上手くなってるんだけど。

51点 萃香 みんな言ってる通り、ミスティア・ローレライの傑作ジュヴナイル『くらやみのうたはきこえない』と設定がほぼそっくり同じ。とはいえパクリではなく、子供向けの寓話を大人向けの恋愛小説に変奏したと言うべきだろう。小説技術的にはデビュー作より格段に向上しているので、次は作品に独自性が欲しいところ。

『遠雷』 蘇我屠自古 | 道書刊行会 | 候補作

54点 霊夢 病気で昏睡状態の夫を見守り続ける妻の話。ときどき改行すらもなく突然本文が現在から回想に飛ぶので、さらっとした話のくせに読んでて気が抜けない。話自体には起伏が少ないので、ちょっと疲れる。いい話だけど、ラストの真実の使い方はもうひとつ。このネタならもうちょっと上手く違和感を持たせてほしいわ。

萃香 眠り続ける夫を見守る妻の淡々とした日常を、過去と重ね合わせて描く静かな恋愛小説。過去と現在をシームレスに語ることで、過去の幸福と現在と寂寥を際立たせる構成が良い。最後の仕掛けも含めて、短編向きのネタを引き延ばした印象こそあるが、自分のようなコテコテの恋愛小説が苦手なタイプでも読みやすい佳作。受賞はこっちが本命だと思ってたんだけどなあ。

58点

『緑色の眼をした私』水橋パルスィ | 旧地獄堂出版 | 候補作

※第10回稗田文芸賞の欄を参照

第1回パチュリー・ノーレッジ賞

主催 スカーレット・パブリッシング
選考委員 パチュリー・ノーレッジ
副賞 紅魔館附属大図書館永久利用パス

『サブタレイニアン・ラブハート』米井恋 | 旧地獄堂出版 | 受賞作

霊夢 『インビジブル・ハート』よりもさらにぐちゃぐちゃな怪作。奇抜な設定のミス・レッドラムみたいな前半はまだストーリーが理解できるけど、世界創世の話になって以降の展開は支離滅裂の極み。要約すれば「姉が好きすぎて世界を滅ぼしちゃった妹が、姉との楽園を作るため世界を何度も作り直す」って話のはずなんだけど、桶を被った百万の鬼が蜘蛛の糸で天界からバンジージャンプするエネルギーで核爆発が起こる、みたいな全く脈絡のない意味不明の挿話が山ほど挿入されて、読んでも読んでも理解不能という奇怪な読書が体験できる。なんなのかしらこれ。

42点

萃香 世紀の怪作『インビジブル・ハート』を鼻で笑うようなカオスの極みに突き抜けた前代未聞空前絶後の奇書。これを読むと『インビジブル・ハート』はものすごく解りやすく書かれた普通のエンタメに思える。ストライクゾーンの狭すぎる超絶ナンセンスなギャグと、奇想や不条理というレベルを超えた意味不明の設定と展開はさすがの私もさっぱり理解できないが、最終的に辿り着く姉妹愛の境地は不意打ちのように美しい。そしてそれを見るも無惨に破壊する脱力感満点の爆発オチ。これを正面切って大傑作と言えるのは幻想郷広しといえどもパチュリーぐらいのものだろうが、他の誰にも書きようがない、唯一無二の読書体験を約束するという意味では、やはり米井恋はたいへんな才能だと思う。

75点

第2回パチュリー・ノーレッジ賞

主催 スカーレット・パブリッシング
選考委員 パチュリー・ノーレッジ
副賞 紅魔館附属大図書館永久利用パス

『肢体』 青娥娘々 | 道書刊行会 | 受賞作

60点 霊夢 《理想の恋人》という名のフランケンシュタインを作る女の話。人体のパーツに向ける並々ならぬ偏愛と、人間を「パーツの付属品」としか見ない女の狂気を、当たり前の感性のような筆致で描く。インパクトは抜群だけど、話自体は意外と普通。面白いけどね。

萃香 妖怪の書く小説よりもある種妖怪的な感性の炸裂する狂愛ホラー。フランケンシュタインを作っていく過程のグロテスクなディテールや、出来上がった失敗作への愛憎入り交じる描写はとことん露悪的なのに不思議とどんどん読ませ、どこか切なさを残すラストは感動的さえある。ある意味究極の純愛小説ではあるので、これを第1回幻想郷恋愛文学賞の候補にしたのは英断。しかし『サブトレイニアン・ラブハート』と違って小説の文法そのものにはわりと忠実なので、パチュリー・ノーレッジ賞を獲ったのは意外。

第1回稗田児童文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 上白沢慧音、八雲藍、聖白蓮
賞金 20 貫文

『イカロスは太陽を夢見る』 宇津保凜 | 旧地獄堂出版 | 受賞作

74点 霊夢 イカロスシリーズ三部作の完結編。青臭い青春ファンタジーとしては完璧に近い出来。全てを投げ捨てて手に入れたものに一度は裏切られ、それでも前を向いて自分の信じたもののために飛んでいくソラの姿に、不覚にも胸が熱くなってしまった。最後まで重いテーマを扱いながら全然説教臭くないのが最大の美点。でもその一方、最後まで子供より大人に受ける話で終わった気も。

83点 萃香 地底を脱出するまでを描いた1巻、辿り着いた地上での苦難を描いた2巻を経て、物語の舞台は天界へ移り、主人公のソラはひとつの決断を迫られる。自己犠牲の精神を、1巻のラストとの鏡映しによって説教なしに鮮やかに否定してみせる結末がただただ美しい。稗田文芸賞の候補にすらならなかったのが不思議な傑作。

第2回稗田児童文芸賞

主催 幻想郷文芸振興会
選考委員 上白沢慧音、八雲藍、聖白蓮
賞金 20 貫文

『天野ジャックは嘘をつかない』 ニッ岩マミソウ | 命蓮寺 | 受賞作

68点 霊夢 身近にこの主人公みたいな嘘つきのいる身としては微妙に冷静に読めないけど、話としては綺麗にまとまった、よく出来た成長小説。優しい嘘が人を傷つけることをちゃんと書いて、それでも嘘そのものを否定しない結末は、色々思い返すとしみじみ胸に染みる。

76点 萃香 「嘘をつくるとロクなことがない」という教訓話はあるふれてるし、「ただし誰かを救うための嘘は許される」という話もありがちだが、「誰かのために嘘をつくなら、その嘘に最後まで責任を持つべき」ということをきっちり描いたことが慧眼であり、この作品の最大の美点。ありふれた「いい話」のオチの一步先に踏み込んで、ほろ苦くも爽やかな成長小説になっている傑作ジュヴナイル。本家の稗田文芸賞だと選考委員一の頑固者のイメージの強い慧音だが、児童文学についての見る目は確かなんだなあ実感。

稗田文芸賞メッタ斬り！
第127季版 受賞作はそれですか？編

2013年09月22日 初版発行

2018年10月08日 電子版発行

編 著 稗田阿求
共 著 博麗霊夢、伊吹萃香

著 作 浅木原忍
装 画 すけひろゆう
電子版編集 古翠

発 行 幻想郷文芸振興会
Rhythm Five

Special Thanks(敬称略)
大森望 豊崎由美
杉江松恋 アライユキコ

連絡先 <http://r-f21.jugem.jp/>

原 作 上海アリス幻楽団
大森望・豊崎由美
『文学賞メッタ斬り！』(PARCO出版)

本書の無断複製・転載を禁じます。

稗田文芸賞
メツ夕斬り!

幻郷
文想
振興
会芸